

日本語の三つのタイプの「～は～が」構文と
そのインドネシア語に対応する構文との
関係について

Tiwuk Ikhtiari

目次

第一章 序論 …1

- 1.1. 主題及び主語をめぐって 1
 - 1.1.1. 主題・主語による言語類型 1
 - 1.1.2. 文の主題（情報構造） 4
- 1.2. 日本語における「は」「が」について 6
 - 1.2.1. 「は」－日本語の主題マーカ―として 6
 - 1.2.2. 「が」の用法 8
 - 1.2.3. 「～は～が」構文の分類 9
- 1.3. 研究範囲及び研究目的 13
- 1.4. 研究方法 17
- 1.5. 本論文の構成 17

第二章 日本語の「を」格項主題化文とインドネシア語の「di-動詞」及び「Ø-動詞」構文との対応関係 …19

- 2.1. はじめに 19
- 2.2. 日本語の受動文と「を」格項主題化文との共通点及び相違点 20
- 2.3. 日本語の「を」格項主題化文について 23
- 2.4. インドネシア語の「di-動詞」及び「Ø-動詞」構文とその用法 29
 - 2.4.1. インドネシア語の「di-動詞」及び「Ø-動詞」の構文 30
 - 2.4.2. インドネシア語の「di-動詞」及び「Ø-動詞」の用法 32
- 2.5. 小説から取られた日本語の「を」格項主題化文とインドネシア語の「di-動詞」及び「Ø-動詞」構文の実例 40
- 2.6. まとめ 41

第三章 日本語「象は鼻が長い」構文とインドネシア語“Gajah belalainya panjang” 構文について …43

- 3.1. はじめに 43
- 3.2. 日本語及びインドネシア語の「有題文」について 43
 - 3.2.1. 日本語における「有題文」及び「象は鼻が長い」構文について 44
 - 3.2.2. インドネシア語における「有題文」について 48
- 3.3. 「措定文」について 51
 - 3.3.1. 「措定文」が埋め込まれた「措定文」 53
 - 3.3.2. N1 と N2 との間の意味的關係 54
 - 3.3.3. 「象は鼻が長い」構文におけるノ的磁力線 58
- 3.4. インドネシア語の-nya について 59
 - 3.4.1. 接尾辞-nya の用法 60
 - 3.4.2. 名詞を特定する接尾辞-nya 及び英語の the について 63
- 3.5. まとめ 72

第四章 日本語「カキは広島が美味しい」構文とインドネシア語 “Kalau tiram Hiroshima yang enak” 構文との対応関係 …75

- 4.1. はじめに 75
- 4.2. インドネシア語におけるリンカーyang について（句レベル） 77
 - 4.2.1. Foley による結束階層 78
 - 4.2.2. インドネシア語のリンカーyang 80
 - 4.2.3. リンカーyang の使用について 84
- 4.3. 文レベルの yang（分裂文） 87
 - 4.3.1. インドネシア語の「分裂文」 88
 - 4.3.2. 比較の第三者としての英語の「分裂文」とインドネシア語との対応関係 89
- 4.4. 日本語の「A が B だ」構文とインドネシア語との対照 95
 - 4.4.1. 「A」に焦点がある「A が B だ」文 98
 - 4.4.2. 「A」に焦点がある「A が B だ」文とインドネシア語との対照 99

4.4.3. 「B」に焦点がある「A が B だ」構文とそれに対応するインドネシア語 の構文	102
4.5. 日本語の主題マーカ－に対応するインドネシア語 kalau について	106
4.5.1. 日本語の主題マーカ－に対応する kalau	106
4.5.2. 主題及び条件節において同じマーカ－を使用する幾つかの言語	109
4.6. 日本語「カキは広島が美味しい」構文とインドネシア語 “Kalau tiram Hiroshima yang enak”構文との対応関係	113
4.7. まとめ	116

第五章 結論 …118

参考文献 …121

省略記号

DEF	: 定辞
meN+動詞	: インドネシア語の agent voice 動詞形 (インドネシア語の他動詞は、語幹のみと、接頭辞「me-」についている語幹から成立したものである。「me-」には異形態があり、それは付加される語幹の語頭音と鼻音添加現象と、それによって語幹の語頭音が消失する鼻音代償現象によるものである。「meN-」の N は、この鼻音を表し、「meN-」は、「me-」が異形態を含むことを表す。)
DI+動詞	: インドネシア語の patient voice 動詞形 (動作主は第三人称である)
∅+動詞	: インドネシア語の patient voice 動詞形 (動作主は第一人称・第二人称である)
BER+動詞・名詞	: 自動詞を表す、名詞の場合は「～を持っている」を意味する
LINK	: 名詞とその付加語を結ぶためのリンカー yang、文脈によって先行名詞は省略可能
NEG	: 否定
tagQ	: 付加疑問文
1SG/ 2SG/ 3SG	: 第一・第二・第三人称単数
1PL/ 2PL/ 3PL	: 第一・第二・第三人称複数
1SGposs/ 2SGposs/ 3SGposs	: 第一・第二・第三人称単数所有代名詞
1PLposs/ 2PLposs/ 3PLposs	: 第一・第二・第三人称複数所有代名詞
RED	: 重複形
NP (Noun Phrase)	: 名詞句
Aux (Auxiliary)	: 助動詞
Pred (Predicate)	: 述部
Vt (Transitive Verb)	: 他動詞
AP (Adjectival Phrase)	: 形容詞句
VP (Verb Phrase)	: 動詞句
AdP (Adverbial Phrase)	: 副詞句

AdN (Adverbial Noun) : 副詞名詞

VN (Verbal Noun) : 動名詞

太文字、下線、などは、筆者が付けたものである。

//、/、太文字、小型英大文字は筆者がつけたものである。// の前の要素は主題、/ は節の主部と述部を分けるため、小型英大文字は述部を標示する。

第一章

序論

本論文では、日本語の「～は～が」構文の中から次の三つのタイプ：①「ヲ」格項の主題化文（例、「ケーキは山田さんが作った」）、②「象は鼻が長い」構文、③「カキは広島が美味しい」構文を取り上げ、先行研究を整理し、その際、それぞれのタイプがインドネシア語のどのような文と対応するかを提示し、そのインドネシア語の構文について説明を試みることを目指している。日本語の「～は～が」構文とそれに対応するインドネシア語の構文を対照することによって、それぞれの特徴や相違点を探り、両言語についての理解を深めることを目指している。

1.1. 主題及び主語をめぐって

「は」と「が」の使い分けは、日本語学習者にとって困難なもので、なぜ日本語の文の主部は「は」と「が」で区別されるのか、なぜ二種類の主部が必要なのかという疑問は日本語学習者が少なくとも一度は抱くものであるが、実際にはその答えは誰にも分からない。本節では、まず、主題及び主語に関して一般的な考え方を見てみたい。

語について、Sapir (1921) は単一の概念、及び相互的に関連して心理的統一を形成する概念の組み合わせを表しているものであると述べている。日本語の「は」と「が」の概念に関して、「は」は主題のマーカーであり、「が」は主語のマーカーであるということがよく知られている。

1.1.1. 主題・主語による言語類型

「は」と「が」という主題マーカー及び主語マーカーがあることで、日本語は主題と主語卓越言語に所属し、インドネシア語は主語卓越言語に所属することになる。まず言語類型において主題及び主語に関する一般的な定義を見てみよう。

Greenberg (1966)及び Keenan (1976) は、類型論の観点から subject-predicate が言語の普遍的な構成原理であると主張している。Li and Thomson (1976) は、言語を類型的に subject-

predicate 及び topic-comment に基づいて区別することを提案している。英語の例を挙げるならば、その二つの言語タイプは、次のような(1)と(2)の文に代表されると考えられる。

(1) *Dogs* (subject) / *eat bones* (predicate).

(2) *As for education*, (topic) // *John prefers Bertrand Russell's ideas*. (comment).

主語卓越言語の場合は、(1)のような構造を持っており、主題卓越言語の場合は(2)のような構造を持っている。

次に、主題及び主語について幾つかの普遍的な相違点を見てみよう。Chafe (1976)によれば、主題は特定の名詞句でなければならない。久野(1973)も同様のことを指摘しているが、彼は主題をテーマと呼び、テーマは照応（既に述べたこと）または総称名詞、いずれかでなければならない¹⁾と定義している。一方、Chafe は主語の場合は、不定名詞も可能である（例(3)）としている。

(3) *A piece of pie was served with a cup of tea.*

また Chafe は、主題は、文中における動詞との関係を有する必要はないと指摘している。例(4)が示すように「象」と「長い」とは直接関係を持っておらず、一方、主語は、文中の述語と関係を持っている（例(5)）。

(4) 象は鼻が長い。

(5) *John is busy.*

更に Chafe は、主題は、主な述語の空間、時間、または個々のフレームワークを設定すると指摘している。一方、主語の場合は、必ず述語の項として立っている。文中の位置に関しては、主題は文頭にあることが一般的であるが、主語は必ずしも文頭にあるわけではない。その理由として、談話の観点から見れば、談話には情報の並列が含まれるので、談話のテーマが表している主題は、その前に導入されるべきであるからである。

主語に関しては、それが主題のような性質を持っている場合があり、その曖昧性が指摘さ

¹⁾ 久野が言った「テーマ」はプラハ学派の「テーマ」と異なっている。久野による「テーマ」は Li and Thomson が指摘している「主題」と同様であると考えられる。次の節ではプラハ学派による「テーマ」についても少し述べて見たい。

れている。以下の受動文(7)の“*a tree*”は、能動文(6)の“*every orangutan*”に比べて比較的主語性が低いと考えられている。

(6) *Every orangutan* climbed a tree.

(7) *A tree* was climbed by every orangutan.

例(7)では、“*a tree*”が必ずしも同じ「木」を表すとは限らないので曖昧性を有している。このように、受動文における「木」のような主語は、主語というよりはむしろ主題のように振る舞うと考えられる。このことにより、Keenan (1976)は、主語という概念は程度の問題であると指摘している。

左方転位論の観点から、Lambrecht (2001: 1057-1060)は、左方転位文(left dislocation)及び主題化文(topicalization)を区別する必要があるとする。彼は、左方転位について四つの基準を挙げている(Lambrecht 2001: 1050) ²⁾。それは、(i) 節外の構成素位置 [が左方転位要素によって占められる]、(ii) その代わりに節の中に [pronominal が起こる] 位置がある、(iii) [左方転位要素と pronominal が] 同じインデックスを持つ、(iv) 特別なプロソディー [具体的には、左方転位要素は常にある程度音律的に卓立し、典型的にはポーズが後に続く]、である。

左方転位文の基本構造は以下(8) のようになる。XP_iは転位された要素であり、pro は照応である。照応要素はしばしば resumptive pronoun (再叙代名詞) と呼ばれている。(9)は左方転位の例である。³⁾

(8) Left-dislocation: XP_i s[... pro_i ...] (Lambrecht 2001: 1051)

(9) [*That Chris*]_i, *he*_i sleeps LATE, yeah. (loc.cit.)

²⁾ 山泉(2013:423)により訳されたもので、[] は山泉が補ったものである。

“The above definition involves four criteria: (i) extra-clausal position of a constituent, (ii) possible alternative intra-clausal position, (iii) pronominal coindexation, (iv) special prosody.” (Lambrecht, 2001: 1050).

³⁾ 左方転位の最新の研究について一例を挙げると、Tizón-Couto (2016: 203-239) は、現代口語の左方転位との比較における、近代英語の手紙及び日記中の左方転位の要素と節の再叙代名詞(resumptive pronoun)に関する形式的及び機能的特徴を考察し、次の3つの事柄を指摘している。(a) 左方転位の要素は、関係詞により名詞句を修飾する程度が最も低いタイプが最も短く、それは現代口語の左方転位の状況と類似している。(b) 左方転位の要素の長さの変化は、主にデータの複雑度を処理する原理(p.232 参照)によって決定される。(c) 左方転位の要素とその再叙代名詞が近代英語の小説やドラマ及び口頭での説教における目立ったマーカーとして機能したかは疑わしく、それらを近代英語の手紙や日記中の口頭による発話表現の指標として強調することには疑問が残る。

左方転位と主題化文の違いは、以下例(10)のように示すことができる。(10a) は canonical sentence (基準形文) であり、(10b)は、主題化文であり、(10c)は、左方転位文である。主題化文は、左方転位文と同様、非基準形文の位置にある参照成分を含むが、主題化文は、左方転位文と異なり、基準形文(節)の中に人称代名詞を持たない(上記基準(ii)参照)。主題及び主語の間に所有関係がある場合も、例(11)が示すように、所有代名詞は左方転位要素を象徴する機能を持っていない。

- (10) (a) *I saw [this movie] when I was a kid.* (基準形文) (ibid.: 1052)
 (b) *[This movie] I saw ____ when I was a kid.* (主題化文)
 (c) *[This movie]_i, I saw it_i when I was a kid.* (左方転位文)
 (11) *And [this guy]_i, his_i fishing pole fell down in the water.* (主題化文) (ibid.: 1059)

1.1.2. 文の主題 (情報構造)

本節では、情報構造における普遍的な文の主題について先行研究を見てみたい。多くの研究者が機能的に二種類の主題があるということに同意している。それは、thematic/ resumptive 及び contrastive という主題である。

- Thematic = ‘Speaking of X’ – X は旧情報
 Contrastive = ‘As for X’ – X は新情報の場合もある

以下の例はどちらも Haiman (1978: 572)から引用されたものである。

- (12) *Max found A WALRUS the other day. IT was quite friendly.* (thematic/ resumptive)
 (13) *THE ONE-L LAMA, HE’s a priest.* (contrastive)

久野(1972)では、contrastive 主題は、新情報とされるが、Haiman (1978: 584)は thematic/ resumptive 及び contrastive 主題について、前者は既知であり、後者も未知つまり新情報を担うわけではなく、両方とも旧情報であると指摘した。唯一の違いは、それぞれが談話において既知の事柄として確立される方法にある。つまり、Thematic/ resumptive 主題の場合は、文脈によって確立されるが、contrastive 主題の場合は、聞き手にいまだ知られたものではなく、関連がある考え・思考の中から話者によって選ばれる。それは、話者と聞き手の間の合意に

基づいて既知の事実として確認されるはずのものである。話者は、聞き手に合意を求める。従って、contrastive 主題は、質問としてよく使用される。その質問は、確認または主題の存在の認知の要求である。(14)のような例が挙げられる。

(14) A は B が誰かを探しているのを見て、B に以下のように発言した。

A : *Maria(?), she is washing the dishes.*

A to B : *If it's Maria you want to know about, she's washing the dishes/ As for (*Speaking of)*

Maria, she's washing the dishes.

(Akatsuka 1986: 348)

談話というのは、話者が色々なことを聞き手に発言するステージである。上記の例のように、あることが一度紹介された場合、それは一般的に次の会話で再び取り上げられる(例(12)の場合は、セイウチ‘walrus’が後続する文において“it”という代名詞によって取り上げられる)。しかし、主題が必ずしも前の会話から再び取り上げられたものではない場合も存在する。ある事情で、主題はある特定の領域から一番適切な想定概念を取り上げ、空間や時間による個人的な枠組みを形成する(例(14)では、話者がその場の状況を観察して、聞き手が Maria という人を探すことを想定して、会話の中に初めて登場する“Maria”を発言したものである)。

主題は、文のローカル・セッティングによる場面形成において最初に紹介された名詞句である、と定義する研究者もいる。Sgall (1974: 56)は、主題は situationkulisse「状況の背景」であると指摘している。Haiman (1978: 585)は、主題は話者と聞き手によって存在が同意される実体を表し、談話を連続させるために選ばれた枠組みを組み立てると定義した。

Theme というものは、機能的構文論の基本概念である。機能的構文論(Functional Sentence Perspective)は、ヴィレーム・マテジウス (Vilém Mathesius) に始まるプラハ学派(Prague School)独特の言語分析理論である。それはしばしば FSP と略される。文の要素に含まれる情報の配分が、文全体の流れに対して伝達機能上どのような役割を果たすのかという視点から分析を行うのがこの理論の最大の特徴である。

Daneš (1974)は、文の構造を三つのレベルに分類した。(例文 : John wrote a poem.)

- ① 文の意味構造のレベル Agent – Action – Goal
- ② 文の文法構造のレベル Subject – Verb – Object
- ③ 文の機能構造のレベル Theme – Transition – Rheme

機能的構文論の分析は、文の主要素を、話者が文を産出する際の発端となる主題 (theme) の部分と、話者がその主題について何かを述べる説述 (rheme) の部分とに分けることがその特徴である。主題はしばしば、聞き手にとって既知のことまたは情報量が比較的少ない旧情報 (old information) を担う部分で、「既知の (given) こと」ともいう。説述はしばしば、聞き手にとって未知のことまたは情報量の極めて多い新情報 (new information) を担う部分で、「未知・新しい (new) こと」ともいう⁴⁾。

Firbas (1966)は、テーマはコミュニケーションの発展に最も貢献し、コンテキストから推測することができる要素であると指摘している。

Theme 及び rheme は、psychological subject 及び psychological predicate、presupposition 及び focus、topic 及び comment というペアに対応し、これらの専門用語ペアはそれぞれ、研究者により、選択的に使用されている。

以上述べたように、theme と rheme は既知と未知として区別され、「話者が何について話しているのか」という要素は一般にテーマと呼ばれ、残りの部分は「テーマについて新情報を提供する」というような定義がなされている。本論文では、presupposition 及び focus という術語を使用し、日本語では「前提」及び「焦点」と呼ぶことにする。

1.2. 日本語における「は」「が」について

文の主部に「は」と「が」というマーカを持っていることが日本語の特徴の一つであると考えられている。二者を別々に扱う先行研究もあれば、「象は鼻が長い」のような構文で「は」「が」を併せて扱う先行研究もある。本論文における研究範囲の設定を行う前に、まず日本語の「は」「が」について見てみたい。

1.2.1. 「は」 — 日本語の主題マーカとして

文の主部は、西洋語の文法研究では、あまり目立つテーマにはならないが、日本語の文法研究ではこれまでしばしば大きな争点になった重要なテーマである。例えば、次の例(15)、(16)では、主語がどれかは簡単には言うことができないであろう。

⁴⁾ 本論文では、「情報量が多い・少ない」という代わりに、「情報の重要度が高い・低い」という表現を用いた。

(15) 辞書は広辞苑がいい。

(16) 象が鼻が長い。

日本語研究においては、主語から主題を分離することが一般的になってきている。日本語には、主題を表すマーカーとしての「は」があるため、そのようなマーカーがない言語より、主語と主題を区別しやすいのがその理由の一つである。

主題については、日本語研究者の中で、三上章が代表的である。三上によれば、「は」には、本務と兼務の二つの働きがある。本務は、主題を表し、兼務は、格関係を表すことである。次の例(17)から、本務として主題を表す「は」を消して「無題化」すると、(18)のような格関係が現れる。こうして現れた「象の」が、「象は」の兼務だということができる。

(17) 象は鼻が長い。

(18) 象の鼻が長い（こと）

反対に、例(18)の「象の」を主題にすれば、(17)の文になる。同じように、次の例(19)を無題化すると(20)になり、(21)を無題化すると(22)になる。

(19) 父はこの本を買ってくれた。

(20) 父がこの本を買ってくれた（こと）

(21) 日本は温泉が多い。

(22) 日本に温泉が多い（こと）

また、野田(1996)は、主題について、“考えなければならないことは三点ある”と指摘している。彼によれば、まず、単文や複文の主文では、主題と非主題の対立があるかという点について、多くの節では、基本的にそのような対立が存在しない。以下の例文(23)では、「タクシーが」を「タクシーは」に置き換えることができないのは、「～たら」という節の中では主題と非主題の対立がなく、「は」が現れないからである。

(23) タクシーが来たら、知らせてください。

第二に、主題の有無については、例(24)のように主題を持つ文のみでなく、(25)のように

主題を持たない文がある。

(24) 後藤さんは週末にはかならずカラオケに行く。

(25) きのう石川さんが訪ねてきた。

例(25)のように主題を持たない文になりやすいのは、一回限りの出来事や一時的な状態を述べるときである。

第三の点として、主題になりやすいのはどんな成分かについては、それが、話の現場に存在する「私」、「これ・それ」のような文脈に出てきた成分を受ける代名詞などである、と考えることが可能である。次の例(26)の二番目の文では、前の文に出てきた「ケーキ屋さん」を指す「その店」が主題として解釈されやすい。

(26) 駅前にキムラヤというケーキ屋さんができた。その店はチーズケーキがとてもおいしい。

1.2.2. 「が」の用法

久野(1973)によれば、「が」の用法には、下記の三つがある。(例文は、久野 1973: 27-35 から引用されたものである。)

(27) 《総記》を表す：「太郎が学生です。」(「今話題になっている人物の中では太郎だけが学生です」の意味)

(28) 《中立叙述》を表す：「雨が降っています。」「おや、太郎が来ました。」

(29) 《目的格》を表す：「僕は花子が好きだ。」

《中立叙述》の「が」は、述部が動作を表すか (30)、存在を表すか (31)、一時的な状態を表すか(32)の場合に限られる。

(30) 太郎が見舞いに来てくれた。

(31) 机の上に本がある。

(32) 空が青いね。

《総記》の「が」の場合は、述部が恒常的状态 (33)、習慣的動作 (34)を表す。

(33) 太郎が学生です。

(34) 太郎が日本語を知っている。

菊池 (1997: 101-107)は、《中立叙述》の「が」の文は〈出来事〉性の述部の場合がもっとも普通であると指摘している。急に何かが起こった／起ころうとしているという場合で、「Nが述部」という全体をまるごと、いわば新しいこととして提示し、起ったことをすぐその場で述べる文である。

また、彼は、久野の《総記》を《解答提示》の「が」と呼び直している。例えば、「誰が来た?」「山田さんが来た。」は「x (誰か) が来た」という前提があり、そのxを埋める機能を果たす文として使われる。質問文が発せられていない場合でも、この種の「が」は使われ得る。つまり、まず話し手と聞き手の間で状況〈枠〉ができて、その〈枠〉のもとで〈関心の対象〉とxがあり、「xが〈関心の対象〉」のxを埋めるのが《解答提示》の「が」なのである。例えば、写真を見ながら、「この人が一番若いね。」などという場合であり、このことから状態性述部の「が」は容易に《解答提示》と解釈し得る。

菊池はさらに、「～は～が述部」のような構文について、「Nが述部」の述部が〈状態〉性を有する場合でも《中立叙述》として解釈することができると指摘している。《中立叙述》「が」は通常、「山田さんが入院したよ」のように起こったこと〈出来事〉をまるごと述べる現象文に現れる。しかし、「～は～が述部」のような文では、「～は」という〈枠〉があれば、「Nが述部」が〈出来事〉の場合はもちろんのこと、〈状態〉の場合においてもまるごとの叙述が成り立つ。例えば、「象は鼻が長い」構文は、象はどんな動物かという〈枠〉の下で述べた「鼻が長い」の《中立叙述》と解釈できる。

1.2.3. 「～は～が」構文の分類

上に触れたように、三上の「象は鼻が長い」構文においては、「は」の兼務の問題が扱われている。「は」の兼務については、例(19)と(20)で示したが、繰り返して述べれば、(19)の「父は」は文の内容としては「父が」であり、同時に文の主題でもある。このことを三上は『「Xは」は「Xが」を兼務する』という形で述べている。これは「は」が2つの機能を担っているということでもある。同様に、例(35)の「その本は」は「その本を」を、(36)の「彼

女は」は「彼女の」を、(37)の「日本は」は「日本に」をそれぞれ兼務している。

(35) その本は田中さんが書いた。

(36) 彼女は目が美しい。

(37) 日本は地震が多い。

今田(1965)は、「～は～が」構文を変形規則の分析によってさらに詳しく分類することを試みてきた。「～は～が」の分類は日本語研究者によって様々であり、別の章においても他の研究者達の先行研究について言及するつもりである。

① 《例：私は水が飲みたい。》

NP_1 が NP_2 を $Vt+Aux \rightarrow NP_1$ は NP_2 が $VP/AP/ANP$

条件. $VP =$ (大) 好き (嫌い) になる、～たくなる

$AP =$ たい、ほしい、望ましい

$ANP =$ (大) 好き (嫌い)、いや

② 《例：日本は温泉が多い。》

NP_1 が NP_2 (に) $AP/AN \ P \rightarrow NP_1$ は NP_2 が AP/ANP

条件. $NP_2 =$ (時場所を表すもの) $AP =$ 多い $ANP =$ 豊富

③ 《例：彼は頭がよい。》

NP_1 の NP_2 が $Pred \rightarrow NP_1$ は NP_2 が $Pred$

条件. $NP_2 \neq Ad. \ AdN$ (数に関するもの)

$Pred \neq AP$ (強い、弱い、もろい)

④ 《例：象は鼻が長い。》

NP_1 の NP_2 が $Pred \rightarrow NP_1$ は NP_2 が $Pred$

条件. ③に同じ. $Pred \neq VP$

NP_1 と NP_2 の位置交換

⑤ 《例：文学部の学生はほとんどが女である。》

NP_1 の NP_2 が $Pred \rightarrow NP_1$ は NP_2 (が) $Pred$

条件. $NP_2 = Ad \ AdN$ (数に関するもの)

⑥ 《例：あの学校は野球が強い。》

NP_1 の NP_2 が $AP \rightarrow NP_1$ は NP_2 が AP

条件. AP=強い、弱い、もろい

- ⑦ 《例：掃除は私がした。》

NP₁がNP₂をVP → NP₂はNP₁がVP

条件. VP=Vt+Aux, VN (Vt) +Aux

NP₁とNP₂の位置交換

- ⑧ 《例：自分の後姿は見ることができない。》

NP₁をNP₂がPred → NP₁はNP₂がPred

条件. NP₂=Vt+ (こと、の、方) VN (Vt)

- ⑨ 《例：高山の町は祭りが多い。》

NP₁にNP₂がPred → NP₁にはNP₂がPred → NP₁はNP₂がPred

- ⑩ 《例：オタフク風邪は頭が痛い。》

NP₁でNP₂がPred → NP₁ではNP₂がPred → NP₁はNP₂がPred

- ⑪ 《例：来週は試験がある。》

NP₁はNP₂がPred → NP₁はNP₂がPred

条件. NP₁=Ad. AdN

- ⑫ 《例：これはもう仕方がない。》

NP₁はNP₂がPred

条件. NP₂が-Pred= (一定の phrase) : 仕方がない、きりがいい、腹がたつ、虫が好かない、気がつく、気(思い、感じ)がする

以上のように、今田(1965)に従えば「～は～が」構文は12のタイプに分類される。また、「～は～が」構文は二重主語構文であるとする観点から、尾上(1998)は、第一種二重主語構文と第二種二重主語構文という2種類に大別する。それぞれの種類は、更に次のように細区分されている。

I. 第一種二重主語構文：

A. 存在の文

[〈存在の場〉ハ〈存在するもの〉ガ〈存在〉]

例：「あの部屋は大きな窓がある。」

B. 情意の文

[〈情意・感覚・欲求成立の場＝主者〉ハ〈情意・感覚・欲求の対象〉ガ〈情意・感覚・

欲求)]

例：「私は故郷が懐かしい。」「私は水が飲みたい。」

C. 可能の文

「動作主がその行為をしようという意図を持った場合にその行為が実現するだけの許容性、萌芽がその状況の中に存在する」

例：「木村さんは中国語が話せる。」「この店のかき氷が食べられる。」

II. 第二種二重主語構文：「象は鼻が長い」構文は五つのタイプに分けられる（第三章 3.2. 節参照）。

表 1-1: 第二種二重主語構文（尾上 1998: 94）

「X は Y が Z」構文	X—Z が 主述関係	X・Y は 全体・部分	X—[YZ] が 主述関係	「X は Y」で意味が通じる (Z は好評価に限る)
(D) この壺は色が青い。 日本は国土が狭い。	○	△	○	×
(E) この子は目がかawaii。 この家は壁がきたない。	△	○	○	×
(F) 象は鼻が長い。 あいつは父親が医者だ。	×	○	○	×
(G) さんまは頭がうまい。 相撲は立会いがおもしろい。	×	○	○	○
(H) 魚はさんまがうまい。 辞書は新しいのが良い。	×	△	△	○

尚、上記の日本語の第一種二重主語構文における、目的語相当部分を「が」で表すような「X は Y が Z」構文は、インドネシア語では文法的対応が認められない。

(38) *Anda bisa bicara Bahasa Jepang.*

2SG can speak language Japan

‘You can speak Japanese.’ 「あなたは日本語が話せる。」

(39) *Saya mau minum kopi.*

1SG want drink coffee

‘I want to drink coffee.’ 「私はコーヒーが飲みたい。」

(40) *Kamar ini ber-jendela besar.*

room this BER-window big

‘This room has a big window.’ 「この部屋は大きな窓がある。」

1.3. 研究範囲及び研究目的

日本語の「は」「が」についてはこれまで盛んに研究されてきたが、「は」「が」に関する研究テーマは多岐に渡り、本論文で全部取り上げることは無理である。従って、本論文では「は」「が」が現れる日本語の構文とインドネシア語におけるその対応文を比較・対照し、両言語における構文について考察を深めることを目指している。

また、本論文では「は」「が」を別々に取り扱って考察するのではなく、「象は鼻が長い」のような「～は～が」構文における「は」と「が」を併せて考察する。

具体的には、「～は～が～」構文の三つのタイプを取り上げ、その文型がインドネシア語ではどのような構文に対応するのかを考察する。その目的のために、上記今田による分類における⑦（第二章）、④（第三章）、⑥（第四章）の文のタイプを章ごとに順に取り扱うことにした。⑥のタイプについては、NP₁とNP₂が位置交替しNP₂とNP₁の順となる《野球はあの学校が強い。》を取り上げる。この構文は第四章で扱う《カキは広島が美味しい。》に対応するものである。尚、《あの学校は野球が強い。》と《野球はあの学校が強い。》の関係はNP₁とNP₂の間の〈全体一部分〉及び〈部分一全体〉の関係に対応しているが、この問題については第四章 4.6.節で更に詳しく述べるつもりである。

⑦ 《例：掃除は私がした。》

NP₁がNP₂をVP → NP₂はNP₁がVP

条件. VP=Vt+Aux, VN (Vt) +Aux

NP₁とNP₂の位置交換

④ 《例：象は鼻が長い。》

NP₁のNP₂がPred → NP₁はNP₂がPred

条件. Pred≠VP

NP₁とNP₂の位置交換

⑥ 《例：野球はあの学校が強い。》

NP₁のNP₂がAP → NP₁はNP₂がAP

条件. AP=強い、弱い、もろい

分類⑦は、いわゆる「を」格項の主題化文である。分類④の場合は以下に示すように、NP₁とNP₂の位置交換が可能であるが、意味的に異なっている文なので、インドネシア語の対応

文も二つの異なった構文になる。日本語に関して、本論文で扱う「～は～が」構文は①「を」格項の主題化文、②「象は鼻が長い」構文（措定読み）、③「カキは広島が美味しい」構文（指定読み）の三つのタイプであり、それぞれがインドネシア語における異なった構文に対応する。

これら三つのタイプを選んだ理由は、筆者の個人的な経験も大きく係っている。第一のタイプである日本語の「を」格項の主題化文は筆者の場合、母語の影響により、常に受動文になる傾向がある。次に、二番目の「象は鼻が長い」構文における「象は」は、主語卓越言語である西洋諸言語では対応する表現は通常存在しない。それは、強いて言えば、英語 *as for*, ドイツ語 *was ...betrifft* のような、非常に硬い表現に対応すると考えられる。一方、主語卓越言語に属するインドネシア語は西洋諸語とは反対に、「象は鼻が長い」のような主題化文を持っており、この非対照的な現象が筆者の興味を大いに引いたのである。三番目の「カキは広島が美味しい」構文と、インドネシア語のそれとの対応関係は複雑であり、本論文ではその理由の説明を試みたいと思う。

尾上の第二種二重主語構文における(D)～(H)の例はインドネシア語との対応関係を持っている。その中で(D)～(G)については、インドネシア語の対応構文は、「象は鼻が長い」構文と同様の文であり、(H)については、インドネシア語の対応構文は、「カキは広島が美味しい」構文と同様の文である。

上記日本語の三つの構文タイプは、意味的には異なるが、「～は～が」という構造を共有する一方、インドネシア語の場合は、構文的に三つの異なる構造を示すことが両言語の大きな相違点である。そこで、インドネシア語の対応文に関連して、“受動文”、“名詞句の特定化”、“名詞と付加語を結ぶリンカー”、“コピュラ文”、などについても言及するつもりである。

最後に本論文が目指すものは以下の三点である：

- I. インドネシア語では主語が動詞の接頭辞変化と関係が有ること、更に、日本語における能動文の「を格」目的語の助詞「は」による主題化はインドネシア語では、「Ø-動詞」及び接頭辞 *di-* が付加された動詞形に対応することを示す。
- II. インドネシア語には I の制約があるという理由で、この言語が主語卓越型に属するとされているが、「～は～が～」のような主題解説関係をなす有題文も持っていることを示す。
- III. インドネシア語では、《主語—述語》だけではなく、《述語—主語》という語順が

よく使用され、その際主語はトピックでなければならないことを示す。

目的Ⅰに関しては、インドネシア語では主語が動詞と何らかの関係を持つことが要求されるという事実を実例によって提示する。主題の場合は、文における動詞との直接的な関係は不必要である。例えば、日本語における「それはあげる。」のような文では、「あげる」という動作を行う者、つまり“与え手”は「それ」ではない。一方、主語卓越型に属するインドネシア語では、主語は動詞の接頭辞変化と関わりがあり、例えば、主語が動作主 (agent voice) の場合は接頭辞 *meN-* を、主語が動作対象 (patient voice) の場合は接頭辞 *di-* を動詞に付ける。

Ide (2002) によれば、アジア社会は高コンテキスト文化といわれる社会であり、話をする際にその場の諸条件を配慮しながら話すことが強く求められている。高コンテキストとは、話の場に関わる要素が沢山あり、複雑であるだけでなく、その要素が人々の行為に影響を与える、あるいは制約をかける度合いが高いことをいう。高コンテキスト文化においてさまざまな言語現象（主語・目的語の脱落、敬語など）が生み出される。

日本語は高コンテキスト文化に基づく言語であると考えられ、このように、話し手は主題を述べ、聞き手は主題とその述語との関係を推測する協力が求められるという場合がよくある。

目的Ⅱに関しては、第三章で日本語の「象は鼻が長い」構文のように、インドネシア語でも所有者を主題化する文（有題文）があること、さらに第四章では、インドネシア語において主題マーカ―*kalau* を使用する有題文があることを示す。

目的Ⅲに関しては、《述語—主語》という順序がインドネシア語ではよく現れ、インドネシア語では、統語的な位置が英語ほど文法機能として重要ではないことを示唆している。具体例を挙げれば、日本語のコピュラ文「～は～だ」と「～が～だ」の后者に相当するインドネシア語の構文では、通常上述の《述語—主語》という語順が用いられる。その理由の一つとして考えられるのが、インドネシア語は歴史的にはマレー語と呼ばれていた言語であり、マレー語では述部が文頭に立つ場合も珍しくなかったことが挙げられる。Rafferty (1987: 361-381) は、文語としての高マレー語（19世紀後半）及び口語方言としての低マレー語（20世紀初期）の自動詞文における文頭に立つ述部を研究テーマとしているが、Rafferty によれば、高マレー語における文頭に位置する述部構造の機能の一つは、一つの場面から他の場面の移動を標示するためである。当時のマレー語は、文学作品を公衆に聴かせるという口頭伝承から出現し、この口頭コミュニケーションは、視聴者の注目の継続をあまり期待することができないので、話の展開の明確なマーキング（文頭に立つ述部に焦点標示-*lah* を付けたり

するなど)を必要とした。低マレー語の場合は、述部が文頭に立つ構造は少なくなっており、オランダ語や英語の影響を受けてヨーロッパの言語に近くそれに類似した構文を示すようになってきた。また、それに伴い焦点標示-lahの使用も減少した。彼は以下のような例を挙げている。(41)~(43)では動詞 (*berkata*, *timboel-lah*, *bertjahaja*) が主語に先行する。

(41) *maka ber-kata poela njonya Abrams*, (後略) (Rafferty 1987: 376)

then BER- say also Mrs. Abrams

‘Then Mrs. Abrams also said,’

(42) *Serta timboel-lah djoega pengrasaan*. (ibid.: 377)

and rise (foc) also feeling

‘And a feeling also arose (in her).’

(43) *Wah, semangkin ber-tjahaja moeka non Poppi*, (loc.cit.)

wow the more BER- radiant face ms. Poppi

‘Wow, Ms. Poppi’s face is all the more radiant.’

またインドネシア語の主語に関して、Cole, Hermon, and Tjung (2005: 561)は、次のように指摘している。

“In Standard Indonesian, the subject **must** be the topic and cannot be the focus of the sentence. That is, Standard Indonesian requires a strict parallelism between topic and subject, a parallelism not required in such languages as English.”

「標準インドネシア語では、主語はトピックでなければならない、文の焦点ではあり得ない。つまり、標準インドネシア語はトピックと主語の間の厳格な類似性を要求する。それは、英語のような言語においては要求されない類似性である。」従って、インドネシア語と日本語の間には、主語と述語の逆転現象が見られる。

次の日本語の例文(44)では、焦点が「彼」に当たる。この文をインドネシア語に翻訳した場合、(45)のような文では、日本語の「彼は医者だ」のように聞こえてしまう。(44)のように、主語である「医者」ではなく述語の「彼」に焦点を当てる場合は、接尾辞-*nya* による名詞句の特定化を行い、日本語の「**彼が**医者だ」構文と意味的に対応する《述語—主語》の語

順を示す(46)のような文を作らなければならない。また、(46)は、(47)のように倒置することも可能であり、その場合も意味は不変である。

(44) 彼が医者だ。

(45) *Dia / dokter.* (→「彼は医者だ」)

3SG doctor

(46) *DIA(-LAH)* (述語) / *dokter-nya* (主語) .

3SG -foc

doctor-DEF

(47) *Dokter-nya* (主語) / *DIA* (述語) .

1.4. 研究方法

本論文は、日本語とインドネシア語との対照研究であり、共時的な分析を行う。一般的に対照研究は、二つの言語を対照し、それぞれの特性をつき合わせて類似点及び相違点を指摘するが、本研究も同様の方法に依っている。それは、先行研究に基づき、日本語とインドネシア語における言語現象を構文を中心に比較し、そこから両言語の類似点及び相違点を考察する。例文は、先行研究からの引用、「ノルウェイの森」からの引用を主とするが、自分で作った文もある。村上春樹氏によるこの小説を選んだ理由は、この作品がインドネシア語に翻訳されている数少ない文学作品であり、量的にも大部だからである。

1.5. 本論文の構成

本研究は、全五章から構成されている。

第一章「序論」では、まず、「主題」及び「主語」に関する先行研究を取り上げ、日本語における「は」「が」についても紹介する。さらに、本論文が扱う研究範囲及びその目的を説明し、最後に論文の構成を述べる。

第二章「日本語の「を」格項の主題化文とインドネシア語の「di+動詞」及び「Ø+動詞」の構文との対応関係」では、まず、日本語における「を」格項の主題化についての先行研究を紹介し、インドネシア語における動作対象が主語になる文について考察を加える。最後に、小説からの例文を挙げて、日本語の「を」格項の主題化文とインドネシア語の動作対象が主語になる文との対応関係を示す。

第三章「日本語「象は鼻が長い」構文とインドネシア語 “Gajah belalainya panjang” 構文について」では、まず、日本語の「象は鼻が長い」構文について先行研究を紹介し、その構文と対応するインドネシア語の構文における-nya の用法を説明し、インドネシア語の“Gajah belalainya panjang”構文について説明を試みる。

第四章「日本語「カキは広島が美味しい」構文とインドネシア語の “Kalau tiram Hiroshima yang enak” 構文との対応関係」では、まず、インドネシア語の対応文におけるリンカーyang についての説明を試みる。さらに、コピュラ文において日本語とインドネシア語との対応関係を考察する。最後に、日本語の条件節マーカ―及び主題マーカ―とそれに対応するインドネシア語の kalau について述べる。

第五章「結論」では、本論文で取り上げた全ての章のまとめとして日本語「～は～が」構文三つのタイプとそのインドネシア語の対応文について本論文が辿り着いた結論を述べる。

第二章

日本語の「を」格項主題化文とインドネシア語の

「di-動詞」及び「Ø-動詞」構文との対応関係

2.1. はじめに

日本語では「を」格項の主題化、つまり基本文である能動文(1)の目的語（動作対象）が主題化されると、以下(2)のようになる。

(1) 山田さんがケーキを作った。(能動文)

(2) ケーキは山田さんが作った。(「を」格項の主題化文)⁵⁾

例文 (1) の「ケーキ」は、動詞に対して「を」格関係を持っており、それを文頭に置いて助詞「は」が付けられると、(2)のような「を」格項を主題化した文になる。⁶⁾

主題を標示する助詞「は」は日本語の特徴であるが、日本語の主題化文の主題と、(西洋諸語ほど度合いは高くないが) 主語卓越型と言われるインドネシア語における主語との対応関係を調べた場合、お互いの共通点および相違点は興味深い問題を提起すると思われる。

本章の題名が示すように、インドネシア語には、「di-動詞」及び「Ø-動詞」構文（いわゆる patient voice）がある。これらの構文は目的語（動作対象）が話題の出発点になる際使用され、日本語の「を」格項の主題化文と対応すると考えられる。

本章では、日本語の「を」格項主題化文について整理し、それとの対比においてインドネシア語の「di- (di-接頭辞) 動詞」及び「Ø- (ゼロ接頭辞) 動詞」構文とその用法を説明する。最後に、小説から「を」格項の主題化の幾つかの例文とそのインドネシア語の訳文を取り上げ、「を」格項の主題化文とインドネシア語の「di-動詞」及び「Ø-動詞」の構文との対応関係を示す。

⁵⁾ A: 「ケーキは誰が作った？」 B: 「ケーキは母が作った。」という「母が」の部分が焦点化された《回答提示》のタイプは、本章の「を」格項の主題化文のタイプに扱わない。

⁶⁾ 文脈によって文頭でない場合もある。会話などで主題は省くことが可能である。

2.2. 日本語の受動文と「を」格項主題化文との共通点及び相違点

インドネシアの日本語学習者には、日本語の受動文の多用と誤用が多く見られる。インドネシア語では目的語を主語にした構文が頻繁に用いられ、インドネシア語のこのような構文が母語干渉によって、日本語の受動形「(ら)れる」に置き換えられることがよく起こる。日本語の受動文をインドネシア語の「di-動詞」及び「Ø-動詞」構文 (patient voice 構文) に置き換えることはできるが、その逆は必ずしも成り立たない。

以下は、田中(1991: 113)の表に基づき、それに少し手を加えたものである。この表が示すように、インドネシア語の patient voice 構文は、日本語の受動文「(ら)れる形」以外の他の構文にも対応すると考えられる。

表 2-1: インドネシア語の patient voice 構文を自然な日本語に移す際の規則

X	Y	原則	日本語文	インドネシア語文
有情・非情				
有	有	XがYにVされる XがYにVしてもらう Xを／にYがVする	ネズミがねこに追いかけられる。 リニが両親にお金を送ってもらう。 リニを友だちが待っている。	Tikus <u>di-kejar</u> kucing. Rini <u>di-kirimi</u> uang oleh orangtua. Rini <u>di-tunggu</u> temannya.
非	Ø	XがVされる	土曜日に会議が開かれる。	Hari Sabtu rapat akan <u>di-adakan</u> .
有	有	XがYに／によってVされる	〔雪国〕は川端康成によって書かれた。	Novel “Yukiguni” <u>di-karang</u> oleh Yasunari Kawabata.
非	有	XをYがVする	新聞を父が読む。	Koran <u>di-baca</u> Ayah.
非	Ø	XをYがVする	このフィルムを現像してください。	Film ini tolong <u>di-cuci</u> .
有	非	XがYにVされる	私はいつも時間に追われている。	Saya selalu <u>di-kejar</u> waktu.
非	非	XがYに／でVされる	木が台風で倒された。	Pohon itu <u>di-tumbang</u> topan.
私		私がYにVされる	私は友だちに映画に誘われた。	Saya <u>di-ajak</u> teman nonton film.
	私	Xを／に私がVする	お茶を私がのんだ。	Teh saya <u>Ø-minum</u> .
私の		私がYにXをVされる	私は先生に発音を直された。	Lafal saya <u>di-betulkan</u> guru.
所有者の		所有者がYにXをVする	アリは誰かに靴を取られた。	Sepatu Ali <u>di-ambil</u> orang.

※X：行為を受ける対象、Y：Vの行為者、 ：目的語が文頭に出た能動文／対象が主題化された文

本章で取り上げている目的語を主題化した文は、目的語に多くの注意が向けられる表現である点において、受動文と共通した特徴を持っているが、相違点もある。

まず、日本語の受動文について、白川(2001)は、日本語の受動文を用いる典型的な場合として、次の五つを挙げている。

- a. 主語より目的語について何かを言いたい場合

例. 「古い菓子屋は子供たちに愛されている。」

- b. 複文において前件の主語と、後件の主語を揃える必要がある場合

例. 「娘に撫でられて、その子犬は嬉しそうだった。」

- c. 主語が分からなかったり、不問である場合

例. 「その村では多くの民話が語り継がれている。」

- d. 不特定の人が何かの動作をし、話し手がその動作を受ける場合

例. 「暗闇でいきなり呼び止められた。」

- e. 能動形を持たない場合

例. 「悪夢にうなされる。」

受動文は、ものである動作対象（目的語）を主語にした場合、一般的ではない。従って、例(3)は非文となり、(4)のように能動文で言う。

(3) *そのリンゴは私に食べられた。

(4) 私はそのリンゴを食べた。

動作対象が無情名詞の場合、受身文が用いられるのは、動作主が不問の場合か、動作対象を主語にしたい場合、対象について何か述べる場合である。動作主が不問であれば、無情名詞を主語にして現象文のように、受動文が使われる。現象文とは文全体を新しい情報として捉えて聞き手に伝える表現である。(5)はその例である。

(5) 庭にある花が何者かによって切り取られた。

それに加えて、動作対象の性質や、対象についての重大なエピソードが述べられる場合には、ものを主語にした受動文が用いられる（(6)及び(7)）。例(6)は「電話というもの」について「発明」という重大な出来事を述べている。例(7)は「この電話」の特徴として挙げる価値のある情報である。

(6) 電話はベルによって発明された。

(7) この電話はオバマ大統領によって使われたことがある。

次に、受動文の他に、「を」格が文頭に置かれる形式は、目的語を主題化した「目的語は主語が V する」構文である。例えば、能動文「太郎が次郎を殴った」の「を」格目的語である「次郎」を主題化して、文頭に持ってきた文がこの形式に該当する。例(8)の「次郎は」は、動作対象である「を」格名詞句「次郎を」が主題化されたものである。

(8) 次郎は太郎が殴った。

動作対象を主題化するのは、(9)のように前の文脈で取り上げられているなど特に「を」格名詞句について述べたい場合と、(10)のように対比的に提示する場合である。

(9) 彼はいつもあの手袋をはめている。あの手袋は彼の死んだお母さんが編んだもの
そうだ。

(10) 中国からの留学生は井上先生が担当し、韓国からの留学生は岡部先生が担当して
いる。

「を」格項主題化文と受動文との相違点に関しては、目的語がものの場合、受動文は不自然になりやすい（例(11)）が、それに対し能動「を」格項主題化文は、単純に目的語について言いたい場合に普通に用いられる表現である(12)。

(11)*その自転車はさっき山田に使われていたよ。

(12) その自転車はさっき山田が使ってたよ。

動作主が特に問題とされない場合、受動文は自然である(13)が、主題化の構文は不自然である(14)。

(13) 2020 年のオリンピックは東京で開かれる。

(14)*2020 年のオリンピックは東京で開く。

目的語がものの場合でも、目的語が持つ性質や重大なエピソードを述べる場合には、どちらの表現も自然である（例(15)及び(16)）。

(15) アメリカ大陸はコロンブスに発見された。（受動文）

(16) アメリカ大陸はコロンブスが発見した。（「を」格項主題化文）

以上、受動文かそれとも「を」格項主題化文かという表現選択があれば、それはただの表現のスタイルでもあり、本節ではその共通点と相違点を指摘した。次に、「を」格項主題化文についてさらに少し詳しく見てみたい。

2.3. 日本語の「を」格項主題化文について

周知のように、助詞「は」でマークされる日本語の主題は、《主題提示》及び《対比》という二つの機能を持っている。前節ですでに述べたように、このことは「を」格項の主題化にも当てはまる。

(17) 《主題提示》

彼はいつもあの手袋をはめている。あの手袋は彼の死んだお母さんが編んだものだそうだ。（前の文脈で取り上げられている目的語について述べる）

(18) 《対比》

サラダは井上さんが作って、デザートは田中さんが作りました。

三上(1960: 26)は、「この本は、父が買ってくれました。」という文における「この本は」は「この本ヲ」を代行するとして、「X ハ」は、「X について言えば」という「X」を「題目」として提示しているとしている。⁷⁾

尾上(1995: 31)は、「題目語」は、後続部分の《説明対象》になると指摘している。彼は題目語については、「一文の中で、その成分が表現伝達上の前提部分という立場にある。表現の流れにおいて、その部分が全体の中から仕切り出されて特別な位置にある。その成分は、後続の伝達主要部分の内容がそれと決定されるために必要な原理的先行固定部分である。その成分が、後続部分の《説明対象》になっている。」のように整理している。

⁷⁾ 本論文では、「題目」は「主題」のことを示す。

主題が《説明対象》であれば、後続の伝達主要部がそれに対する《説明内容》となる。この関係は、「モノーあり様・在り方」という関係だと言うこともできる。要するにモノの「あり様」・「在り方」・「状況」の描写報告であり、広義の存在承認というものである。

「を」格項主題化文に戻って、基本文である能動文には、対象（例：「強盗が窓ガラスを壊した」）、経路（例：「橋を渡る」）、起点（例：「家を出る」）などのような「を」格の用法が幾つかあるが、堀川（2012:57）は「を」格由来の主題が《処置課題》として意識されやすく、「処置課題—処置内容」という関係が認識されるためには、他動性と時間的展開性が重要であると指摘している。この点に関して次の例が挙げられる。

(19) こわれたおもちゃは修理した。

(20) 余ったおかずは冷蔵庫に入れた。

「を」格項主題化文を堀川(2012)は、更に詳しく分類している。次は、堀川による分類であり、堀川が取り上げている例文を（少し工夫して）引用し、そして筆者によるインドネシア語の対応文を提示する。堀川は、「を」格項の主題化文には《説明対象》及び《処理課題》という二つの意味が生じるとしている。

A. 「を」格の主題化—《説明対象》（①～④）

① 用法として時間的展開性がない場合（I～II）

I. 頻度表現

動詞がル形で特定の時空間で生起する事態を表すのではなく、時間的展開性がない。使われる動詞は、他動性が低いとはいえないが、時間的な情報度は低い。

1. 二段の部屋は小規模な会議によく使う。

Ruangan di lantai dua sering di-gunakan untuk rapat skala kecil. (動作主=0)
room at floor two often DI- use for meeting scale small

2. この薬は血圧を下げるためによく用いる。 (動作主=0)

Obat ini banyak di-minum untuk me-nurunkan tekanan darah.
medicine this most DI- drink for meN- lower pressure blood

3. ゴーヤは祖母がよく食べる。

**Pare sering di-makan Nenek.* (動作主=3SG)
bitter gourd often DI- eat grandma

4. ウイスキーは父がたまに飲む。
 **Wiski* *sekali-sekali* *di-minum* *Ayah.* (動作主=3SG)
 whiskey sometimes DI- drink father
5. 歴史小説は時々読む。
Novel sejarah kadang-kadang *saya* *Ø-baca.* (動作主=1SG)
 novel history sometimes 1SG Ø-read
6. 教育テレビは授業の参考にするためによく見る。
Televisi pendidikan sering saya *Ø-lihat* *sebagai bahan referensi kuliah.* (動作主=1SG)
 television education often 1SG Ø- watch as material reference lesson
7. CNN ニュースはよく聞く。
Berita CNN sering saya *Ø-dengar.* (動作主=1SG)
 news often 1SG Ø- hear
8. 米は年に三回作る。
Padi *di-tanam* *tiga kali dalam se-tahun.* (動作主=Ø)
 rice DI- plant three time in a- year
9. 赤飯は祝い事がある時によく炊く。
Nasi merah selalu *di-masak* *kalau ada perayaan.* (動作主=Ø)
 rice red always DI- cook when be celebration

II. カテゴリー帰属文

主題が属性の持ち主という立場にたち、動詞ル形で属性叙述表現になる。頻度ではなく、規約的にあらかじめ関係性が保証されている ((13)及び(14))。

10. この辞書は法学部の学生がよく使う。
Kamus ini banyak *di-gunakan* *mahasiswa hukum.* (動作主=3SG)
 dictionary this many DI-use student law
11. このビールは二十代の男性がよく飲む。
Bir ini banyak *di-konsumsi* *laki-laki usia 20-an.* (動作主=3SG)
 beer this many DI-consume man age 20's
12. 一酸化炭素濃度の異常は赤色ランプの点滅が示す。
Konsentrasi karbon monoksida yang tidak normal *di-tandai* *lampu merah ber-kedip.* (3SG)
 concentrate carbon monoxide LINK NEG normal DI-sign lamp red BER-blink
13. この停留所は2系統のバスが通る。
Halte ini *di-lewati* *bis nomor 2.* (動作主=3SG)
 bus stop this DI-pass bus number 2

14. この種のミスは少し慣れた人がよく犯す。

Kesalahan ini sering di-lakukan oleh orang yang sudah agak terbiasa. (動作主=3SG)

mistake this often DI- do by person LINK already a little get used to

15. このような問題は初心者がよく見落とす。

Masalah seperti ini sering di-indahkan pemula. (動作主=3SG)

problem such this often DI-overlook beginner

② 動詞語彙として時間的展開性がない場合 (I~III)

I. 心理動詞

16. 彼の将来は友人たちがみな心配している。

Masa depan-nya di-cemaskan semua teman-teman-nya. (動作主=3SG)

future -3SG.poss DI- worry all friends- 3SG.poss

17. 彼のアリバイは刑事の一人が疑っている。

Alibi-nya di-curigai seorang penyidik. (動作主=3SG)

alibi-3SG.poss DI-suspect INDEF (police) detective

18. プミポン国王はタイ国民の多くが敬愛していた。

Raja Bhumibol di-cintai banyak rakyat Thailand. (動作主=3SG)

king DI- adore many people

II. 評価動詞

19. この絵は美術評論家が絶賛している。

Lukisan ini di-puji kritikus seni. (動作主=3SG)

painting this DI-praise critic art

20. 政府案は多くの国民が支持している。

Proposal pemerintah di-dukung rakyat banyak. (動作主=3SG)

proposal government DI-support people many

21. 政府の対応は野党が厳しく批判している。

Respon pemerintah di-kritik tajam oleh partai oposisi. (動作主=3SG)

respond government DI-critic sharply by party opposition

III. 現状描写 (あるものが、現在どのような状況に置かれているかの描写)

22. 国境地帯はゲリラ軍が統治している。

*Wilayah perbatasan **di-perintah** tentara gerilya.*

(動作主=3SG)

area border DI-command army guerrilla

23. このチームは青年監督が率いている。

*Tim ini **di-pimpin** pelatih muda.*

(動作主=3SG)

team this DI-lead trainer young

24. 会計は会長が一元的に管理している。

*Akuntansi **di-pantau** direktur secara integral.*

(動作主=3SG)

accounting DI-watch chairman by integrally

③ 作成動詞および広義作成動詞による出自の説明

時間的展開性はある。現在ここに存在するモノの由来、ないしは出自の事情を説明するものといえる。

25. この絵は五歳の娘が描いた。

*Lukisan ini **di-gambar** anak perempuan saya yang ber-usia 5 tahun.* (動作主=3SG)

painting this DI-draw child girl 1SG.poss LINK BER-age year

26. このビルは有名な建築家が設計した。

*Gedung ini **di-rancang** arsitek terkenal.*

(動作主=3SG)

building this DI-plan architect famous

27. このお金はバンコクの路上で拾った。

*Uang ini saya **Ø-pungut** di jalanan di Bangkok.*

(動作主=1SG)

money this 1SG Ø-pick up on street in

28. この棚はネットオークションで買った。

*Lemari ini saya **Ø-beli** lewat lelang internet.*

(動作主=1SG)

shelf this 1sg Ø-buy via auction internet

29. この蘭は父が丹精こめて育てた。

*Anggrek ini **di-pelihara** Ayah dengan sepenuh hati.*

(動作主=3SG)

orchid this DI-grow father with one full heart

④ 特徴づけとして意味ある履歴

動詞の他動性が低くなく、時間的展開性がある。ここでは主題の履歴として語る“意味ある情報”が重要である。

30. この店のラーメンは阿部首相も食べた。

*Bakmi toko ini pernah **di-santap** Perdana Menteri Abe.*

(動作主=3SG)

noodle shop this ever DI-eat prime minister

31. このオルガンは 300 年間前にバッハが一度だけ弾いた。

Organ ini pernah di-mainkan sekali oleh Bach 300 tahun lalu.

(動作主=3SG)

organ this ever DI-play once by Bach year ago

B. 「ヲ」格の主題化—《処置課題》(①～②)

《処置課題》は、行為要求の文も含む。これらの文は、主題の取り扱い方・処置について求める文である。

① 命令要求の文

32. 武器は捨てろ。

Ø-Buang senjata-nya!

Ø-throw gun- DEF

33. ネックレスは外して下さい。

Kalung-nya, tolong di-lepas! / Tolong di-lepas, kalung-nya! / Ø-Lepas kalung-nya!

neckless DEF help DI-take off

34. 靴ははやく脱ぎなさい。

Sepatu-nya, cepat di-lepas! / Cepat di-lepas, sepatu-nya! / Cepat Ø-lepas sepatu-nya!

Shoes-DEF quickly DI take off

② デオンティック・モダリティをもつ文

35. 関係者の責任は厳しく追及すべきだ。

Tanggungjawab orang yang ber-kepentingan perlu di-sidik dengan teliti.

responsibility person LINK BER-interest need DI-investigate with thoroughly

36. レポートは郵送で提出してもよい。

Laporan boleh di-kirim lewat pos.

report may DI-send via post

37. 信教の自由は法律で制限してはいけない。

Kebebasan ber-agama harus di-batasi dengan hukum.

freedom BER-religion must DI-restrict with law

上記のように堀川 (2012) は「を」格項主題化文には《処置課題》及び《説明対象》という二つの意味が生じると述べている。インドネシア語の対応文に関しては、例 3.及び 4.で patient voice 構文を使用した場合非文になる。不定の「ゴーヤ」「ウィスキー」は、他動詞の

目的語としての以下の(3')及び(4')ような能動文の場合は、自然になる⁸⁾。インドネシア語では、文の主部が不定名詞の場合、《公式の事柄》あるいは《一般情報》以外は、「di-動詞」及び「Ø-動詞」構文が許容されない (p.31-32 例(25)及び(26)参照)。

3'. ゴーヤは祖母がよく食べる。

*Nenek sering makan pare. (*Pare sering di-makan Nenek.)*
grandma often eat bitter gourd

4'. ウイスキーは父がたまに飲む。

*Ayah sekali-sekali minum wiski. (*Wiski sekali-sekali di-minum Ayah.)*
Father sometimes drink whiskey

更に、上記の例 32.~34.の行為要求の文は、インドネシア語では、patient voice 構文を使用する。これは、Keenan (1976)が指摘しているように、多くのマレー・ポリネシア語族の言語では、命令文は能動文ではなく、受動文で頻繁に見られることに由来する。

次の節では、「を」格項主題化文に対応すると考えられるインドネシア語の「di-動詞」及び「Ø-動詞」構文について見てみたい。

2.4. インドネシア語の「di-動詞」及び「Ø-動詞」構文とその用法

インドネシア語の「di-動詞」及び「Ø-動詞」構文は、受身用法を中心とするので、一般的には受動文として知られている。また、これらの構文は、「meN-動詞」を使用する能動文と対立すると考えられる。

インドネシア語と同様の動詞接辞を用いる言語の例として (タガログ語を含む) フィリピン諸語を挙げることができる。フィリピン諸語は、文の中に一つの「フォーカス」要素を持っており、森口 (1995) は、「フォーカス」は「主題」に関する問題として、名詞句の「主題」選択により、動詞に付加される接辞が決定されるという現象であると指摘している⁹⁾。以下

⁸⁾ 名詞句の特定化については第三章で述べる。

⁹⁾ この場合「フォーカス」という術語は agent/ subject focus, patient/ object focus を意味する。本論文では、情報構造に関して「焦点」という術語を使用しているので、混乱を防ぐために、インドネシア語の「di-動詞」及び「Ø-動詞」構文を考察する際 agent voice/ patient voice という術語を使用することにする。本章は、日本語の「を」格項主題化文とインドネシア語の構文との対応関係を考察することを目的としているので、インドネシア語の「態」については論じないことにする。Focus と並んで以下の Schachter の例のように topic という術語も同じ意味で用いられる。

は、Schachter (1976: 494-495) からの例文である。

(21) *Mag-salis ang babae ng bigas sa sako para sa bata.*

AT-will-take-out T – woman G – rice D – sack B – child

“The woman will take some rice out of a/the sack for a/the child.”

(22) *Aalisin ng babae ang bigas sa sako para sa bata.*

GT-will-take-out A – woman T – rice D – sack B – child

“A/The woman will take the rice out of a/the sack for a/the child.”

(AT=actor topic, GT=goal-topic, T=topic, A=actor, G=goal, D=direction, B=beneficiary)

上記の例(21)及び(22)は、同じことについて述べる文であるが、その違いは、「主題」の選択にある。主題は、*ang* で標示されている。下線部は、文のそれぞれの「主題」(*ang*)、と「主題」格の役割を示す動詞の接辞(*mag-*, *-in*)である (Schachter 1976: 495 参照)。例(21)における *mag-* は動詞の actor-topic 接辞、例(22)の *-in* は動詞の goal-topic 接辞である。

インドネシア語は、フィリピン諸語のような主題の標示を持っていないが、動詞に接辞が付くことによってその形が変化するという点でお互いに似通っている。接頭辞「*di-* + 動詞」及び「*Ø*-動詞」は、その一例である。

2.4.1. インドネシア語の「*di-*動詞」及び「*Ø*-動詞」構文

インドネシア語の「*di-*動詞」及び「*Ø*-動詞」構文は、下記の表のようにまとめることができる。

表 2-2: インドネシア語の patient voice 構文

	動作対象	否定詞	助動詞	動作主	動詞	動作主
A	<i>Surat itu</i> letter that	<i>tidak</i> NEG	<i>boleh</i> may	<i>saya/anda</i> 1SG/2SG	<i>Ø-kirim</i> Ø-send	

「*di-*動詞」の機能として近年提唱されている「Agent Defocusing (脱エイジェント化)」も考えられるが、以下の例文にあるように、Agent が全く言及されない *ter-*接頭辞の方がこの機能をより担っていると考えられる。

- Pintu itu di-buka oleh Ari.* (ドアはアリによって開けられる。
door that DI-open by Ari)
- Pintu itu ter-buka.* (ドアは(自然に)開く。
door that TER-open)

B	<u>Buku itu</u> book that	<i>tidak</i> NEG	<i>harus</i> must		<i>di-baca</i> DI read	(oleh) Ali (by) 3SG
C	<u>Rumah itu</u> house that	<i>tidak</i> NEG	<i>sedang</i> being		<i>di-perbaiki</i> DI renove	

A 列の文は、動作主が第一人称及び第二人称であり、B 列は第三人称、C 列は動作主が無人称の文である。表が示すように、インドネシア語では動作主が第一人称と第二人称の場合は動詞のみ (Ø-接頭辞)、動作主が第三人称と無人称の場合は動詞に **di-** という接頭辞が付けられる。

本論文でいうインドネシア語の「**di-**動詞」に対する「能動態動詞」は、「基本動詞」(語幹)のみ、ないしは「基本動詞+頻度・継続などを表す接尾辞 (-kan, -i など)」である。具体的には、**meN-**能動態は、「基本動詞」(語幹)の意味のみ、**meN-kan** の場合は「基本動詞+使役・便宜供与」、**meN-i** の場合は「基本動詞+場所・ゴール」の意味である。また、インドネシア語では、人称・時制などによる動詞の活用形は存在しない。

動作主が第三人称の場合は、**oleh 'by'** を動詞に拘束されず、文頭に置くことが可能である(23)。また第三人称の動作主が代名詞の場合は、-nya¹⁰⁾ になり、動詞または **oleh** の後に **enclitic** として付加される(24)。

(23) *Oleh Ali buku itu **di-baca**.*

by Ali book that **DI-** read

「その本はアリさんが読んだ。」

(24) *Buku itu **di-baca-nya**. または Buku itu **di-baca** oleh-nya.*

book that **DI-** read -3SG book that **DI-** read by -3SG

「その本は彼／彼女が読んだ。」

談話において文脈によって参照することができる場合は、動作対象を省くことも可能である。これにより、動作対象が定名詞でない場合は不自然な文になる(上記(p.24-25)のインドネシア語の例 3.及び 4.)。しかし、下記のような場合は、動作対象が不定名詞でも可能であると考えられ、談話の最初に出現した不定名詞は文頭に置かれ、文全体が談話の新情報になる。

¹⁰⁾ -nya には、様々な用法があり、それについては第三章で詳しく述べるつもりである。

(25) 《公式の事柄》

Peraturan harus di-patuhi.

rule must DI- obey

「ルールは従うべきである。」

(26) 《一般情報》

Kopi di-tanam di daerah dengan perbedaan temperatur besar.

cofee DI- plant in area with difference temperature big

「コーヒーは気温差が大きな地域に栽培される。」

Jagung dan ubi banyak di-konsumsi masyarakat Indonesia timur.

Corn and tuber much DI- consume people Indonesia east

「ともしこしと芋は東インドネシアの人々がよく食べる。」

表で網掛けされた部分は、順序を置き換えることができないが、動作対象は文頭にも、文末にも置くことが可能である。しかし、B 及び C 列において、動作対象と「di-動詞」を倒置することに関しては少し複雑な問題がある。特に、「di-動詞」に接尾辞-nya が付く場合であり、その用法については、次の節で述べることにする。

2.4.2. インドネシア語の「di-動詞」及び「Ø-動詞」の用法

本節ではインドネシア語の「di-動詞」及び「Ø-動詞」の用法を見てみたい。現在でもこの動詞形式の使用法については、完全な説明はまだないが、上述のようにこの構文は、受身がその用法の中心となっている。Chung (1976)によれば、インドネシア語は SVO 言語で、他動文の動詞に meN-接頭辞が付けられる ((27)及び(28))。

(27) *Ali **mem**-baca buku itu.* ¹¹⁾

A. Trans-read book the

‘Ali read the book.’

(Chung 1976: 59)

(28) *Saya **mem**-baca buku itu.*

1SG meN-read book that

¹¹⁾ Chung, Kähler による例文は古い綴りを使っている。本論文では筆者による新しい綴りに書き換えられている。

‘I read the book.’

Chung は、能動文には、《Canonical Passive》と《Object Preposing》という二つの受動文の構造があると指摘している。《Canonical Passive》の場合は、動作主が第三人称である。以下の例(29)は、上記の例(27)の受身形である。しかし、動作主が第一人称・第二人称の場合(28)は、(30)のようになり、この形式は、《object preposing》と呼ばれる。目的語が文頭に置かれるため、他動詞を標示する接頭辞「meN-」は有効性を失い、その場合、接頭辞「di-」を使わず、Ø-接頭辞になる。

(29) *Buku itu di-baca (oleh) Ali.* 《Canonical Passive》

book the Pass-read by A.

‘The book was read by Ali.’

(loc.cit.)

(30) *Buku itu saya baca.*¹²⁾ 《Object Preposing》

book the I read

‘I read the book.’ or ‘The book, I read.’

(ibid.: 60)

¹²⁾ Chung (1976)は《object preposing》は、表層形式が object topicalization のようであり意味的にも能動であるが、Subject-to-Object Raising, Equi, など幾つかの統語的規則との相互作用を調べることによって構文的に《canonical passive》のように振る舞う証拠を挙げている。

Subject-to-Object Raising の例は次のようになる。

以下のインドネシア語の文の目的語は、埋め込み節であり、埋め込み節は《object preposing》

(O)と《canonical passive》(C)である。

O: *Mereka anggap buku ini sudah saya baca.*

they believe book this perf I read

“They believe this book, I have read.”

C: *Mereka anggap buku ini sudah di-baca Ali.*

they believe book this perf pass-read A.

“They believe this book has been read by Ali.”

以下は、埋め込み節の ‘saya’ ‘私’ と ‘Ali’ が、主節に移動し受動化される object raising の文である。

O: **Saya di-anggap mereka buku ini sudah baca.*

I pass-believe by them book this perf read

(I was believed by them this book to have read.)

C: **Ali di-anggap mereka buku ini sudah di-baca.*

A pass-believe by them book this perf pass-read

(Ali was believed by them this book to have read)

さらに以下は、埋め込み節の ‘buku ini’ が主節に移動し受動化される object raising の文である。

O: *Buku ini di-anggap mereka sudah saya baca.*

Book this pass-believe by them perf I read

“This book is believed by them to have been read by me.”

C: *Buku ini di-anggap mereka sudah di-baca Ali.*

Book this pass-believe them perf pass-read A.

“This book is believe by them to have been read by Ali.”

主節の object raising は主節が埋め込み節の主部の場合に限られるという規則がある。以上の文が示すように ‘saya’ と ‘Ali’ が object raising された場合は非文になる。つまり ‘Saya’ は《object preposing》の主部ではなく、《canonical passive》の ‘Ali’ と同様である。このことによって、《object preposing》は《canonical passive》のように振る舞い、受動文として見なされ得るということが分かる。他の例は Chung (1976)を参照されたい。

例文(29)の構文は上記の表 2 の B 列と C 列、例文(30)は A 列と同様である。森山・柏村 (2003)は、「di-動詞」及び「Ø-動詞」構造を《受動形（目的語優先）の文》と規定し、受身の意味を持つ受動文として次の例を挙げている。

- (31) *Pencuri itu di-tangkap oleh polisi.* (森山・柏村 2003: 64)

thief that DI- arrest by police

‘That thief was arrested by the police.’

修飾関係を形成する先行詞が目的語の場合、つまり動作対象を修飾する場合は「di-動詞」あるいは「Ø-動詞」が使用される。

- (32) *Surat yang di-tulis-nya itu / terlalu panjang.*¹³ (ibid.: 95)

letter LINK DI- write-3SG that too long

「彼／彼女が書いた手紙は長すぎる。」

- (33) *Riset yang di-adakan-nya / belum selesai.* (Nothofer/Pampus 2001: 139)

research LINK DI- carry out- 3SG not yet finish

‘Die Untersuchung, die von ihm durchgeführt wird, ist noch nicht beendet.’

「彼が行っている研究はまだ終わっていない。」

この動詞形は、副詞としての機能を持っている。

- (34) *Orang itu mati di-bunuh.* (Kähler 1965: 101)

person that die DI- kill

‘Jener Mensch starb eines gewaltsamen Todes.’

「あの人は殺害されて、死亡した。」

相手に何かを要求するとき、「di-動詞」及び「Ø-動詞」の形式がよく使われる。

- (35) *Tolong buku itu di-beli!* (Nothofer/Pampus, *op.cit.*: 160)

please help book that DI- buy Lit. Das Buch wird bitte gekauft.

‘Kaufen Sie bitte das Buch!’

¹³ インドネシア語のリンカー yang については第四章で詳しく述べる。

「その本は買ってください。」

例(35)は第二人称に対しての要求であるが、「Ø-動詞」を使わず、無人称の文とし「**di-**動詞」を使用している。これは相手を直接指定しない、より丁寧な文と考えられる¹⁴⁾。比較のために、相手を直接指す以下の要求文(36)も挙げることができる。

(36) *Tolong buku itu Anda Øbeli!*

please help book that 2SG Ø- buy

「その本は（あなたが）買ってください。」

要求文を否定する場合は、(37)のような文が挙げられる。(ibid.: 162)

(37) *Buku itu jangan di-ambil! または Jangan di-ambil buku itu!*

book that NEG **DI-** take NEG **DI-** take book that

‘Nehmt bitte nicht das Buch!’ lit. Daß das Buch nicht genommen wird!

「その本は取らないでください。」

下の例(38)～(40)は、動詞句が動作対象に先行する場合である。

(38) 《掲示などで「禁止する」などの動作を強調する場合》

A. *Di-larang masuk* (森山・柏村 op.cit.: 112)

DI- prohibit enter

「入ることは禁じる・立入禁止」

B. *Ø-Beli buku itu!* (例(36)よりもっと強い要求文である)

Ø - buy book that

‘Buy that book!’

(39) 《過去に完了した連続する行為を描写するため》 (Kähler, op.cit.: 103)

Dia pergi duduk di kursi di sudut kamar.

3SG go sit on chair in corner room

¹⁴⁾ 日本語でも「れる、られる」による尊敬の用法は、人の動作を間接的に自然の状態として言い表す自発的表現から発生したとされるが、インドネシア語の尊敬は、むしろ三人称の拡大的使用による間接表現から発生したと考えられる（崎山 1991: 281）。

Lambat-lambat di-buka-nya kotak tempat sigaret, lalu di-ambil-nya sebuah,

slowly DI- open -3SG box place cigarette then DI- take -3SG one

di-cocokkan-nya ke mulut-nya, kemudian di-pasang-nya dengan korek api.

DI- put -3SG to mouth -3sg.poss then DI- put on -3SG with match

「タバコの箱をゆっくりあけ、一本取り出し、口にくわえ、マッチで火をつけた。」¹⁵

Verhaar (1988)は、(39)のような構造は、日常会話や文学作品 (narrative・物語) によく見られ、一次元の連続の動作を語るあるいは描写するためによく使われると指摘している。キリスト教の聖書では、英語版の他動文のほとんどが、インドネシア語の旧版では、「di-動詞」構文によって訳され、その際「di-動詞」と動作対象が倒置された構造を示している。彼は、以下のような例を挙げている。

(40) *Yesus meng-ambil roti, di-ucapkan-nya doa syukur, di-bagi-bagi-nya roti itu,*

meN- take bread DI-say-3SG prayer tanksgiving DI- divide-3SG bread that

dan di-berikan-nya kepada murid-murid-nya seraya ber-kata:...

and DI- give -3SG to disciple -3SG.poss while BER- say

‘Jesus took bread, said a prayer of thanksgiving, divided the bread, and gave it to his disciples, saying:...’

しかし、前節で述べたように「di-動詞-nya」が動作対象に先行する場合、解釈はやや複雑になる。安田(2016)は、補文中において、-nya が「di-形動詞」に付加された場合、それを動詞句として捉えるか (-nya は第三人称の動作主を示す)、名詞句として捉えるか (-nya は動詞を名詞化する機能を持っている) という問題について論じている。以下は、その例である (安田 2016: 6)。

(41) *Kami meng-usulkan supaya [di-bangun gudang untuk penyimpanan] (後略) .*

1PL meN-propose in order that DI-built warehouse for storage

「私たちは、保存のために倉庫が建てられるように提案した。」

¹⁵ Er (ging(und)) setzte sich auf einen Stuhl in der Zimmerecke. Ganz langsam öffnete er (*di-buka-nya* wurde von ihm geöffnet) die Zigarettendose, dann nahm er (*di-ambil-nya* wurde von ihm genommen) eine (*sebuah*), er steckte (sie) (*di-cocokkan-nya* (sie) wurde von ihm gesteckt) in (*ke*) den Mund, darauf (*kemudian*) zündete er (sie) an (*di-pasang-nya* (sie) wurde von ihm angezündet) mit (*dengan*) einem Streichholz.

(42) ?? *Kami meng-usulkan supaya [di-bangun-nya gudang untuk penyimpanan]* (後略) .

1PL meN-propose in order that DI- built-nya warehouse for storage

「私たちは、保存のために倉庫が彼によって建てられるように提案した。」

(43) *Kami meng-usulkan supaya [gudang untuk penyimpanan di-bangun-nya]*.

1PL meN-propose in order that warehouse for storage DI-built-nya

「私たちは、保存のために倉庫が彼によって建てられるように提案した。」

例(41)は正しい文であるが、(42)は、不自然な文である。安田は、(42)のように接続詞 *supaya* に導かれる補文では-*nya* が「di-動詞」に付加されると、かえって不自然になるのはどうかということを問題にしたが、最後まで満足した結論に辿り着かなかった。(43)のように動作対象と動詞句が倒置されない場合は、自然な文になることが、一般に不思議な現象と見なされる傾向にある。

以下(44)-(47)のように、「di-動詞」とその動作対象を倒置しない場合は、接続詞 *supaya* 及び接尾辞-*nya* の有無に関らず、文中における補文として自然な文になる ((43)と同じ構文)。

(44) *Kami meng-harapkan [sekolah di-bangun]*.

1PL meN- hope school DI-built

「私たちは学校が建てられることを期待している。」

(45) *Kami meng-harapkan [sekolah di-bangun-nya]*.

1PL meN- hope school DI-built -3SG

「私たちは学校が彼によって建てられることを期待している。」

(46) *Kami meng-harapkan supaya [sekolah di-bangun]*.

1PL meN-hope in order that school DI-built

「私たちは学校が建てられるように期待している。」

(47) *Kami meng-harapkan supaya [sekolah di-bangun-nya]*.

1PL meN-hope in order that school DI-built-3SG

「私たちは学校が彼によって建てられるように期待している。」

上記の例(47)のように、接続詞 *supaya* を使用し、倒置しない「di-動詞-*nya*」の構文を補文に入れた場合、自然な文になるが、以下の「di-動詞-*nya*」の構文を倒置する場合(51)、不自然な文になる。

(48) *Kami meng-harapkan [di-bangun sekolah].*

1PL meN-hope DI-built school

「私たちは学校が建てられることを期待している。」

(49) *Kami meng-harapkan [di-bangun-nya sekolah].*

1PL meN-hope DI-built-NYA school

「私たちは学校が彼によって建てられることを期待している。」

(50) *Kami meng-harapkan supaya [di-bangun sekolah].*

1PL meN-hope in order that DI-built school

「私たち学校が建てられるように期待している。」

(51) ?? *Kami meng-harapkan supaya [di-bangun-nya sekolah].*

1PL meN-hope in order that DI-built-NYA school

「私たちは学校が彼によって建てられるように期待している。」

《動作対象－「di-動詞-nya」》構造における-nya は、第三人称動作主を表している。しかし、その構造が倒置された場合、《「di-動詞-nya」－動作対象》構造の-nya は、動詞を名詞化する機能を果たす。

-nya により名詞化された「di-動詞-nya」は、一例を挙げると “*di-rombak-nya kabinet*” ‘the resuffle of cabinet’, “*di-hancurkan-nya desa itu*” ‘the destruction of a village’ のような名詞句である¹⁶。以下(52)及び(53)における下線部も同様の例である。

(52) *Di-perbaiki-nya jembatan itu // mem-perlancar transportasi darat.*

DI-remove-NOM bridge that meN-expedite transportation land

「その橋の改修で陸送を容易にする。」

(53) *Di-ledakkan-nya perahu nelayan asing yang masuk laut Indonesia // tidak me-nyelesaikan*

DI- bomb-NOM vessels fishing foreign LINK enter sea Indonesia NEG meN- solve

masalah.

problem

「インドネシアの海域に入る外国漁船の爆撃は、問題を解決しなかった。」

上記 *meng-harapkan* 「期待する」という動詞には、名詞句または節が後続可能である。従っ

¹⁶ この構造は、「pe-動詞-an」＋名詞と似通っているが、両者の相違点は、本論文では扱わない。

て、(44)、(45)、(48)、(49)、(50)の文は、自然な文である。一方、接続詞 *supaya* には、節のみしか後続することができない。従って、上記の例(51)の接続詞 *supaya* に後続する要素は名詞句なので、非文になる。

例(54)では、「」の中の要素はいまだ名詞句であり不自然である。そこで、(55)のように動詞を加えると自然な文になる。

(54)?? *Kami meng-usulkan supaya [di-bangun-nya gudang untuk penyimpanan].* (再掲=(42))

(55) *Kami meng-usulkan supaya [di-bangun-nya gudang untuk penyimpanan / di-tunda].*

1PL meN-propose in order to DI- built-nya warehouse for storage DI-postponed

「私たちは、保存のための倉庫の建設が延期するように提案した。」

上記の例(39)及び(40)の倒置構造における-nya が第三人称動作主として捉えられ得るのは、それが物語文だからである。つまり、この場合-nya は連続的動作を語るあるいは描写するために使われている。以下(56)も同様の例である。

(56) *Ibu meng-goreng pisang, lalu di-berikan-nya kepada anak-nya.*¹⁷⁾ (Kähler, *op.cit.*: 102)

Mother meN-fry banana then DI- give -3SG to child-3SG.poss

Lit. 'Mother fried bananas and were given by her to her child.'

特に文学作品では、動詞句（述部）を文頭に置くことは、読み手・聞き手の関心を継続させるためと考えられる。その際注意することは、*narrative sentence* では、倒置した「di-動詞-nya」構造は、談話の初めには現れ難いということである。以下の(57)は非文であるが、(58)の場合は、動作主 “*seorang kakek*” を含む節を導入することによって自然な文になる。

(57)* *Pada jaman dahulu, di-tebang-nya sebuah pohon.*

in period ago DI-cut down-3SG a tree

「むかし、むかし、彼によって一本の木が切り倒された。」

(58) *Pada jaman dahulu, seorang kakek pergi ke hutan dan di-tebang-nya sebuah pohon.*

in period ago an old man go to forest and DI-cut down-3SG a tree

「むかし、むかし、（ある）おじいさんが森へ行って、一本の木を切り倒した。」

¹⁷⁾ Mutter briet Bananen (pisang=O.), dann (lalu) wurden (sie) von ihr an ihr Kind = ihrem Kind gegeben = dann gab sie (sie) ihrem Kinde.

2.5. 小説から取られた日本語の「を」格項主題化文とインドネシア語の「di-動詞」及び「Ø-動詞」構文の実例

日本語の「を」格項の主題化文の出現度は、受動文ほど多くはない。上記 2.3、では堀川 (2012)の「を」格項主題化文の例と筆者によるインドネシア語訳の対応が示されたが、本節では、堀川の分類に基づいて、村上春樹氏の「ノルウェイの森」から幾つか「を」格項の主題化文を取り上げ、それらの文とインドネシア語版の訳文との対応関係を見てみたい。

- 《処置課題—処置内容》という意味関係を持っている「を」格項の主題化文：

(59) また頭開くんじゃないでしょうね？(p. 79)

Tapi, kepala-nya tidak akan di-bedah lagi, kan? (p. 352)

but head -3SG.poss. NEG will DI- operate again tagQ

(60) 放しちゃだめよ。なかなかあんな子いないんだから。(p. 86)

Jangan Ø-lepaskan ia, karena jarang sekali ada anak seperti-nya. (p. 358)

NEG Ø- let go 3SG because rare very be child (girl) like -3SG

(61) 食卓はすっかりほこりを落としてからニスを塗りなおした。(p. 196)

Meja makan ku-Ø-vernish lagi setelah ku-Ø-bersihkan debu-nya. (p. 460)

dining table 1SG- Ø-varnish again after 1SG- Ø-clean dust -ART

(62) 放っておいても物事は流れるべき方向に流れるし、...(p. 246)

Di-biarkan pun segala sesuatu-nya akan mengalir ke arah yang semestinya ... (p. 505)

DI- let even all things -ART will flow to direction LINK should be

(63) カーテンはときどき洗うものだというのを誰も知らなかったのだ。(p. 31)

... tak seorang pun tahu bahwa gorden itu sesekali harus di-cuci. (p. 24)

NEG a person even know LINK curtain ART once must DI-wash

- 《説明対象—説明内容》という意味関係を持っている「を」格項の主題化文：

(64) このレコードあなたが直子にプレゼントしたんでしょ？(p. 283)

Piringan hitam-nya kamu Ø-hadiahkan kepada Naoko, kan? (p. 541)

record -ART 2SG Ø- present to Naoko tagQ

(65) この二曲は直子が死んだあとでマスターしたのよ。(p. 284)

Dua lagu ini aku Ø-kuasai setelah Naoko tidak ada. (p. 542)

two song this 1SG Ø-master after Naoko NEG be

(66) このことは今まで殆ど誰にも話したことはない...(p. 294)

Hal ini belum pernah di-ceritakan-nya kepada siapapun, ... (p. 274)

matter this not yet ever DI- tell -3SG to anyone

(主題(「を」格項)及びインドネシア語の動作対象、そして「di-動詞」「Ø-動詞」は、下線で、di-接頭辞とゼロ接頭辞は太文字で示した)

以上の様に、日本語の「を」格項の主題化に関する上記の例文(59)～(66)が、インドネシア語の「di-動詞」および「Ø-動詞」の構文と対応することが分かる。

《説明対象》という意味を持つ「を」格項の主題化に関する例文(64)～(66)は、現在ここに存在するもの、ここに存在する由来ないし出自の事情を説明する文と見なすことができ、インドネシア語の「di-動詞」及び「Ø-動詞」の構文と対応する。

《処置課題》という意味を持つ「を」格項の主題化に関する例文(59)～(63)もインドネシア語の「di-動詞」と「Ø-動詞」の構文と対応している。例文(59)の「頭」は不定名詞であるが、インドネシア語の場合は、動作対象が主語になる場合、特定の名詞句であり、文脈から見て、「頭」は、手術を受けた主人公の父の頭である。従って、“*kepala*”「頭」には第三人称の所有主代名詞-*nya* が付いている。

以上、日本語の「を」格項の主題化文はインドネシア語の「di-動詞」及び「Ø-動詞」構文と対応関係があることを述べた。インドネシア語では、助詞「は」のような他のことと対照する機能を持つ文法的手段が存在しないので、日本語の名詞句が不定名詞の場合、インドネシア語にそのまま訳すと不自然な文になり、それを特定化するための手段を講じなければならぬことが分かる。日本語において主題になる名詞句は、インドネシア語に対応する形が文脈／コンテキストに応じて様々である。

2.6. まとめ

インドネシアでは、動作対象が主語になる(文の主点になる)場合、「di-動詞」及び「Ø-動詞」構文が用いられる。その影響で、インドネシアの日本語学習者は、日本語の「を」格

項主題化文をあまり使用しない傾向にあり、その結果、日本語の受身形「(ら)れる」の誤用が多く見られる。同じく、日本のインドネシア語学習者は、インドネシア語を使用する際、母語干渉により、「を」格項主題化文を直訳した（*動作対象+動作主+meN-動詞）を使うことがしばしば観察される。

本章は、日本語の「を」格項主題化文がインドネシア語の「di-動詞」及び「Ø-動詞」構文に対応することを示した。更に、倒置した《目的語－「di-動詞-nya」》構文、つまり《「di-動詞-nya」－目的語》構文をめぐる問題についてもその説明を試みた。

日本語では、「は」で表す部分は、動詞に直接関係を持っていない。一方、インドネシア語の場合は、文の主部は必ず動詞形の変化に直接関わっている。つまり、日本語において目的語を主題化する場合は、インドネシア語では、その目的語は文の主語になり、その際「di-動詞」「Ø-動詞」構文を使用する。

また、日本語において、主題をマークする「は」は、他のことと対照する機能を持っており、「は」でマークされた要素は、冠詞などで特定化する必要は全くない。一方、インドネシア語の主語の場合は、一般的なことを述べない限り、定名詞句が要求される。

第三章

日本語「象は鼻が長い」構文とインドネシア語

“Gajah belalainya panjang” 構文について

3.1. はじめに

日本語の「は」と「が」の用法の区別は、特に母語にそのような標示がない日本語学習者にとって容易なものではない。本章では、これらの二つの助詞が同時に現れる文として日本語の「象は鼻が長い」構文を取り上げ、この構文と意味的に対応するインドネシア語の“Gajah belalainya panjang”構文を対照することにより、それぞれの構文の特徴を明らかにすることを目指している。

本章では、まず、日本語の「有題文」（「象は鼻が長い」構文）及びインドネシア語の「有題文」の先行研究を整理しその論点を明らかにする。更に、「象は鼻が長い」構文の「措定文」研究の観点に基づいて、インドネシア語の-nya について考察を加え、最後に、それらの構文の対応関係を明らかにする。

3.2. 日本語及びインドネシア語の「有題文」について

日本語の「～は～が」構文の中で一番有名な例は、三上の「象は鼻が長い」文であり、この文において「は」の兼務の問題が扱われている。第一章で述べたように、「象は」は「象の」を兼務している。「象は鼻が長い」構文は、インドネシア語の場合は、次の(b)と対応すると考えられる。

a) *Belalai*¹⁸⁾ *gajah* / *PANJANG*.

主部

述部

鼻

象

長い(象の鼻が長い)

→ b) *Gajah* // *belalai-nya* / *PANJANG*.

主題

コメント

象

鼻—(象の) 長い (象は鼻が長い。)

¹⁸⁾ 象の鼻に指示する語

元の文(a)の所有者“*gajah*”「象」¹⁹⁾が、(b)では、主題になり、文頭に立つと、所有物“*belalai*”「鼻」は後続する第三人称単数の所有代名詞（接尾辞-*nya*）で標示される。

3.2.1. 日本語における「有題文」及び「象は鼻が長い」構文について

丹羽(2000: 100)は、日本語の「Nは述部」という文において、「Nは」の部分为主题（あるいは題目、トピック）と呼び、「は」の働きを主題提示と規定し、「述部」の部分は提示された主題に対する解説（あるいは説明、叙述、陳述、評言、コメント）を表すと述べている。このような主題解説関係をなす文を主題文（有題文）と言う。主題解説関係とは、文を「N」と「述部」という二つの部分に分け、「N」について、それがどうであるか、どうなったかなどという説明を与えるという関係である。端的に言えば、主題とは「Xについて」という関係を表す。日本語の「有題文」として次の例が挙げられる。²⁰⁾

- (1) 地球は青い。 (丹羽 2000: 100)
(2) 山田は沖縄へ旅行に行った。 (*loc.cit.*)

久野(1973)は、「は」には二つの異なった用法があると述べている。久野に従えば「は」の用法は次のようになる。《主題》となり得るのは既に会話に登場した人物・事柄、すなわち、現在の会話の登場人物・事物リストに登録済みのものを指す名詞句である。

- (3) 《主題》を表す：「太郎は学生です。」 (久野 1973: 27)
(4) 《対照》を表す：「雨は降っていますが、雪は降っていません。」 (*ibid.*: 28)

丹羽の例(1)も文脈によっては対比関係が潜在しており、次の(5)の意味で用いられること

¹⁹⁾ 日本語では、「所有者—所有物」であるが、インドネシア語では、「所有物—所有者」になり、修飾されている名詞は先に述べられる。

²⁰⁾ 主題を表す形式は「は」が代表的なものであるが、それに限られるわけではなく、例えば話し言葉では助詞「って」がよく用いられる。例えば、「山田さんっておもしろい人だね。」という例が挙げられる。主題を表す形式には、次のようなものもある。「彼ったらひどいのよ」、「あの子、あそこで何してるの」、「一郎いる？— 一郎なら出かけましたよ」「この問題について言えば、そう簡単に解決する問題だとは思えない」「例の件ですが、全く大変なことになりましたね」という例が挙げられる（丹羽 2000: 106）。これらは、同じ主題を表すという中で、それぞれが意味・用法上「は」と異なる個性を持っている。本論文では、この問題については立ち入らないことにする。

がある。その場合は同様に對比主題を表す。

(5) 太陽は白いが、地球は青い。

(丹羽 *op.cit.*: 101)

「は」と「が」の使い分けにおいて、その文の表す事柄が一時的なものであるか恒常的なものであるかということが関与することが知られているが、以下の例(6)のように一回性の動作を表す場合は「は」(主題文)、「が」(無題文)のどちらもごく自然である。

(6) 山田さん {は／が} 公園を散歩した。

(*loc.cit.*)

例(6)のような一時性の事柄は、恒常性の事柄とは異なり、二通りの把握ができる。一つは、(6)が「山田さん」の消息(動静、動向、経歴)を表していると考え、つまり、「述部」は一回性の動作とはいえ「N」の広い意味での属性を表していると捉えるものである。その場合、(1)(3)と同様、「山田さんは公園を散歩した」という主題文で表すのが自然である。しかし、一方(6)はある時点でこの出来事(山田さんの公園の散歩)が生じたということを表しているとも捉えることもできる。これは、この事柄全体がこの時点で存在するようになったと捉えることであり、「山田さん」が存在してその人がある属性を持つという関係では捉えていない。(丹羽 2000: 102)

日本語の「象は鼻が長い」構文も、「有題文」であり、この構文について、「象」が後続部分で語られる内容の説明対象であり、(1)の「地球は青い」という通常の形容詞文の主語と変わるところはない。ただ、叙述部が「鼻」という主語と「長い」という述語にさらに分かれているのであって、「象」が「説明対象」ということに問題はなく、「象」は主題である。

(堀川 2012: 42)

菊池(2010b)は、「象は鼻が長い」構文では、「鼻が長い」の部分が「象」について語る構造の文であるとし、「象」について語るのに、どのようなことを言えばよいか」ということについて、「鼻が長い」の部分が、「象」についての意味のある情報として機能することが成立条件であると指摘している。次の例を見てみよう。

(7) この食堂は納豆がまずいです。

(菊池 2010b: 25)

この文が「この食堂はどんな食堂ですか」という問への答になりにくいのは、「納豆がまずい」ということが「食堂」を特徴づけるほど重要な情報ではないからである。その反対に、

「鼻が長い」の部分は「象」について語る、つまり「象」を特徴づける意味ある情報を提示する構文であると考えられる。

このような主題の成立条件について、益岡(1987)は、主題にとって「意味のある経験」か否かが次の文の適否を分けると分析し、(8)に比べて(9)は許容度が落ちることを指摘している。²¹⁾

(8) 花子は親友が事故で大けがをした。 (ibid.: 27)

(9) ? 花子は友人がデパートで買い物をした。 (loc.cit.)

「象は鼻が長い」構文については、尾上(1998, 2004)、西川(2013c)による二重主語という観点からの先行研究があるが、本論文では、二つの主語という考え方は取らず、主題の観点からの分析は談話レベル、主語の観点からの分析は文法レベルとして見なすことにした。また、西川は、「象は鼻が長い」構文を「二重指定文」としているが、この問題についてはさらに本章の 3.3.1.節で扱うことにする。

尾上(2004: 16)は、「象は鼻が長い」構文において、「象」はこの文で語られる認識の対象としての主語であり、それについての認識内容を語る部分すなわち述語部分がさらに「鼻」という主語と「長い」という述語とに分かれているものであると指摘している。述部は文の主語「象」の在り方を語る部分である。この「N1 は N2 が述部」においては N1 と N2 の間に「N1 の N2」と言えるような関係が必ず成り立つ。その[N1-N2]関係とは、「象は鼻が長い」におけるような[全体-部分]関係を典型として、「私はもの覚えが悪い」におけるような[個体-能力]の関係、「あいつは父親が医者だ」におけるような[個体-関係項]などにまで広がる。

尾上(1998)は、「象は鼻が長い」のタイプを典型とし、それとの差異に従って、次の表のように D から H まで五つのタイプに分類した。

²¹⁾ 益岡(1987)は、「～は～が」構文を「総主文」と呼んで、「属性叙述」と「事象叙述」に分類した。(8)(9)は、「事象叙述」の例である。

表 3-1: 第二種二重主語構文（尾上 1998: 94）（例文は尾上(2004: 17)によるものである）

「X は Y が Z」構文	X—Z が 主述関係	X・Y は 全体・部分	X—[YZ] が 主述関係	「X は Y」で意味が通じる (Z は好評価に限る)
(D) この壺は色が青い。 日本は国土が狭い。	○	△	○	×
(E) この子は目がかawaii。 神戸は緑が美しい。 この家は壁がきたない。	△	○	○	×
(F) 象は鼻が長い。 あいつは父親が医者だ。	×	○	○	×
(G) いわしは頭がうまい。 相撲は立会いがおもしろい。	×	○	○	○
(H) 焼き魚はさわらがうまい。 小型自動車は日本製がよい。	×	△	△	○

尾上(2004: 17-18)は、「象は鼻が長い」という(F)タイプを中心として、それぞれの要素間の意味関係における僅かな差の生起によって、(F)から(E)(D)及び(F)から(G)(H)という、二つの方向にタイプが拡張したとしている。(E)タイプの「あの子」と「目」の関係は「象」と「鼻」の関係と同じであり、その限りでは「象は鼻が長い」という典型タイプと差がないが、「あの子はかわいい、特にどこがかわいいのか、かわいいのは目だ」というような意味で理解される場合は、「N1 は N2 が述部」の「N1」と「述部」とが直接に主述関係を結んでいてその「述部」の焦点として「N2」が意識されるような特別の意味関係が成立するとしている。この(E)タイプの延長上に(D)タイプがある。「この壺」と「青い」とがそれだけで直接に主述関係を結んでおり、「色」は「この壺」の一面であるには違いないが、「この壺が青い」だけで意味は十分に通じる。従って、「色」の有無によって文の意味に大差は生じない。

更に、(G)タイプの N1 と N2 の関係は、[全体一部分]の関係であって、その限りではこのタイプは「象は鼻が長い」という典型タイプと差がないが、「いわしは頭」「相撲は立会い」とだけ言っても（述部を言わなくても）ほぼ意味が通じるという特徴が指摘できる。(H)タイプも同様に、「焼き魚はさわら」「小型自動車は日本製」と言うだけで意味がほぼ了解されるが、「N1 は N2 が述部」の[N1—N2]の関係が[全体一部分]と言えるかどうかという点で微妙である。典型タイプ(F)や(G)タイプは、「象」とはどんな動物か、「いわし」はどういう食べ物かということを説明する文であり、「N1」についての性質説明の文であるが、(H)タイプは「焼き魚」「小型自動車」というものの性質説明とは言えない。

(H)タイプは、インドネシア語の場合は、“Gajah belalainya panjang”構文と対応しないと考えられる。

(10) 焼き魚はさわらがうまい。

**Ikan bakar // ikan sawara-nya / ENAK.*

fish grill fish sierra-3SG.poss delicious

(11) 小型自動車は日本製がよい。

**Mobil tipe kecil // buatan Jepang-nya / BAGUS.*

car type small production Japan-3SG.poss good

さらに、(G)タイプについては以下 3.4.2.節、例文(83),(84),(87),(88)において詳しく扱うつもりである。

3.2.2. インドネシア語における「有題文」について

本節ではインドネシア語における主題解説関係をなす「有題文」について見てみたい。

インドネシア語は、歴史的にはマレー語といわれていた言語である。インドネシアという国は多言語多民族の国だが、マレー語が他の民族語よりも優先されたのは、歴史の中でマラッカの貿易センターでは、マレー語がコミュニケーションの最も一般的な手段であったことが主な要因であると考えられる。

Van Ophuijsen は、他の民族語の影響を見つけ出しながら、純粋なマレー語を研究してきた。彼はそのマレー語に関する文法書の中でまず次の二つの文を挙げている。

(12) *Anak saudagar itu / SAKIT.*

child merchant that ill

「その商人の子供は病気だ。」

(13) *SAKIT / anak saudagar itu.*

ill child merchant that

「その商人の子供は病気だ。」

一般のマレー語の話者は例(13)をよく使うと言われている。(12)では、“*anak*”「子供」が談話の観点から優先されているが、(13)で優先されているのは、述部の“*sakit*”「病気」である。一方、“*saudagar itu*”「その商人」が優先されて、文頭に立つ場合は、他の商人ではなく、「その商人」という意味を表す。(14) はその例である。

(14) *Saudagar itu // anak-nya / SAKIT.*

merchant that child -3SG.poss ill

「その商人は子供が病気です。」

「その商人」は、「子供」と所有関係を持っており、「その商人」が文頭に転位された場合、元々「商人」が位置していたところに-*nya* が入る。その場合、例(14)は意味的に英語の“(As for) that merchant, his child is ill.” と対応すると考えられる (van Ophuijsen 1983: 89) ²²⁾。

マレー語の話者にとっては(14)より以下の述部“*sakit*”「病気」が主語“*anak*”「子供」に先行する(15)の方が、一般的であると見なされている。

(15) *Saudagar itu // SAKIT / anak-nya.*

merchant that ill child-3SG.poss

「その商人は子供が病気です。」

Labrousse (1978: 163)は文頭に配置される要素を主題と呼び、以下の例(16)を挙げている²³⁾。さらに Labrousse は(16)の代替構文は(17)のようになると述べている。つまり、主部と述部は倒置することができる²⁴⁾。

主題（常に定詞である）// 主部+*-nya* / 述部

(16) *Orang itu // mata-nya / BIRU.*

person that eye -3SG.poss blue

「その人は目が青い。」

(= *Mata orang itu / BIRU.*)

eye person that blue

= 「その人の目が青い。」

²²⁾ Van Ophuijsen, Ch. A. (1910) *Maleische Spraakkunst*. S. C. Van Doesburgh, Leiden. (T. W. Kamil 訳 (1983) *Tata Bahasa Melayu*. Penerbit Djambatan, Jakarta.

²³⁾ Le “thème” est posé en tête de phrase, mais le rapport d’appartenance ou de possession dans lequel il se trouve avec le sujet est marqué par le suffixe *-nya*. Il est à noter que le “thème” est toujours défini. Cette construction est marquée également, à l’oral, par une pause entre le thème et le sujet.

²⁴⁾ Comme variante de cette construction, l’ordre sujet / prédicat (verbe d’état) peut être inversé, selon les règles déjà étudiées.

(17) *Orang itu // BESAR SEKALI / rumah-nya.*

person that big very house-3SG.poss

「その人は家がとても大きいです。」

Li & Thompson (1976: 470)は、インドネシア語は主語卓越型であるが、本節で扱っている「有題文」も存在するとし、その場合主題の位置に立つことが可能な基準形文(canonical sentence)の要素が制約されていると指摘している。つまり、表層の主部、または主部の所有者が主題になることが可能である。例(18)は、主語卓越型に典型的な「主部—述部」から成る文である。それに対し、(19)は、主部が主題になる文であり、(20)は主部の所有者が主題になる文である。

(18) *Ibu anak itu mem-beli sepatu.* (Li & Thompson 1976: 470)

mother child that meN- buy shoes

“That child’s mother bought shoes.”

(19) *Ibu anak itu, dia mem-beli sepatu.* (loc.cit.)

mother child that she meN- buy shoes

“That child’s mother, she bought shoes.”

(20) *Anak itu, ibu-nya mem-beli sepatu.* (loc.cit.)

child that, mother-3SG.poss meN-buy shoes

“That child, his mother bought shoes.”

しかし、第一章 1.1.1.節の Lambrecht (2001)でも指摘したように、左方転位と主題化の観点から、(19)及び(20)の文は、区別する必要がある、四つの左方転位文の基準を満たす例(19)は左方転位文(left dislocation sentence)、一方例(20)は主題化文(topicalization sentence)と細分類できる。(19)では基準形文の主語 “*ibu anak itu*” ‘that child’s mother’が左方転位要素になり、その代わりに人称代名詞 “*dia*” ‘3SG’が節の主部を占め、左方転位要素として機能する。

例(20)の場合は、文頭に転位された要素 “*anak itu*” ‘that child’と、節の主部 “*ibu*” ‘mother’は、所有関係にあり、節の中に代替可能な位置が存在しないので、転位された要素を象徴する人称代名詞は存在しない。従って、標準(ii) “その代わりに節の中に [pronominal が起こる] 位置がある”、及び基準(iii) “[左方転位要素と pronominal が] 同じインデックスを持つ”、を満たすことができず、左方転位文でないことが分かる。

例(20)のような文について、Lambrecht は、転位された要素を *unlinked topics* と呼ぶ。節の中の所有代名詞-*nya* はトピックへの照応リンクとして機能している。*Unlinked topics* 構文はトピックシフトとして機能し特に口語談話で使用されている。

このようにして、Lambrecht はインドネシア語は主語卓越型言語でありながら、主部の所有者のみ主題の位置に立つことができるという「有題文」も持っていることを明らかにした。「象は鼻が長い」文と対応する “*Gajah // belalai-nya / PANJANG.*” はその例である。

3.3. 「措定文」について

「象は鼻が長い」構文を、二重「措定文」とする先行研究も存在する。本節では、Akmajian による「措定文」及び「指定文」の相違を指摘し、さらに西川による「象は鼻が長い」構文の研究を見てみたい。

まず、「措定文」(*predicational sentence*) について、西山(1985: 137)はその典型的なケースとして次のような例を挙げている。

(21) 田中さんは社長だ。

(22) あの女性は魅力的だ。 (西山 1985: 137)

「措定文」はコピュラ文の一種であり、「指定文」(*specificational sentence*)と対照的である。「指定の読み」及び「措定の読み」に関して、Akmajian (1979: 162)は、次のような例文を挙げている。(以下の「措定文」及び「指定文」の相違点も Akmajian (1979)が指摘したものである。)

(23) The first candidate for the trip to Mars is Spiro Agnew. 「指定の読み」

(24) The first candidate for the trip to Mars is short and fat. 「措定の読み」

例(23)及び例(24)の間には直感的に区別が存在することが分かる。つまり、例(23)は、幾つかの候補者から一人を指定する文である一方、例(24)は、候補者に属性あるいは特質を帰する文である。

上述したように、これら二つの文の間の明白な相違は、(23)では候補者が誰であるかが分かる一方、(24)ではそうではないことである。つまり、(24)の文からは候補者が誰であるか

が分からず、その者の背が低く太っているという特質しか分からない。

この二つの文の間の基本的な違いとして、まず、「指定文」の場合は、コンピュータで接続された項目の順序を倒置することができるが(25)、「措定文」の場合は、このような倒置を行った場合非文になる(26)、という点が挙げられる。

(25) Spiro Agnew was the one who we chose to go to Mars.

(26)* Short and fat was the one who we chose to go to Mars.

日本語でも「措定文」「Nは述部」は意味を変えずに「N」と「述部」とを倒置することができない。例えば、(21)に対して、以下の(27)を作ったとしても、これは(21)とはまったく意味が異なる。(西山 1985: 139)

(27) 社長は田中さんだ。 (≠ (21) 「田中さんは社長だ」)

(27)のもっとも自然な解釈は、「誰が社長かという、それは田中さんである」というものである。(21)に対する措定の解釈、つまり「田中という名前を持っている人は社長の地位を有している」とは全く異なることは明らかである。

第二の違いは、措定の場合は、「比較や度合い」という意味に関連している一方、指定の場合にはそのような意味はないという点である。

このように、人はある人について非常に太っている、またはやや背が高い、または他の人より背が高いということを述べることができる。しかし、「指定文」では、例えば、“*Jones is the man who robbed the bank yesterday.*”の場合、「ジョーンズがあまり銀行を襲わなかった」、または「ジョーンズが突き当りに住んでいる人よりもより多く銀行を襲った男である」、ということ述べることができない。

インドネシア語における「措定文」の《主部—述部》の順序の倒置については、述部が名詞の場合も形容詞の場合もある種の自動詞の場合も、特に口語では可能である。

(28) *Anak Bapak Ali* / *SEORANG PELAJAR.* → *SEORANG PELAJAR* / *anak Bapak Ali.*

child Mr. Ali a student

「アリさんの子供は学生です。」

(29) *Lukisan-nya* / *BAGUS.* → *BAGUS* / *lukisan-nya.*

painting- DEF good

「その絵はいいです。」

(30) *Api-nya* / *PADAM*.

→ *PADAM* / *api-nya*.

flame- DEF go out

「火が消える。」

「指定文」の場合は、日本語同様、インドネシア語でも《主部—述部》の順序を倒置することが可能である。

(31) あそこに歩いている人は花子だ。 → 花子があそこに歩いている人だ。

(32) *Ø Yang me-nolong saya* / *ALI*. → *ALI* / *Ø yang me-nolong saya*.

Ø LINK meN- help 1SG Ali Ali *Ø* LINK meN-help 1SG

‘Who helped me was Ali.’

‘It was Ali who helped me.’

3.3.1. 「指定文」が埋め込まれた「指定文」

「象は鼻が長い」構文の先行研究には、二重主語構文の観点からのものがある。西川(2013c)は、二重主語構文としての「象は鼻が長い」構文が、「指定文」が埋め込まれた「指定文」であるとする説明を試みた。

「指定文」「Nは述部」においては、「述部」が属性を表すことがポイントであって、述部は名詞句、形容詞句や形容動詞句、さらにある種の動詞句（例：「しゃれている」）によっても表すことができる。「象は鼻が長い」という「N1はN2が述部」では、「N2が述部」の部分が指定の意味構造をなし、文全体も指定構造をなす。「N2が述部」の部分が「N2」の指示対象に述部で表される属性を帰し、そしてN1の指示対象に「N2が述部」で表される属性を帰すという具合である。

[s 象は [s 鼻が 長い]]

[N1は [N2が 述部]]

上記のように、西川(2013c)は、「象は鼻が長い」構文は、一つの文の中で二重の指定構造が実現された文であると指摘している。そして、彼はこのような構文に関して、以下のような2つの注意点を挙げている。

第一に、「措定文」であれば「N2 は述部」のように「は」であるべきところに「が」が使われているが、これは「措定文」が補文に埋め込まれているからであると考えられる。補文に埋め込まれた場合、「は」が「が」に変わる。

(33)a. 太郎は学生だ。

b. もし太郎が学生なら、...

(西川 2013c: 176)

例(33)と同じことが、「象は鼻が長い」構文の「鼻が長い」にも起こっているわけである。「措定文」が補文に埋め込まれ、「は」が「が」に変わったからと言って、そこに含まれる名詞句の意味機能が変わるわけではない。(33a.)でも(33b.)でも、「太郎」は指示的名詞句であり、「学生」は叙述句である。

第二に、措定構造の埋め込み数には制限がない。例えば、次の文は、三重の措定構造が成立している「象は鼻が長い」構文である。(ただし、制限がないとは言え、三重以上の構造になるととたんに容認性が下がることが多いと考えられる。)以下例(34)に対応するインドネシア語の三重措定構造を挙げることができる。

(34) 日：このホテルはどの部屋も天井が高い。

(*ibid.*: 177)

イ： *Hotel ini // kamar yang mana pun // langit-langit-nya / TINGGI.*

Hotel this room LINK which any ceiling – 3SG.poss high

3.3.2. N1 と N2 との間の意味的關係

日本語の「象は鼻が長い」構文について三上(1955: 252)は、英語としては不自然であつても、最後の訳文(35d.)が最も忠実に日本文の姿を伝えていると述べている²⁵⁾。また、(36)は、柴谷による訳である。

(35)a. *The elephant has a long trunk.*

b. *The elephant's trunk is long.*

c. *The elephant is long-trunked.*

²⁵⁾ “The elephant”というより、“An elephant”の方がより自然な文になると考えることも可能である。

d. *As for the elephant, his trunk is long.*

(36) *The elephant is such that his trunk is long.* (ibid.: 209)

英訳(35d.)および(36)では、“trunk”に“his”が付随しており、“elephant”によって束縛されている。インドネシア語では、「象は鼻が長い」構文は次の(37)に対応すると考えられる。英語と同様インドネシア語でも、“belalai” ‘trunk’に名詞を特定化する第三人称所有代名詞-nya が付随しており、“belalai” は“gajah” ‘elephant’によって束縛されていることが分かる。

(37) *Gajah // belalai-nya / PANJANG.*

elephant trunk- 3SG.poss long

「象は鼻が長い」

このように、日本語の場合、「鼻」の位置にある名詞句が「～の」を伴わずに、「象」との間に何らかの関係があることを示すことができると考えられる。そこでさらに、「象は鼻が長い」構文における「象」と「鼻」の関係がどのようなものであるかを詳しく見てみたい。

尾上(2004: 16-17)は、N1 と N2 の間に「N1 の N2」と言えるような関係が必ず成り立つと述べている。「象は鼻が長い」構文の「象」と「鼻」との意味的關係について、三上は、“ノ的磁力線”(「の」で結ぶことができる関係)であると指摘している。

「N1 の N2」について西山(2003)は、少なくとも五つの異なったタイプが存在するとしている。

表 3-2: 西山(2003)による五つの「N1 の N2」タイプ

タイプ A ※1	N1 と関係 R を有する N2	山田さんの家、洋子の首飾り
タイプ B	N1 デアル N2	看護師の洋子、病気の父
タイプ C	時間領域 N1 における、N2 の指示対象の断片の固定	着物を着た時の母、昭和末期の東京
タイプ D ※2	非飽和名詞(unsaturated noun) N2 とパラメータの値 N1	芝居の主演、小説の作者、太郎の上司
タイプ E ※3	行為名詞句(verbal noun)N2 と項 N1	物理学の研究、この町の破壊

※1 タイプ A だけが、コンテキスト次第で多様な解釈を許す。R はスロットであり、「自由変項」(free variable)であり、スロットの値がコンテキストから語用論的に決定される。例えば、洋子の首飾りの場合は、必ずしも「洋子が持っている首飾り」という解釈だけではなく、「洋子が作った首飾り」、「洋子が買った首飾り」、などという解釈も可能である。

※2 名詞句には、単独で外延(extension)を決定できる名詞と、「 α (ノ)」というパラメータを意味的に含んでおり、その値が定まらない限り、外延を決定できない名詞とがある。前者を「飽和名詞」(saturated noun)、後者を「非飽和名詞」(unsaturated noun)と呼ぶ。タイプ D の非飽和名詞 N2 は、例えば、「主役」を例にとると、ある人について、その人が主役であるかどうかは、どの芝居や映画であるかを決めない限り、なんともいえない。つまり、「主役」は「X の」というパラメータの値が定まらない限り、単独では外延(extension)を決めることができず、意味的に充足していない名詞である。

※3 タイプ E の N2 は、「行為名詞」と呼ばれ、「～する」を付すことによって対応する動詞を構築することができる名詞である。「物理学」を「研究」の内的項(目的補語)とみなし、全体では「物理学を研究すること」という意味を持っている。

この分類に西川は以下の様に述べてタイプ F を追加することも提案している。

(38) タイプ F : 譲渡不可能名詞(inalienable noun) N2 とその基体表現 N1

例 : 象の鼻、この部屋の窓、あの車のハンドル、鍋の蓋、...

「N1 の N2」がタイプ F である時、その主名詞 N2 を譲渡不可能名詞(inalienable noun)と呼ぶことにする。譲渡不可能名詞は、非飽和名詞と混同されることが多い。非飽和名詞とは、「 α (ノ)」というパラメータを意味的に含んでおり、その値が定まらない限り、外延を決定できない名詞である。これに対し、譲渡不可能名詞は、単独で外延を決定できるという意味で、飽和名詞であり、非飽和名詞とは本質的に異なる。(西川 2013b: 65-67 参照)

さらに、西川は、「象は鼻が長い」構文に関連するのは次のような項構造を持つタイプ A、タイプ D、タイプ E、タイプ F であると指摘している。以下その例とインドネシア語の対応する文が挙げられている。

タイプ A :

以下(39)では N1 と N2 の関係を表す自由変項が存在する。この自由変項(関係 R)の具体的な中身は、語用論的な読み込みが必要とされる。このタイプをめぐっては、N1 と N2 との関係はそもそも「所有関係」でなくとも構わない。

(39) 日：田中さんはネクタイがしゃれている。(タイプ A)

イ： *Bapak Tanaka // dasi-nya / KEREN.*

Mr. Tanaka necktie-3SG.poss stylish

タイプ D：

以下(40)の N2「妹」は非飽和名詞（「 α ノ」という外延決定のためのパラメータを含む名詞）であり、N1「太郎」はそのパラメータの値となっている。

(40) 日：太郎は妹が看護師だ。(タイプ D)

イ： *Taro // adik perempuan-nya / SEORANG PERAWAT.*

Taro younger sister -3SG.poss a nurse

タイプ E：

以下(41)の N2「証明」は項構造を持つ行為名詞であり、N1「この定論」はその項として機能している。

(41) 日：この定論は証明が難しい。(タイプ E)

イ： *Teori umum ini // pembuktian-nya / SULIT.*

theory common this proof -3SG.poss difficult

タイプ F：

以下(42)の N2「鼻」は譲渡不可能名詞（ある概念（基体）との関係で意味が規定される飽和名詞）であり、N1 はその基体表現として機能している。

(42) 日：象は鼻が長い。(タイプ F)

イ： *Gajah // belalai-nya / PANJANG.*

elephant trunk -3SG.poss long

上記諸タイプの他に、タイプ B 及びタイプ C があるが、それらは原理的に「象は鼻が長い」構文の N1 と N2 の間に働く“ノ的磁力線”が機能しないと考えられる。また、インドネシア語の“Gajah belalainya panjang”構文との対応関係も存在しない。

(43) 日：看護師は男が親切だ。(タイプ B)

イ：* *Perawat // laki-laki-nya* / RAMAH.

nurse man -3SG.poss kindness

(44) 日：着物を着た時は女性が素敵だ。(タイプ C)

イ：* *Waktu me-makai kimono // perempuan-nya* / CANTIK.

when meN- wear kimono woman -3SG.poss lovely

3.3.3. 「象は鼻が長い」構文におけるノ的磁力線

本節は、三上が指摘している「象は鼻が長い」構文の“ノ的磁力線”がどのようなものかを西川(2013c)の説明に基づいて見てみたい。例として、N2 が非飽和名詞の場合は以下の例が挙げられる。

(45) 太郎は妹が看護師だ。

N2「妹」は非飽和名詞であり、外延決定のためのパラメータを意味のうちに含む。このタイプ D のパラメータがどのように解釈されるかという問題について、西川(20013a)は、非飽和名詞が「～の」という形式を伴わずに用いられた場合、パラメータは、①自由変項（コンテキストを参照し語用論的にその具体的な値が決定される）、あるいは②束縛変項（文中の他の要素とリンクを張ることで充足する）として機能すると述べている。例えば、以下の(46)は、(47a.)と(47b.)の二つの読みが可能である。

(46) 太郎が妹をぶった。

(西川 2013c: 186)

(47) a. 《太郎が α ノ妹をぶった》[α : 自由変項]

b. 《太郎_iが α_i ノ妹をぶった》[α : 束縛変項] (*loc.cit.*)

「象は鼻が長い」構文(46)においては、N2「妹」のパラメータは N1「太郎」によって束縛される束縛変項としてのみ機能し、自由変項としては機能しないと考えられる。非飽和名詞のパラメータが自由変項であれば、コンテキスト次第で多様な値をそこに補完することができ、またその値を「～の」という形式で明示的に表すことが可能である。しかし、「象は鼻が長い」構文の N2 の位置に登場した非飽和名詞のパラメータには、そのようなことは

難しい。

(48) a. ? 太郎は次郎の妹が看護師だ。 (loc.cit.)

b. ? 太郎は花子の妹が看護師だ。 (loc.cit.)

「象は鼻が長い」構文における、N2 に変項が付随し、その変項は N1 によって束縛されるという分析は、タイプ A、タイプ E、タイプ F にも適用することができる。

(49) 《田中さん_iは α_i と関係 R を有するネクタイがしゃれている》(タイプ A)

(50) 《この定論_iは α_i の証明が難しい》(タイプ E)

(51) 《象_iは α_i の鼻が長い》(タイプ F)

“ノ的磁力線”とは、N2 に付随する（目に見えない）変項 α と N1 との間に成立する束縛関係として了解される。それはつまり N1 と N2 との間に束縛変項 α を介した関係である。

以上が西川による「象」と「鼻」の間に存在する“ノ的磁力線”についての解説である。このことから、「象」と「鼻」の間に束縛関係があるので、「鼻」を特定化する必要はないということが分かる。

3.4. インドネシア語の-nya について

崎山(1991: 278)は日本語とインドネシア語の対照研究において、部分・属性を表す「は...が」構文について、そのような日本語の文と並行的なインドネシア語の文として、次の例を挙げている。

(52) *Anjing itu // ekor-nya / PENDEK.*

dog that tail -3SG.poss short

「そのイヌは尻尾が短い。」

しかし、彼はこの構文について何の説明も加えていない。3.2.2.節ですでに述べたように、本論文では(52)のようなインドネシア語の文を「有題文」と呼ぶことにする。例(52)は、次の(53)の「無題文」から派生された文であると考えられる。

(53) *Ekor anjing itu / PENDEK.* 「無題文」

tail dog that short

「その犬の尻尾が短い。」

「無題文」(53) “*Ekor anjing itu / PENDEK.*” の所有者“*anjing itu*”「その犬」が、文頭に転位されることによって、文(52)のようになり、“*anjing itu*”「その犬」の元々の位置に立つ *ekor* 「尻尾」に接尾辞-*nya* が付加される。

本節では、まず、インドネシア語の接尾辞-*nya* の使用機能を先行研究の分類に従って、小説から引用された例文で示す。さらに、名詞の特定化という-*nya* の一つの機能を英語の *the* と比較し、その相違点を考察する。

3.4.1. 接尾辞-*nya* の用法

接尾辞-*nya* の用法に関して、Badudu (1993: 109-114) は次のように分類している。²⁶⁾

① 第三人称単数所有代名詞を表す

Midori me-nyobek buku catatan-nya lalu mem-buat peta jalan menuju rumah-nya

Midori meN- tear book note -3SG.poss then meN-make map road toward house -3SG.poss

dengan rinci. (p.122)

by detail

「緑はノートのパージを破って家までの道筋をくわしく地図に描いてくれた。」(p.135)

② 名詞化を表す

Dari terang-nya sinar bulan aku φ-perkirakan waktu sudah pukul dua atau tiga. (p.249)

from bright -NOM light moon 1SG φ -predict time already o'clock two or three

「月の光の具合からするとたぶん二時か三時だろうと僕は見当をつけた。」(p.268)

③ Agent voice(meN-動詞-*nya*)において第三人称単数代名詞の直接目的語を表す

Langit begitu tinggi sampai-sampai mata terasa sakit bila terus me-mandang-nya. (p.3)

sky so high to such an extent that eye feel hurt if keep meN- view -3SG

「空は高く、じっと見ていると目が痛くなるほどだった。」(p.9)

²⁶⁾ 例文は、村上春樹の小説からの引用であり、それを Badudu (1993) に従って筆者が分類したものである。

④ 第三人称単数代名詞の間接目的語を表す

Tetapi, sekali-kali aku tak akan mem-buka hati untuk-nya, ... (p.60)

but not at all 1SG NEG will meN- open heart for -3SG

「それでも僕は彼には一度も心を許したことはなかったし、…」 (p.69)

⑤ Patient voice(di-動詞-nya)において第三人称単数代名詞の動作主を表す

Ia ber-maksud me-ngatakan sesuatu tetapi di-batalkan-nya, ... (p.133)

3SG BER-intend meN- say something but DI- cancel -3SG

「彼女は何かを言いかけたが思いなおしてやめ、…」 (p.145)

⑥ 定詞を標示する

Tetapi urutan-nya kebalikan dari upacara pagi. (21)

but order -DEF contrary from ceremony morning

(国旗掲揚・降下の儀式の話)「ただし順序は朝とはまったく逆になる。」 (p.29)

⑦ 副詞を表す

... seperti-nya sinar mentari belum men-capai sekeliling mereka, ... (p.31)

like -ADV ray sun not yet meN-reach surround 3PL

「…彼女たちのまわりにだけは夏の光もまだ届いていないように思えるのだが、…」 (p.39)

⑧ 照応を表す (Badudu はオランダ語の *verwijzing* を使用している)

Tapi, yang di-sebut penyembuhan itu konkrit-nya seperti apa? (p.182)

but LINK DI-call treatment that concrete-DEF like what

「その治療というのは具体的にはどうということなのでしょう？」 (p.198)

⑨ 接頭辞 se-と共に最上限を表す

Aku segera kembali ke kamar dan minum air garam se-banyak-banyak-nya ... (p.60)

1SG soon back to room and drink water salt se- much RED -DEF

「もちろん部屋に帰って塩水がぶがぶ飲んださ」 (p.71)

⑩ 第二人称単数所有代名詞 anda/-mu の代わりに使う (口語で「あなたの～」直接言うのを避けるため)

Lahir-nya bulan apa? (p.81)

birth -3SG month what

「何月生まれか、…」 (p.90)

日本人のインドネシア語学習者には次の例(50)のような誤用がよく見受けられる。

(54) *Sekarang kinmokusei. Bau sangat bagus.*

now kinmokusei smell very good

おそらく「今は金木犀。匂いがとてもいい」という内容を伝えたいのであろうが、インドネシア語では、“*Sekarang kinmokusei.*”という文は、先行文が、例えば「私は先ほど彼岸花の写真を撮りました。今は金木犀（の写真を）。」というような文脈がない場合、“*sekarang*” ‘now’ は意味的に「金木犀」と同定（金木犀＝今）され、不完全な文になる恐れがある。日本語では、「は」でマークされる要素があれば、その後続との関係は詳しく述べなくても、聞き手はその前後関係を判断することが可能であると考えられる。一方、インドネシア語の場合は、先行文や動詞などに関する、更に詳しい説明が必要となる。

気候的にも、四季と植物の間に密接な関係がある日本に対して、インドネシアではそのような関係もそこから生じる意識もあまり存在しない。インドネシア語の“*Sekarang musim (season) kinmokusei.*”は自然な文であるが、このような文は日本語においては、特に俳句では、言葉の無駄遣いと思なされる恐れがある。

更に、次の“*Bau sangat bagus.*”の“*bau*” ‘smell’ は、ここでは先行文の「金木犀」と関連しているので、インドネシア語の場合は、「金木犀」に照応リンクとして機能する接尾辞-*nya*を付ける必要がある。また、五感の表現に関する「いい香り」はインドネシア語の“*harum*”に対応する。“*Bagus*”の場合は、見た目がいいという意味を表す。

上記(54)は(55)のようにすると自然で正しい文になる。このように、日本語とインドネシア語の顕著な相違は、後者では「匂い」に対応する語に接尾辞-*nya*の付加が必要であるという点にある。

(55) *Sekarang musim kinmokusei. Bau-nya sangat harum.*

now season kinmokusei smell-3SG.poss very good

日本語の「今は金木犀。匂いがとてもいい」という文の連続においては、「匂い」が特定化されていないが、それは、「匂い」と先行文の「金木犀」との間に束縛関係が働いているからであると考えられる。

3.4.2. 名詞を特定する接尾辞-nya 及び英語の the について

前節では、日本語の「象は鼻が長い」構文は、インドネシア語の“*Gajah belalai-nya panjang.*”と対応関係があり、“*belalai*” ‘trunk’に付加されたリンク-nya には、“*belalai*” ‘trunk’と“*gajah*” ‘elephant’の照応関係を示す用法がある、ということを指摘した。このように、インドネシア語の-nya も名詞を特定する機能を持っており、その点において英語の the と対応関係があると考えることが可能である。本節では、英語の the の分類に従って、-nya との対応関係を考察したい。

名詞を特定するというのは、名詞という文の要素を限定することである。例えば、「犬」という動物名を発話する際、この語は一般の犬を指すわけであり、一般の概念について話したいときに使われる。コミュニケーション行動の一つである談話状況において語彙の概念を狭くし、特定の「犬」について話したい場合は、話し手は聞き手が特定の「犬」について認識することができると想定し、「犬」を発話する際に特定化を行う。

名詞を特定するために言語は様々な手段を用いるが、例えば英語には定冠詞というものがあり、それは表層構造で名詞を特定するための標示機能を有する。それとは反対に、表層構造的標示をあまり必要としない言語もあれば、まったく表層構造的標示を持っていない言語も存在する。定冠詞と並んで、「この」「その」（指示詞）なども名詞を特定する機能を持つが、後者はプロトタイプとして談話の中で話し手または聞き手というポイントとの距離を示す働きをする。

以下、本節では Chafe (1972, 1976) による英語の the の分類に従ってインドネシア語-nya の考察を試みる。

Chafe によれば、次の二つの状況を満たす場合、話し手は文脈上において名詞特定化の標示の付加が必要であることを認める。①話し手がある特定のものを知っている。②話し手は聞き手も同じ知識を持っていることを想定している。

まず、文脈と関係を持たない場合における、the による名詞の特定化について見てみたい。

内在素性を持っている名詞の場合

内在素性を持つ名詞には常に特定の標示が付いていると考えられている。内在素性には proper と unique の二種類が存在する。これら proper と unique という内在素性を持っている語彙単位は自動的に文脈上で特徴付けを受ける。

A) Proper

川、山、などのような語彙は“一般的”という意味を含んでいるが、その意味をさらに狭くしたい場合、名詞を特定化するための標示を付けて、それぞれの名前と呼ぶ。例えば、**the Missouri**、**the Rockies** などがこのグループに属する。この語彙（名前）の意味（つまり何を指すか）は一般的に知られており、それらの名前は公式化されたものである。

一方、インドネシア語では、川や山などの名前には、接尾辞-nya は使用しない。それらの名前は「山」や「川」という語彙に付加される。例えば、“*Sungai(river) Amazon*”, “*Gunung(mountain) Fuji*” などである。

B) Unique

Proper という内在素性を持つ名詞、例えば「山」は、その中に様々な山の名前がある概念であるが、unique という内在素性を持つ名詞においては概念は一つしか存在しない。それは、例えば、“**the sky**”, “**the moon**” などである。

インドネシア語の場合、“**the sky**”のような unique な名詞には、“**The sky is blue.**” “*Langit-nya biru (blue).*”のように、接尾辞-nya が付加される。英語の “**The King**”, “**The President**”のような名詞句に対応するインドネシア語の表現では“***Raja-nya**”, “***Presiden-nya**”のように接尾辞-nya は使用されないが、“**Presiden Obama**”, “**Bapak (Mr.) Presiden**”のように大統領の名前などが添えられた場合その名詞は特定化される。口語の場合は、コンテキストによって接尾辞-nya の使用が可能な場合もある。例えば、“**Presiden-nya masih (still) muda (young).**” ‘The President is still young.’ のような新大統領に関するコメントなどに-nya の使用が見受けられる。

環境の要因で特定される名詞の場合

Proper と unique に属する語彙の場合のように自動的に特徴付けを受けない名詞もある。それらは環境の要因で特定される名詞である。例えば、ある部屋に入って、その窓について話す時、話し手は自分が指摘している「窓」について聞き手がどの窓ということが分かっていると想定している。そのために、話し手は次のように窓を特定することになる：“**the window**”。このような環境の要因による特定は一般的であり、それにより、話し手と聞き手が部屋に入って、その天井、壁、ドア、窓などについてそれらを特定の名詞として話すことが可能になる。

環境の要因で特定化される名詞の場合は、インドネシア語では一般に接尾辞-nya が使用される。“**The window is big.**”のインドネシア語訳は、“*Jendela-nya besar (big).*”になる。このよ

うに「窓」が主部を占める場合は、-nyaが必要となる。しかし、名詞が能動文の目的語の場合(50)、接尾辞-nyaは随意的になる。目的語の場合は一般に-nyaが使用されないが、特に第三者が知らない「窓」、話し手と聞き手の間にしか分らない「窓」の場合は、-nyaが使用される。

(56) *Dia sudah me-nutup jendela/jendela-nya.*

3SG already meN-close window / window-DEF

‘He/She had already closed the window.’

小説などの冒頭にある名詞の場合

例えば、“*The waitress brought him another cup of coffee.*”という小説の冒頭では、読者が前もって、どの「ウェイトレス」あるいはどの「彼」が問題となっているかに関してはっきりした知識を持っていない。著者は定冠詞の使用によって「ウェイトレス」が読者に既に知られていると想定している感を与えているが、それは文学的な手法に基づいた筆者の工夫である。

この小説の冒頭に現れる“*The waitress.*”は、インドネシア語に訳した場合、接尾辞-nyaを使用しない。小説などの文学作品では、文の最初の要素に接尾辞-nyaによって特定化されない *seorang* を使用するとより自然な文になる(57)。

(57) *Seorang pelayan mem-bawakan-nya secangkir kopi lagi.*

INDEF waiter/ess meN- bring -3SG a cup coffee again

‘The waitress brought him another cup of coffee.’

口語

話し手と聞き手の間のみに、ある特別な認識が共有されている状況を考えてみよう。例えば、話し手が家族のメンバーに“*Did you feed the dog?*”と質問した場合、メンバー全員がそれはどの「犬」かを理解する。このように、口語が使用される集団内部では、特定の「犬」の情報は一定の場所と時間において小さなグループによって共有されている。

家族などの小さなグループ内での話し言葉では、インドネシア語においても、「犬」が特定化され、その場合接尾辞-nyaを使用する。

(58) *Anjing-nya sudah di-beri makan?*

dog-DEF already DI- give food

しかし、この狭い範囲のメンバーが通常よく行く場所、例えば、市場、海岸などは、英語の場合は限定されるが、インドネシア語では限定されない。

(59) *Ayo kita pergi ke pasar-Ø.*

Let's 1PL go to market-Ø

‘Let’s go to **the** market.’

次に、談話中での名詞の特定化の形成を見てみたい。ある名詞が談話の中で発話された場合、聞き手がその名詞について知っているとは想定されている時には(60)、英語では定冠詞が付加された名詞句が現れる。

(60) *Once there was a woman who owned a cow. **The** cow...*

この談話の中で形成される定名詞の場合は、文脈によって既に知られていることを表すが、インドネシア語においても二番目の文の「牛」は接尾辞-nyaによって特定化される(61)。

(61) *Pada suatu waktu hidup-lah seorang wanita yang mem-punyai sapi. Sapi-nya...*

PREP once time live foc indef woman LINK meN-have cow cow-DEF

しかし、次のように、ある語彙の出現が必ずしも次の文の名詞の特定化を惹起しない場合が存在する：①名詞が一般の事物の場合(62)。この例の最初の文では話し手が一般の「牛」を話題にしているが、その名詞は次の文で定名詞として扱われる資格を持たない。②名詞が無作為の事物の場合(63)。“Want”, “look for”などの動詞、否定詞を含む文に現れる名詞は無作為の性質を持っている。一度その名詞が紹介されても、次の文で特定の名詞として扱うことは不可能である。

(62) *Once there was a woman who was fond of cows. ***The** cows...*

(63) *Once there was a woman who wanted a cow. ***The** cow...*

このように、文脈によって既に知られている場合でも、後続文で特定化された名詞になるとは限らない。英語と同様にインドネシア語においても名詞の特定化に関する制限が存在する。名詞が一般の事物の場合、例えば上記(62)のような文では、インドネシア語でも後続文の「牛」が特定化された場合、不自然な文になる(64)。

(64) *Pada suatu waktu hidup-lah seorang wanita yang me-nyukai sapi. *Sapi-nya...*

PREP once time live foc indef woman LINK meN- like cow cow-DEF

さらに、名詞に無作為の意味がある場合、英語と同様に、インドネシア語でも後続文の名詞に接尾辞-nya が付加されない ((65)における「牛」)。

(65) *Pada suatu waktu hidup-lah seorang wanita yang meng-inginkan sapi. *Sapi-nya...*

PREP once time live foc indef woman LINK meN- want cow cow-DEF

次に、前の節の動詞の影響で次の節においても特定名詞が出現する場合がある(66)。例えば、「売る」という動詞は「お金」と関連するので、自然に「お金」を意味する名詞の特定化が形式される。言い換えれば、「売る」の内在素性の一つは「お金」ということになる。

(66) *She decided to sell the cow and buy a shop with **the** money.*

このように、「売る」のような動詞が前節に現れた場合、インドネシア語でも、「お金」を意味する名詞に接尾辞-nya が付けられる。

(67) *Dia me-mutuskan untuk men-jual sapi-nya dan mem-beli sebuah toko dengan uang-nya.*

3SG meN-decide to meN-sell cow-3SG.poss and meN-buy INDEF shop with money-DEF

更に、あるものの部分という内在素性を持っている名詞として、次の例(68)が挙げられる。一度「家」が紹介された場合、その部分としての「屋根」、「窓」、「ドア」などが特定なものとして扱われることが一般的である。しかし、地理的に「家」に「地下」という概念がない地域では、以下の文が語られるのを聞くと、「地下もあるの？」という疑問を引き起こす可能性がある。

(68) *I bought a new house yesterday. **The** roof is red.*

(69) *I bought a new house yesterday. **The** basement is large.*

“*My house has a roof.*” という文が奇妙なのは「屋根」が「家」の必要不可欠な部分であるからである。一方、「地下」は、選択的な部分である。必要不可欠な部分が現れた場合、それは特定化されることになるが、選択部分の突然の出現は、聞き手の想定の知識において話し手が話題のある段階を飛ばしているという印象を与える。

このように“全体 — 部分”という前後関係の場合、部分を形成する「屋根」には接尾辞 *-nya* が使用される。

(70) *Saya mem-beli rumah baru kemarin. Atap-nya merah.*

1SG meN-buy house new yesterday roof-DEF red

Chafe は、名詞に対して説明を加える関係節も、名詞を特定する手段であると述べている。しかし、関係節はインドネシア語の場合、接尾辞 *-nya* ではなくリンカー *yang* で導かれるので、次章で詳しく説明したい。

上記の名詞を特定する英語の *the* 及びインドネシア語の接尾辞 *-nya* の対応関係を次の表のようにまとめることができる。

表 3-3: 英語の *the* 及びインドネシア語の接尾辞 *-nya* の有・無の対応関係

	意味素性	英語	インドネシア語	対応関係
1	Proper	<i>The Missouri; The Rockies</i>	<i>Sungai Missouri, Pegunungan Rocky</i>	×
2	Unique	a. <i>The sky is blue.</i> b. <i>the president; the king</i>	<i><u>Lanjut-nya</u> biru.</i> <i>presiden, raja</i>	○ △
3	環境の要因	a. <i>The window is big.</i> b. <i>Please stand near the window!</i> c. <i>Close the window!</i> d. <i>He had closed the window.</i>	<i><u>Jendela-nya</u> besar.</i> <i>Berdirilah dekat jendela-Ø!</i> <i>Ø-Tutup <u>jendela-nya</u>!</i> <i>Dia sudah menutup jendela(-nya).</i>	○ × ○ △
4	小説などの冒頭	<i>The waitress brought him another cup of coffee.</i>	<i>Pelayan-Ø membawakan seorang pelanggan secangkir kopi lagi.</i>	×
5	口語	a. <i>Did you feed the dog?</i> b. <i>Let's go to the market.</i>	<i><u>Anjing-nya</u> sudah diberi makan?</i> <i>Ayo kita ke pasar-Ø.</i>	○ ×
6	既知のこと	<i>Once there was a woman who owned</i>	<i>Pada suatu waktu hiduplah seorang</i>	○

		<u>a cow</u> . <u>The cow</u> ...	wanita yang mempunyai sapi. <u>Sapi-nya</u> ...	
7	一般のこと	Once there was a woman who <u>was fond of cows</u> . * <u>The cows</u> ...	Pada suatu waktu hiduplah seorang wanita yang menyukai sapi. * <u>Sapi-nya</u> ...	○
8	無作為のこと	Once there was a woman who <u>wanted a cow</u> . * <u>The cow</u> ...	Pada suatu waktu hiduplah seorang wanita yang menginginkan sapi. * <u>Sapi-nya</u> ...	○
9	行為と関連する名詞	She decided <u>to sell</u> the cow and buy a shop with <u>the money</u> .	Dia memutuskan untuk menjual sapi-nya dan membeli sebuah toko dengan <u>uang-nya</u> .	○
10	全体—部分	I bought <u>a new house</u> yesterday. <u>The roof</u> is red.	Saya membeli rumah baru kemarin. <u>Atap-nya</u> merah.	○

※ 共通 (○)、相違 (×)、名詞は特定されてもされなくても可能及び他のマーカーを使用する (△)

表 3-3 の 3b. と 5b. の場合、英語とは逆にインドネシア語では場所を表す名詞が特定化されない所以对応関係は×となる。次の例のように、場所を表す名詞が接尾辞-nya によって特定化された場合、それは第三人称の所有物を意味する。

(71) Ayo kita ke rumah-nya.

Let's 1PL to house-3SG.poss

'Let's go to his/her house.'

このようにインドネシア語の主語は、-nya により特定化される。Chafe は、以上の分類は名詞を特定することに関しての完全な説明ではないと述べており、種々の例文が加われば、英語とインドネシア語の間には更に新たな相違点が出てくると考えられる。

以上、ここで英語との比較によりインドネシア語の接尾辞-nya の機能に詳細な考察を加えたのは、インドネシア語ではなぜ“Gajah belalainya panjang”構文で、belalai「鼻」が限定されるかをより明示的に説明するためである。このように、“Gajah belalainya panjang”構文は、日本語の「象は鼻が長い」構文と異なり、「象」と「鼻」の間に“ノ的磁力線”が存在せず、そのため、所有者が文頭に立つと、所有物は接尾辞-nya で標示される。

以下は、表 3-1 の尾上による「N1 は N2 が述部」の例文とそのインドネシア語の対応する文の提示である。下線部は主題化された要素であり、それぞれタイプ別に配列した。

まず、「N1 が述部」だけで意味が十分に通じ、「N2」はあってもなくても文の意味に大差ない構文は(D)タイプに属し、対応するインドネシア語の構文は、次のようになる。

- (72) 日：この壺の色が青い。 → この壺は色が青い。
 イ：Warna bejana ini / BIRU. → Bejana ini // warna-nya / BIRU.
 color jar this blue jar this color-3SG.poss blue
- (73) 日：日本の国土が狭い。 → 日本は国土が狭い。
 イ：Tanah negara Jepang / SEMPIT. → Jepang // tanah negara-nya / SEMPIT.
 land country Japan narrow Japan land country -3SG.poss narrow
- (74) 日：この壺が青い。 イ：Bejana ini / BIRU.
 jar this blue
- (75) 日：日本が狭い。 イ：Jepang / SEMPIT.²⁷⁾
 Japan narrow

次に、「N1 は N2 が述部」の「N1」と「述部」とが直接に主述関係を結んでおり、その「述部」の焦点として「N2」が意識されるような特別の意味関係が成立する構文は(E)タイプに属し、(D)タイプ同様インドネシア語の“Gajah belalainya panjang”構文に対応する。

- (76) 日：あの子の目がかわいい。 → あの子は目がかわいい。
 イ：Mata anak itu / MANIS. → Anak itu // mata-nya / MANIS.
 eye child that sweet child that eye-3SG.poss sweet
- (77) 日：神戸の緑が美しい。 → 神戸は緑が美しい。
 イ：Penghijauan Kota Kobe / INDAH. → Kota Kobe // penghijauan-nya / INDAH.
 greenery city Kobe beautiful city Kobe greenery -3SG.poss beautiful
- (78) 日：この家の壁がきたない。 → この家は壁がきたない。
 イ：Dinding rumah ini / KOTOR. → Rumah ini // dinding-nya / KOTOR.
 wall house this dirty house this wall-3SG.poss dirty

すでに述べたように、(F)タイプに属する「象は鼻が長い」はそこから他の諸タイプが派

²⁷⁾ 文法的に間違いはないが、3.2.1 節でも触れた菊池(2010)に従えば、「日本が狭い」は、「日本」を特徴づけるほど重要な情報ではないと考えられるので、意味ある情報を提示すれば、許容度が高くなると考えられる。

生した中心的構文であり、対応するインドネシア語の構文は以下になる。《「N1」－「述部」》が《主部－述部》関係にならない。

- (79) 日：象の鼻が長い。 → 象は鼻が長い。
 イ： *Belalai gajah* / PANJANG. → *Gajah // belalai-nya* / PANJANG.
 trunk elephant long elephant trunk-3SG.poss long
- (80) 日：あいつの父親が医者だ。 → あいつは父親が医者だ。
 イ： *Ayah-nya* / SEORANG DOKTER. → *Dia // ayah-nya* / SEORANG DOKTER.
 father-3SG.poss a doctor 3SG father-3SG.poss a doctor
- (81) 日：*象が長い。 イ： **Gajah* / PANJANG.
 elephant long
- (82) 日：?あいつが医者。 イ： ?*Dia* / DOKTER. (医者であるのは、あいつの父親だ。)
 3SG doctor

また、次の(G)タイプは、上記の(F)タイプと大差ないが、「N1 は N2」に言及さえすればほとんど意味が通じるという特徴があり、この構文もインドネシア語の “Gajah belalainya panjang” 構文に対応すると考えられる。

- (83) 日：いわしの頭がうまい。 → いわしは頭がうまい。
 イ： *Kepala ikan sarden* / ENAK. → *Ikan sarden // kepala-nya* / ENAK.
 head fish sardine delicious fish sardine head -3SG.poss delicious
- (84) 日：相撲の立会いがおもしろい。 → 相撲は立ち会いがおもしろい。
 イ： *Sesi pembuka sumo* / MENARIK. → *Sumo // sesi pembuka-nya* / MENARIK.
 session opening sumo interesting sumo session opening-3SG.poss / interesting

最後の(H)タイプにおける、「N1 は N2 が述部」の [N1—N2] 関係は、典型的な(F)タイプや(G)タイプにおける [N1—N2] が [全体—部分] の関係とは相当にかけ離れ、従って、インドネシア語の “Gajah belalainya panjang” 構文との対応関係は存在しない。

- (85) 日：焼き魚はさわらがうまい。
 イ： **Ikan bakar // sawara-nya* / ENAK.
 fish grill sierra - DEF delicious

(86) 日：小型自動車は日本製がよい。

イ：* *Mobil tipe kecil // buatan Jepang-nya / BAGUS.*

car type small production Japan - DEF good

このように日本語「象は鼻が長い」構文は、(H)タイプ（例(85)及び(86)）を除き、インドネシア語の“Gajah belalainya panjang”構文と対応関係があることが分かる。それは、タイプ(H)構文における、「さわらがうまい」「日本製がよい」のような要素が、「焼き魚」「小型自動車」のような要素についての性質説明ではないと考えられるからである。

表 3-1 で尾上が指摘する「X は Y」で意味が通じる（Z は好評価に限る）については、インドネシア語との対応関係はあるが、この場合、主題には第四章で述べる対照的主題マーカ―*kalau* が使用される。

(87) 日：いわしは頭。

イ： *Kalau ikan sarden // kepala-nya.*

if fish sardine head -3SG.poss

(88) 日：相撲は立会い。

イ： *Kalau sumo // sesi pembuka-nya.*

if sumo session opening-3SG.poss

(89) 日：焼き魚はさわら。

イ： *Kalau ikan bakar // sawara.*

if fish grill sierra

(90) 日：小型自動車は日本製。

イ： *Kalau mobil tipe kecil // buatan Jepang.*

if car type small production Japan

3.5. まとめ

本節では、本章の内容について簡潔なまとめを提示する。

日本語の「象は鼻が長い」構文は「有題文」として、「象は」は話し手と聞き手の間にできた状況あるいは〈枠〉であり、その〈枠〉のもとで「鼻が長い」という状態をまるごと叙述したもので、《中立叙述》と呼ぶことができる。日本語では、話し手が「～は」という〈枠〉を言わなくても、その〈枠〉は、他の人にも共有可能な感覚、つまり「今・ここ了解された時空・状況」（菊池 2010a 参照）が生まれ、その前提の下に、「鼻が長い」が「今・ここ了解された空間・状況」（例えば、聞き手と一緒に見ている象）であると叙述するという解釈が生じる。

「措定文」における「Nは述部」の「N」に当たる指示的名詞句(referential Noun Phrase)に関する規定は、英語が基準となるので、それが日本語の「～は」、「～が」の要素と必ずしも厳密に対応するとは限らない(例えば、日本語では話し手と聞き手との間に知られている「N」は、特定化される必要がない場合もある)。文法構造レベルで、例えば、上述(21)(22)の文の主部について、(21)は「田中さん」、(22)は「あの女性」とすることに大きな問題はないと考えられる。しかし、考察の観点か助詞「は」、「が」に移行した場合、両者の機能によって異なった意味が生じることになる。西山(1985)も指摘したように、生成文法理論の立場から日本語の助詞を統語構造のどのレベルで導入するかをめぐっては様々な見解があり、定説を得るに至っていない。「は」と「が」は、統語ではなくコンテキスト(談話レベル)における関係によって束縛されているからである。

このように、日本語の場合「措定の読み」において、その文の主部を「は」、「が」のどちらの助詞で標示するかは極めて難しい問題である。西川は、二重「措定文」の観点から「象は鼻が長い」構文の説明を試みたが、「は」ではなく、「が」で標示しても、措定の意味が生じる場合もある。例えば、「空が青いね」も「措定の読み」という解釈が可能である。この文は、いわゆる「今・ここ了解された空間・状況」という〈枠〉を持っている「が」の《中立叙述》の一つである。日本語の「措定文」については、主部の標示が「は」であれ「が」であれ、「措定」の意味が生じる場合、それを「措定文」と呼ぶことが可能である。

本章では、インドネシア語については、「有題文」を「無題文」から区別するための明確な標示はないが、主題になる要素には制約があるということを明らかにした。つまり、その要素とは、節の主部の所有者であり、文頭に転位された場合、日本語の「象は鼻が長い」構文と並行的な表現であると考えられる。

日本語の「象は鼻が長い」構文との相違点に関しては、日本語の場合は、「鼻」は「～の」形式を伴わないが、インドネシア語では、主題への照応リンクの標示が必要であるということである。つまり、インドネシア語では、「鼻」の位置に-nya が付加される。

さらに、「象」の位置が、現在の会話の登場人物・事物リストに登録済みのものを指す名詞句であるということについて、日本語では多くの場合、定詞の標示を表す要素は利用されないが、インドネシア語の場合は接尾辞-nya による標示が必要である(例(91)参照)。例えば、以下は話題となっている料理の中のスープについてという状況であり、スープ(sup-nya)は話し手と聞き手の間に既に登録済みのものである。インドネシア語では、定詞標示のために-nya が用いられるが、日本語の場合は何も標示しないのが普通である(91)。

(91) *Sup-nya // rasa-nya / terlalu asin.*

soup -DEF taste -DEF too salty

「スープは（味が）辛すぎる。」

インドネシア語では「象」の要素に定詞標示が付加されない場合は、総称名詞として見なされる（例えば、“gajah” ‘elephant’における-nya のない名詞は「象」一般を表す）。以上「象は鼻が長い」構文におけるインドネシア語の「有題文」との対応関係を明らかにした。

第四章

日本語「カキは広島が美味しい」構文とインドネシア語 “Kalau tiram Hiroshima yang enak” 構文との対応関係

4.1. はじめに

第三章では、日本語「象は鼻が長い」構文とそれに対応するインドネシア語の構文を見てきた。本章では、表面上は同じ「～は～が」構文であるが、「N が述部」の部分第三章の「鼻が長い」と統語的に異なった意味内容を持つ構文、つまり、「カキは広島が美味しい」構文を取り上げ、それとインドネシア語“Kalau tiram Hiroshima yang enak”構文との対応関係を考察する。

「カキは広島が美味しい」構文の「広島が美味しい」という部分に現れる「が」の機能を、久野(1973)は、《総記》と呼んでおり、今話題になっている場所の中では広島だけが美味しいという意味を持っていることを指摘している。菊池は、久野の「が」の《総記》を《回答提示》と呼んでおり、〈質問の変項〉としている。

第三章の「象は鼻が長い」構文は、尾上(1998)によれば、「象」と「長い」の間に直接の《主—述》関係を持っておらず、「象」と「鼻」との間に「全体—部分」やそれに類似する関係（「個体—所有物」「個体—能力」「個体—関係者」など）があることを条件として成立する。一方、「カキは広島が美味しい」タイプを、尾上は、単なる“先行”題目語を持つ文に近いものであると指摘している。

「象は鼻が長い」構文及び「カキは広島が美味しい」構文の相違点について、先行研究を次の表ようにまとめることができる。

表 4-1: 「象は鼻が長い」構文及び「カキは広島が美味しい」構文に関する先行研究における相違点

	「象は鼻が長い」 [X は Y が Z]	「カキは広島が美味しい」 [X は Y が Z]
尾上(1998)	[Y-Z] は X を判断的主辞とする述部（属性叙述） X- [Y-Z] は《主一述》	「X」は先行題目語 X- [Y-Z] は《題目—解説》
西山(2003)	[Y が Z] は属性を帰す叙述 [Y が Z] は 1 項述部	[Y が Z] は「X」の指定の値が走る範囲 [Y が] は〈指定〉(Wh-疑問の変項)
菊池(1997, 2009, 2010)	[Y が Z] は X についての意味のある情報、[Y が Z] は《中立叙述》	[Y が Z] は〔質問の変項〕と〈関心の対象〕から成り、[Y が] は《解答提示》

日本語の「カキは広島が美味しい」構文は、インドネシア語 の“*Kalau tiram // HIROSHIMA(-LAH) / yang enak*” 構文と対応すると考えられる。

(1) 日: 「カキは広島が美味しい」

イ: *Kalau tiram // HIROSHIMA(-LAH) / Ø yang enak*. 「有題文」

if oyster Hiroshima(-foc) Ø LINK delicious

(2) 日: 「広島が美味しい」

イ: *HIROSHIMA(-LAH) / Ø yang enak*.

「指定文」・「分裂文」

Hiroshima (-foc) Ø LINK delicious

「広島が美味しい」の(2)の文では、「広島が」は〈指定〉「どこが美味しい」という疑問詞の変項になり、一番重要な情報を持っており焦点化されている。インドネシア語の場合は、焦点化されている部分を、接尾辞-*lah* で標示する。さらに、「美味しい」は前提になる。このような前提部—焦点部がはっきり分けられる場合は、インドネシア語では、「指定文」・「分裂文」になりやすい。また、(1)のインドネシア語の“*tiram*” に、対照的主題を表す *kalau* が使用されている。

本章では、まず、名詞とその付加語を結ぶインドネシア語のリンカー *yang* について説明し、そして、インドネシア語の「分裂文」について述べてから、日本語の「A が B だ」構文とインドネシア語との対応関係を考察する。更に、主題マーカーに対応するインドネシア語の *kalau* について述べて、最後に「カキは広島が美味しい」構文とインドネシア語の “*Kalau tiram Hiroshima yang enak*” 構文との対応関係の考察を行う。

4.2. インドネシア語におけるリンカーyangについて（句レベル）

インドネシア語では、**yang** は他の語と比べて極めて頻繁に出現する語であり、その用法は文法書においても様々な例文とともに説明されている。その際、**yang** の機能として共通に指摘されるのは先行名詞を特定する機能である。例えば、

(3) *cerita (yang) panjang*

story LINK long

「長い話・物語」

例(3)のようにカッコ内に置かれることもある **yang** の使用あるいは不使用は実際のコンテキストによっており、それは「自由変異」ではなく、その構造も多様である。このようなことから **yang** には複雑な機能・用法があると考えることが可能である。例えば、(4)は先行名詞が省略されている例であり、(5)は動詞を修飾する働きを持っている **yang** の例である。

(4) *Dia meng-ambil Ø yang itu!*

3SG meN- take Ø LINK that

「彼はそのφを取りました。」

(5) *Tarik yang kuat!*

pull LINK strong

「強く引っ張りなさい。」

このように **yang** についての議論は多くのエネルギーを必要とし、このことは **yang** をどのように呼ぶべきかということに関して研究者の間に意見の一致を見ないことにも端的に表れている。**Yang** が名詞と節を結ぶ機能を持っているので、「関係代名詞」と呼ぶ研究者もいるが、先行名詞が、以下(6)のように、節の目的語である場合には非文になる。

(6) * *Buku yang saya me-mesan / belum datang.*

book LINK 1SG meN- order not yet come

「私が注文した本はまだ届かない。」

また、yang が名詞化の機能を有すると指摘する研究者もいるが、日本語の「の／こと」に対応すると誤解され、学習者が次の(7)のような文を作る恐れもあるので、本稿では yang を「名詞化標示」と呼ばず、「リンカー」と呼ぶことにする²⁸⁾。

(7) * *Yang makan sayur setiap hari / baik untuk kesehatan.*

LINK eat vegetable every day good for health

「毎日野菜を食べることは健康にいい。」

本節では、より普遍的なシステムを基準として、yang の機能を探ることを目指し、まず、オーストロネシアの幾つかの言語を対象とし、名詞とその付加語を結ぶリンカーの振る舞いを研究している Foley の仮説を紹介し、次に、この仮説に対してインドネシア語の yang の先行研究を見してみる。そして、最後に、yang の多様な構造について考察を加える。

4.2.1. Foley による結束階層

Foley は、特に西オーストロネシア語族の幾つかの言語を研究対象としているが、インドネシア語は対象から除外されている。オーストロネシア語族の多くの言語は、名詞とその付加語の間に特定のリンカーを使用するが、Foley はその使用・不使用に関して普遍的な説明を試みており、それが本節が Foley の研究を取り上げる理由である。

まず、名詞句には二つのタイプがあり、それは《付加語＋名詞》と《名詞＋名詞》である。付加語には、冠詞、直示、数量詞、形容詞、分詞、関係節が属する。Foley は《付加語＋名詞》を中心にその結束の度合いを考察したが、彼によれば《付加語＋名詞》の結束階層は、以下図. 4-1 のようになる。²⁹⁾

²⁸⁾ 佐々木(2014:53-55) は、タガログ語文法における linker の働きには、yang が<ia + linker -ng> ということたちで関わっているのではないかという考えから、yang <ia (第三人称単数代名詞) + linker -ng> 説を立てている。インドネシア語の yang の由来に関してはまだ研究の余地がある。

²⁹⁾ インドネシア語の場合は、《名詞＋付加語》になる。

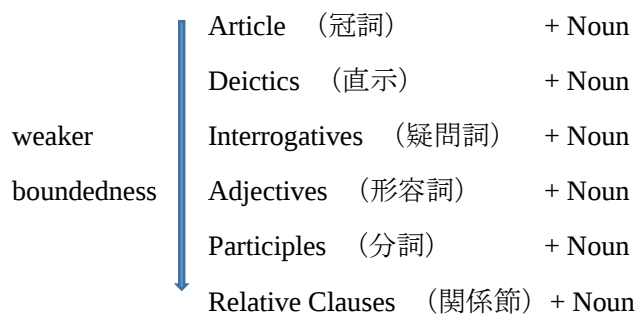


図 4-1 : The Boundedness Hierarchy (Foley 1976: 18 参照)

この結束階層に関する図式で彼は付加語と名詞の結束の強さの概念を提案している。つまり、冠詞と名詞の結束は、関係節と名詞の結束よりもはるかに強いということである。そのため、結束が弱ければ弱いほどリンカー³⁰⁾が必要となる。

この階層によって、リンカーの分布を予測することができる。つまり、上位の階層の《付加語＋名詞》のカテゴリーがリンカーを必要とするならば、結束が弱い下位のすべてのカテゴリーもリンカーを必要とする。オーストロネシア語族のリンカーの分布は、次の表 4-2 のように示される。

表 4-2 : Distribution of the Ligature in Austronesian Languages (Foley 1976: 24 参照) ³¹⁾

	Tagalog	Palauan	Ilokano	Toba Batak	Tolai	Wolio	Malagasy
1. Articles (冠詞)	○						
2. Deictics (直示)	○	○					
3. Interrogatives (疑問詞)	○	○	○				
4. Quantifiers (数量詞)	○	○	○	○			
5. Adjectives (形容詞)	○	○	○	○	○		
6. Participles (分詞)		○					
7. Relative Clauses (関係節)	○	○	○	○	○	○	

³⁰⁾ Foley は、「リンカー」を“ligature”と呼んでいる。なお、表 4-2 の 6. Participle (分詞) は、Palauan (パラオ語) にしか見られない。Foley が研究対象としている言語の中で名詞に Participle (分詞) という付加語が結びつくのは Palauan (パラオ語) と Wolio (ウオリオ語) しか存在しないが、Wolio は《分詞＋名詞》のカテゴリーにリンカーを使用しない。

³¹⁾ Tagalog タガログ語 (フィリピン)、Palauan パラオ語 (西部太平洋、パラオ)、Ilokano イロカノ語 (ルソン北部、フィリピン)、Toba Batak (スマトラ北部、インドネシア)、Tolai トライ語 (東ニューブリテン州、パプアニューギニア)、Wolio ウオリオ語 (スラウェシ、インドネシア)、Malagasy マダガスカル語 (西部インド洋、マダガスカル)

このように、例えばパラオ語³²⁾では、《直示＋名詞》のカテゴリーは、リンカーが必要とされ、表 4-2 が示すようにその下のすべてのカテゴリーもリンカーが必要となる。³³⁾

また、Foley はあるレベルのカテゴリーでリンカーが随意的である場合、その下のカテゴリーのリンカーの使用は、随意的または義務的であると指摘している。《関係節＋名詞》のレベルでは、オーストロネシアの多くの言語は、名詞が関係節の主題³⁴⁾の指示的対象と同一でなければならないと述べている。

Foley の最後の仮説は、《名詞＋名詞》の場合は、オーストロネシアの諸言語はプロトタイプのリンカーを使用しないということである。《名詞＋名詞》のシステムは、主にその要素が担っている意味的關係、つまりこの場合は所有關係、で設定されている。例えば、Toba Batak 語では、リンカー *na* ではなく、所有關係や名詞化を標示する *ni* が《名詞＋名詞》を構築する(“*sumangot ni d-amang*” ‘spirit of my father’, “*tuhor ni sira on*” ‘the buying of this salt’)。 (Foley 1976: 68-85 参照)

4.2.2. インドネシア語の リンカー yang

インドネシア語の *yang* については、Verhaar, Kaswanti Purwo, Steinhauer, の先行研究が挙げられる。Verhaar, Kaswanti Purwo の研究も Foley による結束階層を取り上げている。

Verhaar (1983)はインドネシア語の *yang* は Foley の仮説に対応すると述べ、*yang* の使用を次の表 4-3 のようにまとめている。冠詞及び分詞では *yang* の使用はない。直示、疑問詞、数量詞、形容詞のレベルでは *yang* の使用は随意的であり、関係節のレベルでは *yang* の使用は義務的である。

表 4-3：インドネシア語のリンカーの分布（Verhaar 2006: 327 を参照）³⁵⁾

	インドネシア語
1. Articles （冠詞）	
2. Deictics （直示）	△
3. Interrogatives （疑問詞）	△

³²⁾ パラオ語は、オーストロネシア語族の西オーストロネシア語群に属し、チャモロ語と並び、オセアニア語群の一部ではないミクロネシアでの二つの言語のうちのひとつと考えられる。

³³⁾ 各言語の例は、Foley (1976: 13-86)を参照されたい。

³⁴⁾ 本節では、主題及び主語の区別をしない、両方は文の主部として捉えたい。

³⁵⁾ Verhaar は、随意的「△」を「±」、義務的「○」を「+」という記号により表示している。

4. Quantifiers (数量詞)	△
5. Adjectives (形容詞)	△
6. Participles (分詞)	
7. Relative Clauses (関係節)	○

各カテゴリーについては次のような例が挙げられる。³⁶⁾

(8) 《名詞＋(yang)＋直示》 *Ambil buku (yang) itu!*

take book LINK that

‘Take that book (over there)!’

(9) 《名詞＋(yang)＋疑問詞》 *Anda akan mem-beli rumah (yang) mana?*

2SG will meN-buy house LINK which

‘Which house will you buy?’

(10) 《名詞＋(yang)＋数量詞》 *Saya me-lihat rusa (yang) banyak di sana.*

1SG meN-see deer LINK many at there

‘I saw many deer there.’

(11) 《名詞＋(yang)＋形容詞》 *Dia mem-buat lukisan (yang) indah.*

3SG meN-make painting LINK beautiful

‘He made a beautiful painting.’

(12) 《名詞＋yang＋関係節》 *Orang yang datang teman saya.*

person LINK come friend 1sg

‘That who came was my friend.’

《名詞＋yang＋関係節》のカテゴリーについては、先行名詞が目的語である場合、Foleyの仮説に従って、その目的語が関係節の主題になる。例えば、

(13) *Saya sudah mem-baca buku yang di-baca Ali.*

1SG already meN-read book LINK DI-read Ali

‘I had already read the book which Ali read.’

³⁶⁾ 下線部は、《名詞＋(yang)＋名詞／付加語》を表す。

一方、Steinhauer (1992) は、Foley の「随意的」“A yang B” は“AB”と同じことになると考えられるが、リンカーの「随意的」はインドネシア語にとって重要な問題であり、その使用または不使用は「自由変異」であるというわけではないとして、Foley の研究における意味的観点の欠如を批判している。

リンカー yang の使用・不使用の問題については、次の三点に注目したい。

第一に、幾つかの《名詞＋付加語》“AB”は意味内容については既に緊密に結合しており、先行名詞“A”は、“B”がその属性であるという形で説明することは無理である。したがって、リンカー yang は使用されない。例えば、“*anak angkat*” ‘adopted child’ 「養子」、 “*kapal selam*” ‘submarine’ 「潜水艦」などである。

第二に、リンカー yang を使用しないもう一つの《名詞＋付加語》“AB”は、例えば、“*sepatu baru*” ‘new shoes’ 「新しい靴」のような、「(新しい) 靴」全体という総合的概念を表す場合である。

第三に、リンカー yang を使用する《名詞＋yang＋付加語》“A yang B”は、先行名詞“A”が指示対象を表し、“B”が“A”の属性として“A”を意味的に限定する場合である。例えば、“*sepatu yang baru*” ‘shoes which is new’ の場合は、「靴」全体という総合的概念を表さず、単に「新しい」という形容詞が「靴」という名詞を修飾しているに過ぎない。次の例を見てみたい。

(14) (a) *Kemarin saya mem-beli sepatu baru.*

yesterday 1SG meN-buy shoe new

「昨日私は新しい靴を買いました。」

(b) *Sepatu yang lama sudah saya Ø-pakai selama tiga tahun.*

shoe LINK old already 1SG Ø-wear as long three year

「古い靴は、もう三年間使ってきました。」

(c) *Tetapi, sepatu yang lama itu belum saya Ø-buang.*

but shoe LINK old that not yet 1SG Ø throw away

「でも、その古い靴はまだ捨てません。」

(d) *Hari ini saya pergi ke sekolah me-makai sepatu (yang) baru.*

day this 1SG go to school meN- wear shoe LINK new

「今日から新しい靴を履いて、学校に行きます。」

例(14) (a) “*sepatu baru*” 「新しい靴」では、話し手は「新しい靴」という総合的概念を情報として聞き手に与える。この場合、「新しい」は「靴」の不可欠な特徴として機能する。(b) “*sepatu yang lama*” 「古い靴」では、(a) の情報を通じて「新しい靴」という概念が、既に聞き手の知識の中にあり、そこで“*sepatu yang NOT lama*”と対照するため“*sepatu yang lama*”にリンカー-*yang* が必要とされるのである。

主に指による仕草と同様に、目に見える物の方向に聞き手の注意を向けさせるための指示詞 “*itu*” ‘that’ は、(c) の文では“*sepatu yang lama*”が (b) のそれと同じ主題であることを示すために前方照応として使われている³⁷⁾。(d) “*sepatu (yang) baru*” では、*yang* の使用は随意的になる。つまり、全体的概念を表現する場合は *yang* は不使用で、対照する場合は *yang* を使用する。

《名詞+(*yang*)+直示》及び《名詞+(*yang*)+数量詞》の用法についても同様であると考えられる。《名詞+(*yang*)+疑問詞》においては、使用される疑問詞は “*mana*” 「どちら」(15)、“*bagaimana*” 「どのような」(16)、“*keberapa*” 「何番目」(17) に制限される。

(15) *Anda me-milih jalan (yang) mana?*

2SG meN-choose way LINK which

「どちらの道を選びましたか。」

(16) *Pemerintah meng-ambil tindakan (yang) bagaimana?*

government meN- take measure LINK how

「政府はどのような対策をとりましたか。」

(17) *Dia anak (yang) keberapa?*

3SG child LINK how many

「彼は何番目の子ですか。」

上掲の Verhaar による表 4-3 は、《名詞+関係節》のレベルでは、リンカー-*yang* が「義務的」となることを示している。付加語については、その形態的・統合的構造が複雑になればなるほど *yang* の使用が避けられないと考えられる。

このことに関して、Steinhauer (1992: 433) は、形態的複合の場合であっても、*yang* を使用しなくても自然である幾つかの付加語があると指摘している。その付加語は、(a) *ber-*+名詞

³⁷⁾ 本論文では、《名詞+(*yang*)+付加語》も指示詞に伴われる場合があるということも示したが、インドネシア語の指示詞についての詳しい考察は今後の課題にしたい。

句 (with NP, having NP, using NP) (18)、(b) se-+名詞句 (of one and the same NP) (19)、(c) se-+形容詞+名詞句 (as adjective as NP) (20)、(d) ter-+形容詞 (最上級を表す) (21) である。

(18) *Dia me-nabrak orang△ber-sepeda motor.*

2SG meN- hit person BER- bike motor

「彼はバイクに乗った人にぶつかりました。」

(19) *Saya ber-temu dengan orang△se-tanah air di Kyoto.*

1sg BER- meet with person same- soil water in Kyoto

「私は京都で同じ国から来た人に会いました。」

(20) *Dengan leher△se-panjang galah jerapah bisa meng-ambil makanan di tempat tinggi.*

with neck as long as pole giraffe can meN- take food at place high

「長い棒のような首でキリンは高いところにある食べ物を取ることができます。」

(21) *Banyak wisatawan ingin me-lihat gunung △ter-tinggi di Jepang.*

many tourist want meN- see mountain most-high in Japan

「観光客の多くは日本で一番高い山を見たがっている。」

インドネシア語は付加語が動詞を含む場合は、普通は yang を必要とする。Steinhauer (1992: 436) によれば、yang が必要とされる場合、共起する動詞は本質的に動的であると指摘している。概念を全体として表現する“AB”の場合は、付加語“B”は、“A”に対して静的な特徴を付与する。

4.2.3. リンカー yang の使用について

まず、《名詞+yang+付加語》における先行名詞の省略について見てみる。先行名詞を省いた《Ø+yang+付加語》は頻繁に見られる。先行名詞の省略は適切なコンテキストの中で可能である。コンテキストの中では先行名詞は既に述べられたことまたは状況的に想定されることを表す。尚、本論文では、yang の本質的機能は名詞とその付加語を結ぶためのリンカーにあるという前提に立っている。上記の例 (8)~(12) は、コンテキスト上先行名詞が省かれると、次のような名詞句になる。

(22) *Ambil buku yang itu!*

take book LINK that

‘Take that book (over there)!’

→ *Ambil Øyang itu!*

(23) *Anda akan mem-beli rumah yang mana?* → *Anda akan mem-beli Ø yang mana?*

2SG will meN-buy house LINK which

‘Which house will you buy?’

(24) *Saya me-lihat rusa yang banyak di sana.* → *Saya me-lihat Ø yang banyak di sana.*

1SG meN-see deer LINK many at there

‘I saw many deer there.’

(25) *Dia mem-buat lukisan yang indah.* → *Dia mem-buat Ø yang indah*

3SG meN-make painting LINK beautiful

‘He made a beautiful painting.’

(26) *Orang yang datang teman saya.* → *Ø yang datang teman saya.*

person LINK come friend 1SG

‘That who came was my friend.’

次のような命令文では、簡潔にはっきり命令するために、短い文の方が好まれる。そのため、“*sikap*”「態度」、“(air)”「水」、“(suara)”「声」が省略されても、その性質・属性だけで表現することで了解が得られると考えられる。

(27) *Duduk yang baik!* ← *Duduk (dengan sikap) yang baik!*

sit LINK good sit with manner LINK good

「良い態度で座りなさい。」

(28) *Siram yang banyak!* ← *Siram (dengan air) yang banyak!*

pour (water) LINK much pour on with water LINK much

「沢山の水で水をやりなさい。」

(29) *Bicara yang keras!* ← *Bicara (dengan suara) yang keras!*

speak LINK loud speak with voice LINK loud

「大きい声で話なさい。」

しかし、周知のように *yang* は、動詞を修飾する機能を持っていない。上記の例は、口語でよく使われているが、書き言葉において使用する場合はインドネシア語の規範に逆らう恐れがある。

Yang の使用について、オーストロネシア諸言語では、先行名詞が関係節の主題であると

考えられ、インドネシア語もそれに対応する。それに加えて、先行名詞が関係節の主題の所有者である次のような例が存在する。接尾辞-nya は、先行名詞 “*kue ulangtahun*”, “*Yamaha merah 125 cc*” を照応する。

(30) *Di atas meja masih tersisa separuh kue ulangtahun yang bentuk-nya sudah rusak.* (p77)

at on table still left half cake birthday LINK shape -3SG.poss already broke

「テーブルの上には形の崩れたバースデー・ケーキが半分残っていた。」(村上春樹、p86)

(31) *Aku teringat ... Yamaha merah 125 cc yang bunyi-nya sangat bising.* (p195)

1SG remember Yamaha red 125 cc LINK sound-3SG.poss very noisy

「... 音のうるさいヤマハの一二五 CC の赤いバイクのことを思いだした。」(村上春樹、p212)

Foley は、オーストロネシア語族では、名詞と名詞の間にリンカーを使わないと指摘している。しかし、Verhaar と Steinhauer は、その主張はインドネシア語には当てはまらないと否定し、《名詞+yang+名詞》構造の例(32)及び(33)を挙げている。

(32) *adik-mu yang tentara itu*

(younger) brother -2SG.poss LIG soldier that

‘your brother, the soldier’ (Verhaar 1983: 53)

(33) *Pemerintah Indonesia pesimis permintaan yang 1,5 milyar dollar AS akan dipenuhi.*

Government Indonesia pessimistic request YANG 1.5 billion dollar USA will be-fulfilled

‘The Indonesian government is pessimistic about the chances that their request of 1.5 billion dollars will be granted.’ (Steinhauer 1992: 428)

Verhaar は、英語の“*the*”、つまり“*your brother the soldier*”と対照させたが、Steinhauer は文の存在を指摘するのみで、それ以上は何も言及していない。

普遍文法に従えば、《名詞+名詞》はプロトタイプとして所有関係を表す。例えば、“*tangan saya*” ‘my hands’ 「私の手」、 “*rumah nenek saya*” ‘my grandmother’s house’ 「おばあさんの家」などである。この名詞と名詞の間にリンカーyang が入ることはできない。

さらにこれに加えて、《部分—全体》の関係についても同様のことが言える。例えば、“*jendela kamar*” ‘room’s window’ 「部屋の窓」、 “*pengarang novel*” ‘novel’s author’ 「小説の借者」などの場合、名詞と名詞の間に yang は使用不可能である。

日本語の場合は、《名詞＋名詞》の間に助詞「の」が入り、「N1 の N2」における N1 と N2 の関係は所有関係や《全体一部分》などの意味関係を表している。もう一つの意味関係は、《N1 デアル N2》（例えば、「看護師の妹」、「社長の田中さん」など）であり、この関係がインドネシア語の《名詞＋yang＋名詞》と対応すると考えられる。³⁸⁾

(34) *Kemarin saya ber-temu adik -mu yang tentara.*

yesterday 1SG BER-meet (younger) brother -2SG.poss LINK soldier

「昨日私は軍人デアルあなたの弟に会いました。」

(35) *Permintaan pemerintah Indonesia yang 1,5 milyar dollar USA tidak terpenuhi.*

request government Indonesia LINK 1.5 billion dollar US NEG be-fulfilled

「1500 万ドル デアル インドネシア政府の要求は満たさない。」

しかし、インドネシア語には日本語の「デアル」に相当する語がないので、適切な動詞を想定し補う必要がある。

(36) *adik-mu yang (ber-profesi) tentara*

(younger) brother -2sg.poss.pron LINK have profession soldier

「軍人であるあなたの弟」

(37) *permintaan yang (ber-jumlah) 1,5 milyar dollar AS*

request LINK number 1.5 billion dollar USA

「総計 1500 万アメリカドルの要請」

(38) *anak yang (ber-sifat) pemalas*

child LINK have character idler

「怠け者である子供」

4.3. 文レベルの yang（分裂文）

前節では、句レベルの yang を見てきた。本章で取り上げた「カキは広島が美味しい」構文の「広島が美味しい」の部分は、インドネシア語の“*Hiroshima yang enak*”と対応すると考えられる。そこで、本節では文のレベルにおける yang を見てみたい。インドネシア語の

³⁸⁾日本語の「N1 の N2」の分類は第三章に記述した西山(2003)及び西川(2013)を参照されたい。

“*Hiroshima yang enak*” 構文は、「分裂文」、「等価文」と呼ばれており、以下インドネシア語の「分裂文」について説明を試みる。

4.3.1. インドネシア語の「分裂文」

インドネシア語の「分裂文」の研究については、Tri Iryani Hastuti, Utjen Djusen Ranabrata, Muh Abdul Khak (1995)が挙げられる。それによれば、インドネシア語の「分裂文」は、単文に属し、主部の特徴は *yang* で始まり、《主部—述部》が《名詞句—名詞句》を構成する。以下の例が挙げられる。

(39) *Pak Suroso datang tadi malam*. 「非分裂文」

Mr. Suroso come last night

‘Mr. Suroso came last night.’

(40) *PAK SUROSO* (述部) / *Øyang datang tadi malam* (主部). (Tri Iryani Hastuti et al. 1995: 5)

Mr. Suroso Ø LINK come last night

‘It was Mr. Suroso who came last night.’

(41) *ØYang datang tadi malam* (主部) / *PAK SUROSO* (述部).

Ø LINK come last night Mr. Suroso

‘The one who came last night was Mr. Suroso.’

例(39)は「非分裂文」であり、(40)は「分裂文」である。(39)の “*Pak Suroso*” ‘Mr. Suroso’は、焦点化されるため、主部ではなく述部を占める。主部を占めるのは、“*Øyang datang malam*” ‘who came last night’である (Tri Iryani Hastuti et al. 1995: 5)。(40)は、(41)のように倒置することができる。

「分裂文」はコピュラ文の一種であるが、インドネシア語にはコピュラに相当する語は存在しない。それに代わり、コピュラのような働きを持っている分離語 *adalah* がある³⁹⁾。次の例が挙げられる。

³⁹⁾インドネシア語の *adalah* は、コピュラというより、《主部—述部》をはっきり分けるため、特に主部が長い場合に使われる分離語である (Verhaar 1989: 94 参照)。“A *adalah* B”は、A は B に等しい・同等であるという意味を持っている。

(42) *ADALAH NURLIATI* (述部) / *Øyang me-mulai cerita ini* (主部) . (Tri Iryani Hastuti et al. 1995: 8)

分離語 Nurliati Ø LINK meN-start story this

‘It was Nurliati who had started this story.’

(43) *ØYang me-narik perhatian* (主部) / *ADALAH BISNIS KONSTRUKSI DUNIA* (述部) . (ibid.: 9)

Ø LINK meN-pull attention 分離語 business construction world

‘What is interesting is construction business in the world.’

分離語 *adalah* は、特に(43)のように主部が述語に先行する場合によく使用される。しかし、(42)のような分離語 *adalah* が文頭に立つ場合は、外国語のような構造であると見なされているので、focus marker 接尾辞 *-lah* を使うことによって、インドネシア語らしい文になると考えられる (Tri Iryani Hastuti et al. 1995: 9)。「分裂文」では、focus marker (*-lah*)の使用は、随意的である。

(44) *NURLIATI(-LAH)* (述部) / *Øyang me-mulai cerita ini* (主部) .

Nurliati (foc) Ø LINK meN-start story this

‘It was Nurliati who had started this story.’

4.3.2. 比較の第三者としての英語の「分裂文」とインドネシア語との対応関係

インドネシア語の「分裂文」の機能についての研究は、今のところまだ存在しない。特にその情報構造の研究は皆無と思われる。本節では、英語の「分裂文」も取り上げ、比較の第三者として扱うことにする。

英語の「分裂文」の研究については、生成文法に基づく研究は進んでいるが、本節では、特に、Prince (1978)の、談話における機能の研究を参考にする。

英語では、「Wh 分裂文」と「It 分裂文」という2つのタイプがあり、両タイプは、同じ意味を持っており、置き換えが可能であると考えられる。

(45) John lost his keys. 「非分裂文」

(46) What John lost was his keys. 「Wh 分裂文」

(47) It was his keys that John lost. 「It 分裂文」

例(45)は、普通の文であるが、それ以外に、英語では、例(46)と(47)のような「分裂文」も存在し、これら三つの文には同じ情報内容が含まれている。Prince は、「Wh 分裂文」と「It 分裂文」は、内容が同じで、置き換えが可能であるとしても、談話の中に何か違いがあるのではないかという問題意識を持って研究を行っている。

インドネシア語の「Yang 分裂文」は、英語の「Wh 分裂文」と対応し、「(-lah)分裂文」は、「It 分裂文」と対応すると考えられるが、以下、英語の「分裂文」の分類に基づき、インドネシア語の「分裂文」を考察する。

まず、「Wh-分裂文」について見てみる。「Wh-分裂文」の「Wh-節」は、その情報が、前の文脈やコンテキストの中で既に知られた事実であるが、含意から捉えるもの、つまりその場の非言語的な状況から予測できるものもある。

Prince は、「Wh-分裂文」の「Wh-節」の情報のタイプについて次のよう6つのタイプに大きく分類している。(以下の例文は、いずれも Prince (1978)よりである。)

A. Explicit Information

このタイプでは、「Wh 節」が担う情報は、前の文脈によって明示されたものである。前の文脈では、彼らが何か言ったということが述べられ、そしてもう一度その話題が取り上げられ、「Wh-分裂文」の「Wh 節」に置かれている。

(48) 英 : ...they say that ... Certainly what they are talking about is ...

イ : (前略) ØYang mereka Øbicarakan / ADALAH ...

Ø LINK 3PL Ø- talk 分離語

B. Implicit Information

このタイプでは、聞き手や読み手の協力がさらに要求され、「Wh 分裂文」の「Wh 節」の情報は、非言語的な状況から、あるいは前のコンテキストからの含意である。

(49) 英 : When talk goes on of “the national purpose”, “the national life”, “the mainstream of the nation”, what is being advanced is the erection of these bourgeois dictatorships.

イ : (前略) ØYang di-majukan / ADALAH PENEGAKAN KEDIKTATORAN BORJUIS INI.

LINK DI-go forward 分離語 strengthening dictatorship bourgeois this

次の C~F のタイプは、B タイプと似通っているものであると考えられる。

C. Contrast

このタイプでは、「Wh 節」は前の文脈と対照関係にある。以下の例は、前の文脈では、動的なものが述べられ、その後はその対照としての不変のものが述べられている。

(50) 英 : Our position is a dynamic one. It will be more and more refined as conditions change in the course of the struggle. What is constant is our commitment to a revolutionary emancipation in Ethiopia.

イ : (前略) ØYang konstan / ADALAH KOMITMEN KAMI TERHADAP.... (後略)

Ø LINK constant 分離語 commitment 1PL to

D. Metalinguistic Antecedents

この「Wh 節」のタイプでは、前の文脈から情報を復元することが可能であり、話し手があることについて語り、聞き手は、話し手がその発言によりどのような意図を持っているかということについてあらかじめ想定可能である。このようなタイプの「Wh 節」は、前の発言を明確にするためによく使われる。

(51) 英 : I wouldn't pay that much attention to it ... What I meant is just do the best to control it.

イ : (前略) ØYang saya maksud / ADALAH ME-LAKUKAN ØYANG TERBAIK UNTUK ME-NGONTROL-NYA.

Ø LINK 1SG mean 分離語 meN- do Ø LINK best for meN- control-3SG

E. Think

このタイプでは、話し手の考え、意見、観察、反応などが、聞き手の一定の関心事になっている。会話でよく使用されるが、文頭は、what I think だけではなく、what troubles me, what is shocking to me などではじまることもある。

(52) 英 : I would do a lot of crazy things, but what I don't think I would do is buy a car until I could pay for its upkeep.

イ : (前略) Øyang saya tidak pikir untuk me-lakukan-nya / ADALAH MEM-BELI MOBIL (後略)

Ø LINK 1SG NEG think for meN- do - 3SG 分離語 meN-buy car

F. Happen

この「Wh 節」のタイプでは、起こったこと、あるいはこれから起こることが、前のコンテキストから復元することが不可能である。談話としてはまとまったものであるが、状況としてはいまだ継続中と判断される。

(53) 英 : I said I had to check it out. What happened is that the agent asked if he could see the office...

イ : *∅ Yang terjadi / ADALAH SI AGEN BER-TANYA APAKAH DIA BISA ME-LIHAT KANTOR-NYA...*
∅ LINK happened 分離語 DEF agent BER-ask wheter 3SG can meN-see office-DEF

以上の英語における「Wh 分裂文」は、インドネシア語の「Yang 分裂文」に対応すると考えられる。

次に、「It 分裂文」を見てみよう。Prince によれば、「It 分裂文」の機能は、次のように分類される。

A. Stressed Focus It-Cleft

このタイプの「It 分裂文」では、「Wh 節」は、情報の重要さの度合いが一番低いと判断され、よく省略される。例(54) の答えを、例えば、*It was the teachers who made this mold* とした場合、*who made this mold* の部分は省略することが可能である。

(54) 英 : Who made this mold? Was it the teachers? Was it the medicine man?

It was the teacher who made this mold.

イ : *SIAPA(-KAH) / ∅ yang mem-buat jamur ini? Guru? Atau orang farmasi?*

Who (-foc) ∅ LINK meN-make mold this teacher or man medicine

GURU(-LAH) / ∅ yang mem-buat jamur ini.

Teacher(-foc) ∅ LINK meN-make mold this

B. Informative-Presuppositon It-Cleft

このタイプでは、「Wh 節」の情報は聞き手がそれを認識するどころか、それを知ることさえも期待されない。このタイプの文の全体のポイントは、まさにその情報を聞き手に通知することである。この「It-分裂文」のタイプでは、「Wh 節」は、新しい情報をもたらす可能

性があるので、省略することができない。このタイプは、聞き手に知られていないが、ある人には知られている事実を標示し、歴史的な物語に頻繁に使われる。つまり、事実としての文を提示する機能を持っている。

(55) 英 : It was they who fought back during a violent police raid on a Greenwich Village bar in 1969, ...

イ : MEREKA(-LAH) / Ø yang ber-tahan selama penyerangan (後略)

3SG (-foc) Ø LINK BER-struggle during attack

さらに、この B の「It 分裂文」には、次の 3 つの下位機能がある。

B1. Bringing the reader up to date

この「It 分裂文」には、聞き手に最近のニュースを正しく認識させる機能がある。

(56) 英 : It is through the writings of Basil Bernstein that many social scientists have become aware of the scientific potential of socio-linguistics.

イ : Melalui tulisan Basil Bernstein-lah, banyak ilmuwan sosial menjadi sadar... (後略)

through writing Basil Bernstein-foc many scientists social become aware

B2. Implicating a cause-and-effect relationship

この「It 分裂文」は、ある物事が相互に結びついていることを示唆している。

(57) 英 : But why is the topic so important? Apparently, it is the topic that enables the listener to compute the intended antecedents of each sentence in the paragraph.

イ : (前略) TOPIK(-LAH) // Ø yang me-mungkinkan pendengar untuk (後略)

topic (-foc) Ø LINK meN- enable listener to

B3. Indicating deference/politeness

以下の例では、話し手があるイベントの中で自分の役割を低めている。

(58) 英 : It's with great honor and pleasure that I announce Hilary Putnam.

イ : Dengan rasa hormat dan gembira kami memperkenalkan Hilary Putnam.

with feeling respect and happy 2PL 0-announce Hilary Putnam

この Informative-presupposition の「It 分裂文」には、stressed-focus の「It 分裂文」と異なり、「Wh 節」の部分強調する目的がある。一般に短い指示参照の焦点を持ち、その焦点は、名詞（句）や「時間」「場所」「理由」という副詞句から成り立つ。

英語の「It 分裂文」は、インドネシア語の「(-lah)分裂文」と対応すると考えられるが、焦点が副詞句の場合は、対応関係はないと考えられる。インドネシア語では、焦点の標示、つまり接尾辞-lah を付けて、副詞句が焦点になる場合もあるが、「分裂文」にはならない(56)。以上のような(56)と(58)の例文は、インドネシア語の「分裂文」には対応しない。

英語の「It 分裂文」は、「It 節」が副詞句の場合は、インドネシア語との対応関係はないと考えられるが、日本語とは、対応すると考えられる。以下はその例である。

(59) 英 : It was just about 50 years ago that Henry Ford gave us the weekend...

日 : ヘンリー・フォードが我々に週末というものを与えてくれたのは丁度 50 年ほど前のことであった... (神尾 1990: 87)

イ : Sekitar 50 tahun lalu-lah Henry Ford mem-berikan kami akhir pekan ...

About year ago -foc Henry Ford meN- give 1PL end week

インドネシア語では、なぜ副詞句に焦点が当てられ、「分裂文」にならないのか、それはリンカー yang の特徴と関連がある。つまり、《名詞+yang+関係節》のレベルでは、先行名詞が関係節の主部の指示的対象と同一でなければならないからである。

「分裂文」は「指定文」に属し、「指定文」のように「変項名詞句」と「値名詞句」を持っている。インドネシア語の「分裂文」は次の(60)及び(61)のようにまとめることができる。

(60) 「値」(-LAH) (述部) / x 「yang 節」(主部)

(61) x 「yang 節」(主部) / ADALAH 「値」(述部)

(変項 x は、「節」の主部であり、「分裂文」の「値」である。Yang で始まる節は、前提(トピック)である主部を占める。(60)は(61)のように倒置することができる。

(60) のような構造における focus marker (-lah)の使用は、随意的であるが、(61)のような構造では分離語 adalah の使用率が高いと考えられる。)

このようにインドネシア語の基準に従って主部はトピックでなければならないので、「分裂文」の主部もトピックを占める⁴⁰⁾。分裂文が形成されるのは、節の主語が焦点化されたからである。⁴¹⁾

第一章序論 1.3.節で述べたように、インドネシア語は歴史的にはマレー語と言われていた言語である。マレー語では述部が文頭に立つ場合も珍しくない。おそらく前世期初頭まで主流を占めていた口頭コミュニケーションにおいて、特に長い話をする際に、聞き手の注意と関心を継続させるために、重要な情報を先に伝える必要があったことに由来すると考えられる。

インドネシア語の疑問文も、前提と焦点との区別が比較的はっきりした「分裂文」の構造を使用している。(62)及び(63)の焦点部の疑問詞は、文の主部を占めない。⁴²⁾

(62) *SIAPA* (-KAH) (述部) / *Øyang makan apel* (主部) ?

who (-foc) LINK eat apple

「リンゴを食べたのは誰ですか。」

(63) *APA* (-KAH) (述部) / *Øyang di-makan Ali* (主部) ?

what (-foc) LINK DI- eat Ali?

「アリさんが食べたのは何ですか。」

4.4. 日本語の「AがBだ」構文とインドネシア語との対照

第三章では、日本語の「象は鼻が長い」構文とインドネシア語との対応関係について見てきた。特に、「鼻が長い」の部分に注目し、「象は鼻が長い」文は、尾上(1998, 2004)、西山(1998)、西川(2013)では、《属性叙述》、つまり属性を帰す対象、そして菊池(1997)では《中立叙述》とされていることを見てきた。

⁴⁰⁾ “In Standard Indonesian, the subject **must** be the topic and cannot be the focus of the sentence. That is, Standard Indonesian requires a strict parallelism between topic and subject, a parallelism not required in such languages as English.” (Cole, Hermon and Tjung 2005: 561)

⁴¹⁾ 本論文では、〈指定読み〉と関係があるインドネシア語の分裂文を取り上げたが、以下のような構文 (*orang itu* は〈トピック読み〉) は今後の課題としたい。

a. *Orang itu* (主部) / *SIAPA* (述部) ? (あの人は誰ですか?)
person that who

b. *Orang itu* (主部) / *Ø YANG ME-NOLONG SAYA* (述部) . (あの人は私を助けてくれた人です。)
person that Ø LINK meN- help 1SG

⁴²⁾ インドネシア語の疑問文については Cole, Hermon and Tjung (2005: 553-581) を参照されたい。

(64) 象は鼻が長い。

[主題 *Gajah* [コメント *belalai-nya* / *PANJANG.*]] ← *Belalai gajah* (主部) / *PANJANG.* (述部)
 elephant trunk-3SG.poss long trunk elephant long

(65) あの子は目が大きい。

[主題 *Anak itu* [コメント *mata-nya* / *BESAR.*]] ← *Mata anak itu* (主部) / *BESAR.* (述部)
 child that eye-3SG.poss big eye child that big

(66) アリは父親が医者だ。

[主題 *Ali* [コメント *ayah-nya* / *dokter.*]] ← *Ayah Ali* (主部) / *DOKTER.* (述部)
 Ali father-3SG.poss doctor father Ali doctor

例(64)の元の文 “*Belalai gajah panjang.*”, (65) “*Mata anak itu besar.*”, (66) “*Ayah Ali dokter.*”
 では、所有者 “*gajah*” 「象」、 “*anak itu*” 「あの子」、 “*Ali*” 「アリ」 が、主題になり、文頭に立
 つと、元の場所、つまり、所有物 “*belalai*” 「鼻」、 “*mata*” 「目」、 “*ayah*” 「父親」 は、後続す
 る第三人称単数の所有代名詞（接尾辞） *-nya* で標示される。

この接尾辞 *-nya* は、文の [主題・コメント] を標示すると同時に、ものを特定するための
 機能も持つ。一般的な “*belalai*” 「鼻」、 “*mata*” 「目」、 “*ayah*” 「父親」 ではなく、文脈にお
 いて、その直前の主題の所有物・主題に属しているものであることを指示し限定する働きが
 ある。

一方、「カキは広島が美味しい」構文は、尾上(1998)では、*X* – [YZ] の関係は《題目—解
 説》、西山(1998)では、[Y が] は〈指定〉(Wh-疑問の変項)、そして菊池(1997)では、[Y が]
 は《解答提示》と見なされている。

「カキは広島が美味しい」構文の「広島が美味しい」は、インドネシア語の「分裂文」と
 対応すると考えられ、随意的な *focus marker* (*-lah*) という助詞によって、「広島」が焦点化さ
 れている。助詞 *-lah* は、*foregrounding marker* としての機能を持ち、「分裂文」の述部を標示
 し、特に述部が主部の前に置かれる場合に使われる。

例 (67) “*tiram*” 「カキ」、(68) “*ikan*” 「魚」、(69) “*baju pria*” 「紳士服」は、主題になり、一
 番重要な情報である “*Hiroshima*”, “*toko itu*” 「あの店」、 “*Mitsukoshi*” は *-lah* で焦点化されてい
 る。

(67) カキは広島が美味しい。 *Kalau tiram // HIROSHIMA(-LAH) / Ø yang enak.*
 if oyster Hiroshima (-foc) Ø LINK delicious

(68) 魚はあの店が安い。 *Kalau ikan // TOKO ITU(-LAH) / Øyang murah.*

if fish shop that (-foc) Ø LINK cheap

(69) 紳士服は三越が良い。 *Kalau baju pria // MITSUKOSHI(-LAH) / Øyang bagus.*

if clothes man Mitsukoshi(-foc) Ø LINK good

上述の「カキは広島が美味しい」文の「～が」名詞句は、菊池が《解答提示》と定義しているように、ある前提となる問いに対しての答えの値（＝焦点）を示し、前節では、インドネシア語の述部化・焦点化に対応するということを明らかにした。以下の例も同様と考えられる。

(70) 日：これが最後だからね。分かった？ (砂川 1996a: 266)

イ： *INI(-LAH) / Øyang terakhir, ya. Mengerti?*

this(-foc) Ø LINK end excl understand

(71) 日：この人が、きれいな標準語を喋る人だった。(*loc.cit.*)

イ： *ORANG INI(LAH) / (orang) yang ber-bicara dengan bahasa standar yang baik.*

person this(-foc) (person) LINK BER- speak with language standar LINK good

例(67)～(71)では、「～が」の部分は、特定の対象に焦点を当てる機能を持つ。しかし、それに対して、同じ構造を用いた文でも、「～が」の部分が焦点ではなく、前提の役割を持ち、後項の方が焦点になるという文もある。以下はその例である。

(72) 絵もインテリアの一部と考えるのがヨーロッパの人たちです。そのためには、インテリア全体のなかで絵だけが浮いて見えないような工夫が必要です。このとき、いちばん大切なのがインテリアとの色合わせ。家具や小物のなかの色を、絵のモチーフやマットの部分でもリピーティングして使うとリズム感が生まれ、空間が生き生きしてくるのです。(天野 1995: 8)

「いちばん大切なのが」が、焦点に当たるとは考えにくく、「インテリアとの色合わせは、何かというと、それは、このときいちばん大切なものだ」と解釈するのは不自然である。自然な解釈は、「このときいちばん大切なのは、何かというと、それは、インテリアとの色合わせだ」というものである。例(72)の下線部は、インドネシア語の以下の文に対応すると考

えられる。

(73) *ØYang paling penting // ADALAH PADUAN WARNA INTERIOR.*

Ø LINK most importat 分離語 match color interior

インドネシア語も、「いちばん大切なのが」の「～が」の部分は、焦点の部分ではなく、むしろその部分は前提標示 *yang* を使い、それが付いている成分を前提化している。本節では以下、日本語の「A が B だ」文の用法を明らかにして、インドネシア語との対応関係を更に詳しく考察したい。

4.4.1. 「A」に焦点がある「A が B だ」文

日本語には、「だ」というコピュラと、助詞「は」「が」とによる「A は B だ」と「A が B だ」という二つの形のコピュラ文が存在する。コピュラというのは、主語と述語を結ぶ働きしか持たない言語単位で、それによって構成される文をコピュラ文と言う。英語の場合は、名詞だけでなく、形容詞もコピュラ文を成り立たせるが、日本語の場合は、コピュラ文を形成するのは、名詞述語の文に限られる。⁴³

しかし、以上の例(70)～(72)から分かるように、同じ「A が B だ」文でも、焦点が当てられる部分は異なる。例(70)「**これが**」と例(71)「**この人が**」は、A の部分が焦点情報として提示されている。この A の部分は目の前にいること・人物や直前の文脈を指しており、聞き手にとっては十分に活性化された要素である。活性情報とは、聞き手の意識に登っている情報だと考えられる。

例(70)「**これが(A)** 最後だからね(B)」は B の部分が聞き手に活性化されておらず、B が A より情報価値の高いものであると言えるが、それにもかかわらず、この文にプロソディックな強勢をかけるとすれば、B ではなく、A に限られる。つまり、この文は A の部分を特に目立たせて提示するために用いられている「A が B だ」文であるといえる。

砂川は、主語を目立たせる動機として、他との対比がある場合であると指摘している。例(71)「**この人が**、きれいな標準語を喋る人だった」は、目の前にいる複数の人物を一人取り上げて指す用法である。「が」を用いた場合は、第一章 1.2.2.節の《総記用法》でも触れたよ

⁴³ 日本語「A は美味しい」のような文も形容詞述語のコピュラ文であるが、本節で参考にする砂川(1996a)は、そのような立場はとらず、形容詞の「だ」「で」は活用語尾と考えることにした。そのためコピュラ文は名詞述語文に限ることになった。

うに、複数のメンバーの中から特に一人に焦点を当てるという意味が生じ、その対象を強く聞き手に印象付ける効果がある。

また、例 (70)「**これが(A)** 最後だからね**(B)**」のような対比の意味が生じない場合もある。これは、A の部分によって、直前に述べられた内容や発話状況が指示され、それに対して B で記述が加えられるものである。先行文脈や発話状況と関連する A をまず、聞き手に重要なものとして印象付け、引き続いてその重要さの内容を記述するといった文であると考えられる。次の例も見てみよう。

(74) 「誰が決める？」 「やっぱり、**山田さんが**適任者だろうな」

例(70)と(71)の場合は、聞き手に予測できないと想定される情報を述語名詞句「B」によって付け加えている。それに対して、先行文脈や発話状況から十分に予測可能な名詞句が用いられる例 (74)のような「B」もある。

4.4.2. 「A」に焦点がある「AがBだ」文とインドネシア語との対照

日本語の「カキは広島が美味しい」文の「広島が」の部分は、情報の度合いが一番高く、文の焦点として解釈可能である。インドネシア語では、「広島が美味しい」の部分は、「分裂文」に対応すると考えられるが、インドネシア語の「分裂文」は、主部と述部からなり、それを形作るのは名詞(句)に限られる。この節では再度「分裂文」について考察を加えたい。

「分裂文」の焦点になる要素は、プロソディックな強勢がかけられたり、助詞 *-lah* で標示されたりする。焦点標示を受ける部分は、述部化されたものである。また、「分裂文」の主部は、*yang* で始まる。次の例を見てみよう。

(75) a. *Yamada mem-baca buku di kelas.* 「非分裂文」

Yamada meN- read book prep class

「山田さんはクラスで本を読んでいます。」

b. *SIAPA(-KAH)* (述部) / *Ø yang mem-baca buku di kelas* (主部) ?

Who(-foc) Ø LINK meN- read book prep class

「クラスで本を読んでいる人は誰ですか。」

c. YAMADA(-LAH) (述部) / Ø yang mem-baca buku di kelas (主部).

Yamada(-foc) Ø LINK meN- read book prep class

「クラスで本を読んでいる人は山田さんです。」

例(75b.)の Wh-疑問詞 “*siapa*”と、例(75c.) “*Yamada*”は、文の焦点になるので、主部ではなく、述部を占める。そして、主部は、前提化されて、*yang* で始まる。主部における *yang* の存在は、インドネシア語「分裂文」の特徴である。また、*yang* で標示された主部は、文脈などによって、話し手と聞き手に知られた旧情報として見なされる。

前節で扱った「A が B だ」文の焦点「A」は、インドネシア語の場合は、強調するために、助詞 *-lah* を使うことが一般的である。しかし、日本語と違い、焦点化された「A」の要素は、インドネシア語では主部でなく述部になり、「B」の部分が主部になる。例 (75c.) で示すように主部は、*yang* で前提化されている。次の文も見てみよう。

(76) 日：この人が、きれいな標準語を喋る人だった。(砂川 1996a: 266) (再掲)

イ：ORANG INI(-LAH) (述部) / (orang) yang ber-bicara dengan bahasa standar yang baik (主部) .

person this(-foc) (person) LINK BER- speak with language standar LINK good

日本語の文の主部「この人が」は、焦点されて、インドネシア語の場合は、述部になり、通常 foreground マーカー *-lah* で標示される。日本語の述部の「きれいな標準語を喋る人だ」は、インドネシア語の場合は、次のようになると考えられる。

《日本語》 「きれいな標準語を喋る人だ」→ 述部

《インドネシア語》“(orang) yang ber-bicara dengan bahasa standar yang baik”→ 主部

(person) LINK BER-speak with language standar LINK good

Yang は「人」“*orang*”がどういう人かという、「標準語を喋る人」“*orang yang berbicara dengan bahasa standar*”である、という具合に先行する名詞を修飾する。さらに、どういう「標準語」“*bahasa standar*”かという、「きれいな標準語」“*bahasa standar yang baik*”であるという要素が後続する。

次の例も同様である。

(77) 日：これが最後だからね。分かった？ (砂川 1996a: 266) (再掲)

イ：INI(-LAH) (述部) / *Øyang terakhir* (主部) , *ya. Mengerti?*

this (-foc) / Ø LINK end excl understand

日本語の文の主部「これが」は、焦点であり、インドネシア語の場合も焦点に当たるが、述部として見なされている。また、日本語の述部の要素は、インドネシア語の場合は、次のように考えられる。

《日本語》 「最後だ」 → 述部

《インドネシア語》 “*Øyang terakhir*” → 主部

Ø LINK last/end

上述の「yang 節」には、幾つかの選択の中の一つを指すという機能があり、その選択肢は、話し手も聞き手も文脈、発話状況から想起し得るものであると考えられる。具体的には“*yang terakhir*” ‘the end/last’ や “*yang pertama*” ‘the first’ などという選択肢があり、“INI(LAH) / *Ø yang terakhir.*” 「これが最後だ」(最初ではなく) という句が現れている。

更に、次の例 (78) も、見てみよう。

(78) 山田さんが社長だ。

YAMADA(-LAH) (述部) / *direktur-nya* (主部) .

Yamada (-foc) chairman-DEF

例(78)では、日本語もインドネシア語も同様に、「A」の部分に焦点が当たる。社長は山田さんで、他でもないという意味である。「B」の主部「社長」は、名詞であるが、インドネシア語の場合は、-nya が“*direktur*”の後に付いており、“*direktur*” 「社長」を限定する。-nya がなければ、一般の社長として解釈されて、不自然な文になる。

(79) a. SIAPA(-KAH) / *direktur perusahaan ini?*

Who(-foc) chairman company this

「この会社の社長は誰ですか。」

b. YAMADA(-LAH) / *direktur perusahaan ini*.

Yamada (-foc) chairman company this

「山田さんがこの会社の社長です。」

c. YAMADA(LAH) / *direktur-nya*.

Yamada (-foc) chairman-DEF

「山田さんが（この会社の）社長です。」

例(79b.)と(79c.)は、(79a.)の質問の答えである。“*direktur-nya*” は、英語の “*the president/the chairman*” と対応し、一般の社長ではなく、特定の会社に属している社長であり、文脈の中の旧情報だと考えられる。

4.4.3. 「B」に焦点がある「AがBだ」構文とそれに対応するインドネシア語の構文

これまで、「A が」が焦点となる「A が B だ」文を見てきた。「A が B だ」文には、「A」に焦点のある文の他に、「B」が焦点になる文もある。例(80) は、その例である。

(80) 絵もインテリアの一部と考えるのがヨーロッパの人たちです。そのためには、インテリア全体のなかで絵だけが浮いて見えないような工夫が必要です。このとき、いちばん大切なのがインテリアとの色合わせ。家具や小物のなかの色を、絵のモチーフやマットの部分でもリピートして使うとリズム感が生まれ、空間が生き生きしてくるのです。(天野 1995: 8) (再掲)

天野(1995) は、例(80)の「いちばん大切なのが(A) インテリアとの色合わせ(B)」文は、「A が」という前提と「B」という焦点を持つ「A が B だ」文であると主張している。天野はこの文のタイプについて、次の2点を指摘している。①「A が B だ」に「何だと思う？」という挿入句を差し挟み、「A が、何だと思う？、B だ」とすることができる。②「A が B だ」のBを「例えば」で修飾し、「A が、例えば B だ」とすることができる。

以上2点の他にも、「なんと」「意外にも」など予想外の気持ちを表す修飾句、あるいは他の存在から区別して特定する修飾句「ほかでもない」を伴うことができる。

(81) そして最後に出てきたのが、{なんと／意外にも／ほかでもない}、大きな熊だったのです。(砂川 1996b: 64)

砂川(1996b)によれば、この「A が B だ」文のタイプには、「A」(前提)の部分が、直前の内容を引き継いでさらに新たな情報を付け加え内容を発展させているものと、つながりのない新規情報を表すものがある。

前者は「最後に」「特に」などの特立的な叙述⁴⁴⁾が行われることが多い。(82)と(83)は、その例である。

(82) 人魚をめぐる神話や伝承は、世界中至る所に残されているが、中でも最も有名なものがギリシャ神話のセイレーンだろう。(砂川 1996b: 65)

(83) インターフェロンは 1950 年代に発見され、その後、世界各国で研究が続けられている。中でもインターフェロンを研究テーマにした世界でも珍しい機関が京都パストゥール研究所だ。(砂川 1996a: 269)

後者は、「A」が「つながりのない新規情報」、つまり談話の中に新しい項目を導入するものである。例として次の(84)と(85)が挙げられる。

(84) 茂木友三郎・山崎敏光・恩田饒・白鳥栄一・西田敬宇／昭和 28 年、上野高校卒である。／タイム・カプセルを開いて一番変わっていないのが山崎だ。(砂川 1996b: 65)
(「／」は段落の切れ目を表す)

(85) 秋から冬へと寒さがつのる頃、オリーブ園は収穫の時を迎えます。(中略) この摘みとられたオリーブの実を一番搾りして、最初にとれるごくわずかなオイルが“バージンオイル”です。(砂川 1996a: 269)

「B」が焦点となる「A が B だ」というタイプの文は、インドネシア語の場合は次のように考えられる。(以下、例(81)～(85)の下線部のみ引用する。)

(86) 日：最後に出てきたのが、大きな熊だったのです。

⁴⁴⁾ 特立提示機能とは、ヘツロン(1975)によれば、「後続の談話や後の状況の中で想起するために、文の中の一つの要素に対して特別の注意を喚起する」機能であると規定される(砂川 1996: 61)

イ： *ØYang terakhir keluar / ADALAH SEEKOR BERUANG BESAR.*

Ø LINK the last out 分離語 a bear big

(87) 日：最も有名なものがギリシャ神話のセイレーンだろう。

イ： *ØYang paling terkenal / ADALAH MITOLOGI YUNANI “SIREN”.*

Ø LINK most famous 分離語 myth Greek Siren

(88) 日：インターフェロンを研究テーマにした世界でも珍しい機関が京都パストゥール研究所だ。

イ： *Institusi yang termasuk langka di dunia yang meng-angkat interferon sebagai*

Institute LINK be included rare prep world LINK meN-lift interferon as

tema riset / ADALAH INSTITUSI RISET PASTEUR KYOTO.

theme research 分離語 institute research Pasteur Kyoto

(89) 日：タイム・カプセルを開いて一番変わっていないのが山崎だ。

イ： *ØYang tidak berubah kalau kita membuka kapsul waktu / ADALAH YAMAZAKI.*

Ø LINK NEG change if we open capsule time 分離語 Yamazaki

(90) 日：この摘みとられたオリーブの実を一番搾りして、最初にとれるごくわずかなオイルが“バージンオイル”です。

イ： *Minyak yang sedikit di-peroleh pertama kali dari perasan pertama biji olive yang di-petik*

oil LINK little DI- get first time from squeeze first berry olive LINK DI- pick

ini /ADALAH “VIRGIN OIL”.

this 分離語 virgin oil

例(86)～(90)が示すように、インドネシア語は、日本語の「B」に焦点が当たる「A が B だ」にも対応する。日本語の「A が B だ」構文とインドネシア語との対応関係は以下表 4-4 のように示すことができる。

網かけの箇所では、前提の部分は、インドネシア語の場合は、必ず主部になるので、日本語の焦点が「A」に当たる「A が B だ」構文の《主語—述語》とは逆転現象が見られる。

インドネシア語では、前提の部分の名詞句は、*yang*, *-nya* により特定化されている。焦点の部分は、文頭に置かれれば、*focus marker -lah* で標示され、後に置かれれば、述部を標示する *adalah* が前に付く。

表 4-4: 日本語の「A が B だ」構文とインドネシア語との対応関係

	「これが最後だからね。」		「最後に出てきたのが、大きな熊だったのです」	
	A が (焦点)	B だ (前提)	A が (前提)	B だ (焦点)
日	主部 新情報	述部 旧情報	主部 旧・新情報	述部 旧・新情報
イ	述部 新情報 名詞句(-lah)	主部 旧情報 yang 形容詞・動詞句 名詞句-nya	主部 旧・新情報 Yang 形容詞・動詞句 名詞句-nya	述部 旧・新情報 adalah 名詞句

日本語の「カキは広島が美味しい」における「広島が美味しい」は、「A」に焦点が当たる「A が B だ」構文であると考えられる。インドネシア語の対応する文は、以下のように考えられる。

例(92)のインドネシア語の場合は、“*HIROSHIMA(-LAH) / tempat-nya.*”の主部を占める“*tempat*”‘place’は、既に名詞なので、「分裂文」にならないが、全体は〈指定〉の意味を構成する。

例(92)の「カキは広島が本場だ」構文は、西山(1990)では、「広島が、カキの本場だ」の述語名詞句「カキの本場」の一部「カキの」を文頭に取り出す操作によって派生されたものであるとされる。更に、西山は、「広島が、カキの本場だ」構文は、「指定文」であり、その意味内容は、「カキの本場はどこかと探せば、あっ分かった、それは、広島だ」であると指摘している。

(91) 日：カキは広島が美味しい。

イ：*Kalau tiram // HIROSHIMA(-LAH) / Ø yang enak.*

If oyster Hiroshima(-foc) Ø LINK delicious

(92) 日：カキは広島が本場だ。

イ：*Kalau tiram // HIROSHIMA(-LAH) / tempat-nya.*

If oyster Hiroshima(-foc) place-DEF

4.5. 日本語の主題マーカーに対応するインドネシア語 *kalau* について

インドネシア語には、*kalau* という英語の *if* に対応する語があり、主に条件節マーカーとして機能すると考えられている。*Kalau* によって導かれる節は、条件文の前件・前提部 (*protasis*) と呼ばれ、仮説として後件・結論部 (*apodosis*) において取り上げられるものである。しかし、実際に節だけではなく、名詞(句)を導く場合も存在する。その場合 *kalau* は日本語の主題マーカー「は」に対応すると考えられる。

本節では、インドネシア語の *kalau* が、日本語の主題マーカー「は」に対応することを示す幾つかの文を提示する。最後に、主題及び条件節の両方において同じマーカーが使用される幾つかの言語を提示する。

4.5.1. 日本語の主題マーカーに対応する *kalau*

これまでインドネシア語の *kalau* は、《条件の用法》以外ではあまり取り上げられてこなかった。インドネシア語大辞典では、*kalau* は条件マーカーとしての接続詞であり、その他に「～にとって」「～について」という意味を持っていると説明される。『インドネシア語 — 英語』辞典では、*kalau* は① *if* (例(93))、② *when (future)* (例(94))、③ *as for ... , in the case of ...* (例(95)) という意味を表しているとされる。('?'は、条件節ではなく、他の要素をマークする *kalau* を示す。つまり、この記号は本節では“疑問”を標示するものではない)

(93) *Kalau ia datang panggil-lah saya.* (= *if*)

IF 3SG come call -foc 1SG

‘If he comes, call me.’

(94) *Kalau pekerjaan-mu sudah selesai engkau boleh pergi.* (= *when (future)*)

WHEN work -2SG poss already finish 2SG may go

‘When you have finished your work you may go.’

(95) *Kalau seribu, bagaimana?* (= *as for ... , in the case of ...*)

? a thousand how

‘If we make it a thousand, how about it?’

「～にとって」、「～について」という意味を表すインドネシア語の *kalau* は、日本語の主

題マーカー「は」に対応する場合があります、対照的主題としての機能を持っていると考えられる。次はその例である。(どちらの例も村上春樹から引用したものである。)

(96) 《日本語版》

そして僕にテニスはできるかと訊いた。とても下手だけれどできないことはない
僕は答えた。

「バスケットボールは？」

「それほど得意じゃないですね」 (p.234) (上)

《インドネシア語版》

“Apakah kamu bisa bermain tenis?” tanyanya kepadaku.

“Bisa, bisa tapi tidak pandai,” jawabku.

“Kalau basket, bagaimana?”

? basketball how

“Tidak begitu.” (p.217)

例 (96) では、話者が「テニス」と「バスケットボール」を対比している。

(97) 《日本語版》

だからつまり、あなたもいろんなことを正直にしゃべるようにしなくちゃいけない
わけ、ここでは。だって外の世界ではみんなが何もかも正直にしゃべってるわけでは
ないでしょ？ (p. 236) (上)

《インドネシア語版》

Jadi, selama berada di sini kamu harus berbicara jujur dalam hal apapun.

Kalau di dunia luar, orang-orang tak selalu berbicara jujur, kan? (p. 219)

? in world outside person (PL) NEG always speak honestly ADJ

例 (97) では、話者が「ここ」との対比で、「外の世界」についてコメントしている。

(98) 《日本語版》

「夕ごはんのあとはいつも何するの？」

「レイコさんとおしゃべりしたり、本を読んだり、レコードを聴いたり、他の人の部
屋に行ってゲームをしたり、そういうこと」と直子は言った。

「私はギターの練習をしたり、自叙伝を書いたり」とレイコさんは言った。 (p. 258) (上)

《インドネシア語版》

“Setelah makan malam biasanya apa yang kau lakukan?”

“Mengobrol dengan Reiko-san, baca buku, mendengarkan piringan hitam, atau berkunjung ke kamar teman, bermain game, seperti itulah,” kata Naoko.

“Kalau aku, berlatih gitar atau menulis otobiografi,” Reiko-san menimpali. (p. 240)

? 1SG practice guitar or write autobiography say

例 (98) では、話し手が「直子」と比較して、自分について語っている。

(99) 《日本語版》

エウリピデス知ってますか？昔のギリシャ人で、アイスキュロス、ソフォクレスとならんでギリシャ悲劇のビッグ・スリーと言われています。最後はマケドニアで犬に食われて死んだということになっていますが、これには異説もあります。これがエウリピデスです。僕はソフォクレスの方が好きですけどね、まあこれは好みの問題でしょうね。(p. 90) (下)

《インドネシア語版》

Bapak tahu Euripides? Ia orang Yunani kuno, sejajar dengan Aischylos, Sophokles, dan disebut-sebut sebagai The Big Three dalam dunia drama Yunani. Katanya ia mati di Macedonia dimakan anjing, tetapi ada juga cerita dengan versi lain. Itulah Euripides.

Kalau saya lebih suka Sophokles tapi ini cuma masalah kesukaan. (p. 362)

? 1SG more like but this just problem liking

例 (99) では、「他の人」は先ほど話したエウリピデスのことが好きかもしれないと話し手が想定して、話し手である「私」はソフォクレスの方が好きと述べて、「他の人」と「私」を対照的に表現している。

(100) 《日本語版》

「(前略) たぶん子供のときの記憶のせいね。デパートに連れてってもらうなんてほんのたまにしかなかったから」

「僕はしょっちゅう行ってたような気がするな。お袋がデパート行くの好きだったからさ」(p. 227) (上)

《インドネシア語版》

“... Mungkin ini karena terkenang masa kecilku. Waktu kecil hanya sekali-sekali aku diajak ke

departemen store.”

“Kalau aku, rasanya sering sekali.

? 1SG feel often very

Soalnya ibuku sangat senang pergi ke tempat seperti ini.”

(p. 488)

例 (100) では、第二の話者は、「あなたの子供のとき」と対比された「私の子供のとき」について話している。

4.5.2. 主題及び条件節において同じマーカーを使用する幾つかの言語

インドネシア語以外にも条件節のマーカーが主題のマーカーとして使われている言語がある。(101) は、条件を表す接尾辞 *-sa* が名詞句に付いて対照的な主題を構築するトルコ語の例である。

(101) 《トルコ語》

Ahmed i -se çok meşgul.

(Haiman 1978: 577)

be - ? very busy

‘As for Ahmed, he’s very busy; If it’s Ahmed you’re interested in, he’s very busy.’

Haiman (1978) は、主題及び条件節が同じマーカーを用いる理由として、次のことを指摘している。①主題及び条件節はどちらも対象や状態を表す。②その存在は話し手及び聞き手によって知られている。③その対象や状態は次の談話を継続するために選択されたフレームワークを構成する。

インドネシアの民族語でも主題及び条件節の両方において同じマーカーが使用される言語がよく見られる。例えば Batak Toba 語の *anggo* は (102a.) では条件の意味を表すが、(102b.) ではコメントの対象となる文の要素を主点化する⁴⁵⁾ために使用されている。(103a.) では、Minangkabau 語の助詞 *ko’* が、条件の意味に加えて、(103b.) „was anbetrifft“ 「～について」という意味を表している。

⁴⁵⁾ Van der Tuuk (1971) は“emphasize”, Kähler (1937) は“hervorheben” という術語を使っているが、私は、これらが話題の「枠」を提示するために使用されると見なすので、「強調」ではなく「主点化」という術語を用いることにする。

(102) 《バタック・トバ語》(スマトラ島北州)

- a. *Indadong olo mulak au, anggo indadong dapot au.* (van der Tuuk 1971: 348)

NEG agree back 1SG IF NEG get 1SG

‘I shall not return, that is to say, if I am unable to find it.

- b. *Anggo mambaju mattuwa pande.* (ibid.: 347)

? weaving she skillful

‘(At) weaving (she) is very skillful.’

(103) 《ミナンカバウ語》(スマトラ島西州)

- a. *Ko’ tahu lah den tu amuah den mengatokan.* (van der Toorn 1891: 304)

IF know foc 1SG that want 1SG say

‘Als ik het wist zou, ik het zeggen.’ 「私がしていたなら、私は言うだろう。」

- b. *Ko’ itu io banai.* (Kähler 1937: 263)

? that yes true

‘Was das betrifft, so ist es wahr.’

Fokker (1971) は、ジャワ島で用いられるスンダ語、ジャワ語のような民族語でも同じような現象が見られると指摘している。インドネシア語の *kalau* も含めて、彼は、名詞(句)をマークする要素を「前置き」と呼び、それらを一次的機能として見なし、一方、「条件」としての意味解釈はその次の展開であると定義している。しかし、それがどのような展開であるかについての言及は存在しない。

サンスクリット語は、*yád* という主題マーカーを持っている。*Yád* の要素は名詞(句)である。次の (104) はリグヴェーダのインドラ賛歌の一節からの例である。⁴⁶⁾

(104) 《RV 1. 63. 2》

á yád dhárī indra vívratā vér

ptc ? fallow-pair Indra balky drive

á te vájram jaritā bāhvór dhāt

ptc you club singer arms places

‘If you, Indra, drive hither the balky pair of fallows,

then the singer will lay the club in your arms.’

(Lehmann 1985: 233)

⁴⁶⁾ サンスクリット語の日本語訳は齋藤治之による口頭での指導に基づく。

「もし、インドラよ！汝が反抗的な二頭の馬をこちらに駆り立てるならば、詩人は汝の両腕にヴァジュラ（こん棒）を置くように！」

上例 *yád* は主題としての *dhárī* 「二頭の馬」をマークする。条件文の場合、サンスクリット語では、英語の *if* に相当する接続詞を使用せずに、単に条件節（前提部）を後続する主節の前に置く(105)のような場合がある。この例文では条件節の標識は全く存在しないが、アクセントが最初の節の *cárantī* にあることで、最初の節が前提部であることを示すことが可能である。⁴⁷⁾

(105) 《RV 6. 47. 31》

sám áśvaparṇāś cárantī no náro

ptc with winged-horses attack us hero

śmākam indra rathíno jayantu

our Indra chariot-fighters be victorious

‘If the heroes, with horses as wings, attack us,

then our chariot-borne warriors, oh Indra, will be victors.’ (ibid.:231)

「翼のような馬を持つ英雄たちが私たちを攻撃するならば、私たちの車戦士が、インドラよ！勝利する。」

サンスクリット語では、テキスト成立の時期に従って、条件節マーカが異なっている。主題マーカである *yád* が条件節マーカとして使われていた時期もあり、例文 (106) は、*yád* によって導かれる従属節の例である。

(106) 《RV 2. 13. 11》

supravācanām táva vīra vīryām

deserving praise your hero heroic deed

yád ékena krátunā vindāse vásu

with-one decision you obtain wealth

‘Your heroic action deserves praise, oh hero,

⁴⁷⁾ インドネシア語でも話し言葉で *kalau* を使用しない条件文がある。

Dia datang, saya pergi.

3SG come 1SG go ‘If he come, I will go.’

that/because/if with our decision you obtain wealth.'

(*ibid.*: 232)

「我々の知恵であなたが富を得るために／ので／ならば、勇士よ！あなたの英雄的な行為は賞賛に値する。」

Lehmann (1985) は、ポストヴェーダ期はサンスクリット語の「目的語—動詞」構造から「動詞—目的語」構造への遷移過程の時期に当たり、それに伴い後置詞より前置詞を用い、目的語が動詞の後に置かれ、従属節が主節の後に置かれたりする新たなパターンが導入されたと指摘している。主節が従属節に先行する場合、従属節を標示するためのマーカーが必要となり、*yád* が主題マーカーの役割を果たしたのである。

従って、条件節で提示された事柄が、主節でコメントされると仮定するならば、条件節はトピックを提示する機能を持ち、そのために、主題マーカーが条件節マーカーとして使用されるようになったと考えることが可能である。⁴⁸⁾

上記例文 (103) 以降の箇所でも指摘したように、インドネシア語では、*kalau* の使用機能に関して、どのような歴史的展開があったのかということについて先行研究がまだ存在しない。本節では、インドネシア語の条件節マーカーとして知られている *kalau* は、日本語の主題マーカー「は」にも対応することを提示した。このような *kalau* は、対照的主題という機能を持っている。⁴⁹⁾

⁴⁸⁾ 例 (106) が示すように *yád* には、幾つかの解釈が可能であり、特定の条件節マーカーとしてまだ十分機能していなかったと考えられる。インド・ヨーロッパ語族の諸言語が条件節を特定化するために (例えば、ラテン語 *sí*、NHG *wenn*、NE *if* などの) 接続詞を導入したように、サンスクリット語でも接続詞 *yádi* が導入された。*yádi* を用いることで、初期サンスクリット語の条件節の展開は完了した。(Lehmann, 1985)

⁴⁹⁾ 三上は(1960: 165)は、「なら」を条件法関係の提題の代表とし、「は」との違いを次のように述べている。X なら—相手から話し手に移りつつある題目、条件付き題目
X は —すっかり話し手のものになっている題目、無条件の題目
この指摘から次のような現象が説明出来る。(本論文では、「は」「なら」の違いを詳しく取り上げない。)

A: 田中さん、知らない？

Tanaka, dimana?

Tanaka where

B: 田中さん {なら／は} さっき図書館にいたよ。

Kalau Tanaka tadi ada di perpustakaan.

if Tanaka a while ago be prep library

田中さん {*なら／は} 来週学会で発表するんだよ。

Bapak Tanaka akan ber-presentasi pada konferensi minggu depan.

Mr. Tanaka will give a presentation prep conference week ahead

4.6. 日本語「カキは広島が美味しい」構文とインドネシア語“Kalau tiram Hiroshima yang enak”構文との対応関係

以下において、日本語の「カキは広島が美味しい」に対応するインドネシア語の構文、“Kalau tiram Hiroshima yang enak”について、前節で扱った対照的主題の観点から、再度考察を加えたい。尾上(1998)によれば、「カキは広島が美味しい」「XはYがZ」構文では、X－[Y－Z]は《題目－解説》という関係を有し、従って、この構文はインドネシア語の“Kalau tiram Hiroshima yang enak”構文と対応すると考えられる。Kalau は、対照的主題として用いられ、談話の〈枠〉を決め、解説の部分“HIROSHIMA / yang enak.”はそれについて語る。

(107) [題目 *Kalau tiram*] // [解説 *HIROSHIMA / Ø yang enak*.]

If oyster Hiroshima Ø LINK delicious

西山(2003)は「カキは広島が美味しい」に見られる「XはYがZ」構文では、[YがZ]は「X」の指定の値が走る範囲であり、「Yが」は〈指定〉(Wh-疑問の変項)であると指摘している。菊池(1997, 2009, 2010)は、[YがZ]は[〈質問の変項〉と〈関心の対象〉]からなり、「Yが」は《解説提示》と指摘している。

以下の例(108)及び(109)が示すようにBの「広島が美味しい」“*HIROSHIMA / yang enak*.”が「カキ」“*tiram*”が走る範囲であり、「広島が」“*HIROSHIMA*”は〈Wh-疑問の変項〉《解説提示》である。

(108) 日 A: カキの季節だね。カキは**どこが**美味しい。

B: **広島が**美味しい。

(109) イ A: *Musim tiram tiba. Kalau tiram // DIMANA / Ø yang enak?*

season oyster come if oyster where Ø LINK delicious

B: *HIROSHIMA / Ø yang enak.*

Hiroshima Ø LINK delicious

次に、有題文「カキは広島が美味しい」構文と元の文を見てみよう。以下の(110)～(112)では、〈カキ－広島〉は〈全体－部分〉ではなく、〈部分－全体〉という関係を持っている。一方、(113)「象は鼻が長い」構文の場合は、〈象－鼻〉は〈全体－部分〉という関係を持って

いる。

- (110) カキは広島が美味しい。 ← 広島のカキが美味しい。
(111) 魚はあの店が安い。 ← あの店の魚が安い。
(112) 紳士服は三越が良い。 ← 三越の紳士服が良い。
(113) 象は鼻が長い。 ← 象の鼻が長い。

インドネシア語の場合、上記(110)～(112)に対応する(114)～(116)の文が(117)“Gajah belalainya panjang” 構文に対して非文となるのは、接尾辞-nya が所有者を標示するからである。

- (114) * *Tiram // Hiroshima-nya / ENAK.*
oyster Hiroshima-3SG.poss delicious
(115) * *Ikan // toko itu-nya / MURAH.*
fish shop that-3SG.poss cheap
(116) * *Baju pria // Mitsukoshi-nya / BAGUS.*
clothes man Mitsukoshi-3SG.poss good

インドネシア語の“Gajah belalainya panjang” 構文に対して、“Kalau tiram Hiroshima yang enak” 構文の元の文は、(118)～(120)のようになる。

- | | |
|---|---|
| (117) <i>Gajah // belalai-nya / PANJANG.</i>
elephant trunk-3SG.poss long
「象は鼻が長い」 | ← <i>Belalai <u>gajah</u> / PANJANG.</i>
trunk elephant long
「 <u>象</u> の鼻が長い」 |
| (118) <i>Kalau Tiram // HIROSHIMA / Øyang enak.</i>
if oyster Hiroshima Ø LINK delicious
「カキは広島が美味しい」 | ← <i><u>TIRAM</u> HIROSHIMA / Øyang enak.</i>
oyster Hiroshima Ø LINK delicious
「広島の <u>カキ</u> が美味しい」 |
| (119) <i>Kalau ikan // TOKO ITU / Øyang murah.</i>
if fish shop that Ø LINK cheap
「魚はあの店が安い」 | ← <i><u>IKAN</u> TOKO ITU / Øyang murah.</i>
fish shop that Ø LINK cheap
「あの店の <u>魚</u> が安い」 |

(120) *Kalau baju pria // MITSUKOSHI / Øyang bagus.* ← *BAJU PRIA MITSUKOSHI / Øyang bagus.*

if clothes man Mitsukoshi Ø LINK good clothes man Mitsukoshi Ø LINK good
「紳士服は三越が良い」 「三越の紳士服が良い」

ここで注目すべきは、日本語では N1 と N2 〈全体—部分〉（例：広島はカキが美味しい）及びその逆の N2 と N1 〈部分—全体〉（例：カキは広島が美味しい）の構文は両者とも「～は～が」の形式が用いられるが、インドネシア語では前者は（例：Hiroshima tiram-nya enak）、後者は（例：Kalau tiram Hiroshima yang enak）のように異なる構文が現れることである。⁵⁰⁾

「象は鼻が長い」構文の「鼻が長い」は、〈指定の読み〉としても解釈することが可能であり、インドネシア語の対応する構文は、以下のようになる。

(121) *Kalau gajah // BELALAI-NYA(-LAH) / Øyang panjang.*

if elephant trunk-3SG.poss(-foc) Ø LINK long
「象は鼻が長い」（指定読み）

(122) *Kalau universitas itu // TIM BASEBALL-NYA(-LAH) / Øyang kuat.*

if university that team baseball-3SG.poss(-foc) Ø LINK strong
「その大学は野球が強い」（指定読み）

(123) *Kalau teori umum // PEMBUKTIAN-NYA(-LAH) / Øyang sulit.*

if theory common proof -3SG.poss(-foc) Ø LINK difficult
「定論は証明が難しい」（指定読み）

また、「カキは広島が本場」構文の場合は、次の例が挙げられる。

(124) 日：カキは広島が本場だ。

イ： *Kalau tiram // HIROSHIMA(-LAH) / tempat-nya.*

if oyster Hiroshima (-foc) place -DEF

(125) 日：日本語は彼が専門家だ。

イ： *Kalau Bahasa Jepang // DIA(-LAH) / ahli-nya.*

if language Japan 3SG(-foc) expert-DEF

⁵⁰⁾ 「全体」—「部分」という関係は taxonomy（分類関係）の観点から「類—種」あるいは「産地—産物」に置き換え可能かもしれないが、本論文では尾上に従って「全体—部分」という術語を用いることにする。

(126) 日：この小説は村上春樹が作者だ。

イ：*Kalau novel ini // MURAKAMI HARUKI(-LAH) / pengarang-nya.*

if novel this Murakami Haruki (-foc) author-DEF

(127) 日：あの事件は彼が犯人だ。

イ：*Kalau perkara itu // DIA(-LAH) / pelaku-nya.*

if matter that 3SG(-foc) suspect-DEF

(128) 日：その芝居は太郎が主役。

イ：*Kalau drama itu // TARO(-LAH) / pemeran utama-nya.*

if drama that Taro(-foc) character main -DEF

例(124)～(128)の元の文は次の(129)～(133)ようになる。これらの文の一部（下線部）を文頭に取り出す主題化操作によって、上記の例(124)～(128)が派生される。また、「本場」、「専門家」、「作者」、「犯人」、「主役」は、独立ではその外延を決定できないという〈非飽和名詞句〉になっており、名詞句全体（N1 の N2）のタイプは、タイプ D に属する。インドネシア語の構文(124)～(128)は、主題化された要素の元の場所が、-nya で標示される。

(129) 広島がカキの本場だ。

HIROSHIMA(-LAH) / tempat tiram.

Hiroshima(foc) place oyster

(130) 彼が日本語の専門家だ。

DIA(-LAH) / ahli Bahasa Jepang.

3SG(-foc) expert language Japan

(131) 村上春樹がこの小説の作者だ。

MURAKAMI HARUKI(-LAH) / pengarang novel ini.

Murakami Haruki(-foc) author novel this

(132) 彼があの事件の犯人だ。

DIA(-LAH) / pelaku perkara itu.

3SG(-foc) suspect matter that

(133) 太郎がその芝居の主役だ。

TARO(-LAH) / pemeran utama drama itu.

Taro (-foc) character main drama that

4.7. まとめ

本章では、日本語の「カキは広島が美味しい」構文とインドネシア語の“*Kalau tiram Hiroshima yang enak*” 構文との対応関係を考察した。インドネシア語の主題の部分は、*kalau*

で標示され、対照的主題として機能している。これは、*kalau tiram* のような主題に立つ要素は、文の主語の所有者のみである“*Gajah belalainya panjang*” 構文における *gajah* とは異なり、日本語の《対照》を表す「は」のような用法を持っているからである。

「広島が美味しい」部分は、〈指定読み〉であり、インドネシア語では、「分裂文」に対応する。インドネシア語は、日本語と異なり、主部に焦点が当たらない。つまり焦点に当たる「広島が」は、日本語の場合は、主部を占めるが、インドネシア語の場合は、主部を占めない。このような「～が」に焦点が当たる構文では、日本語とインドネシア語の間には、主語と述語の逆転現象が見られる。

第五章

結論

日本語を勉強して初めて一つの文に二つの主部があることがあり得るということに気付いた。本研究を通じて、それが、文レベルかあるいは談話レベルかに関する問題であることを知った。日本語の文の主語をめぐる問題は、いまだ議論が継続中である。様々な観点から研究を行われ、研究者の間に意見が一致しない。本論文の日本語の三つのタイプの「～は～が」構文とそれに対応するインドネシア語の構文との関係についての対照研究によって、以下の結論に達した。

目的語が文の主点になることに関して、その要素は日本語では「は」でマークされ、文の主点になる一方、インドネシア語では、それは文の主語になり、動詞形の変化に影響を与える。主語卓越型言語では、目的語が文の主点になる場合、受動文になることが一般であり、インドネシア語も同様であると考えられる。一方、日本語では、目的語（動作対象）を主語にすることは一般的ではない。受動文が用いられるのは、動作主が不問の場合か、動作対象について何か述べる場合、つまりそれが持つ性質や重大なエピソードが問題となる場合である。

「を」格項主題化は、「は」でマークされることによって、《主題提示》及び《対比》という二つの機能を持つことになる。主題になった要素は、既に会話に登場した人物・事柄であるので、日本語では、必ずしも特定化する必要はない。一方、インドネシア語の主語は特定化されない場合は、一般の事柄について指示し、主語について一般的な情報を述べることになる。

第二章では、行為要求の文・命令文の場合は、インドネシア語では、*patient voice* 構文を使用し、さらに、日本語において目的語が主題化される場合は、インドネシア語では、その目的語は文の主語になり、その際「*di*-動詞」「*Ø*-動詞」構文を使用することを指摘した。

第三章では、日本語の「象は鼻が長い」構文と並行的なインドネシア語の構文として、“*Gajah belalainya panjang*” 構文が挙げられること、また、「象は鼻が長い」構文は、無題化すると「象の鼻が長い（こと）」になり、「象の」が「象は」の兼務として機能することを指摘した。この二つの構文を対照することによって、インドネシア語も主語の所有者を主題化す

る構文を持つこと、さらに、“*gajah*”「象」の文頭への転位は、左方転位ではなく、主題化であることも明らかにした。

この際重要なのは、日本語では「～の」形式を伴わないが、インドネシア語では、主題への照応リンクの標示が必要であるということである。その標示は、転位された要素を象徴する機能を持つ標示（つまり人称代名詞としての *resumptive pronoun*（再叙代名詞））ではなく、所有代名詞である。

日本語の「象は鼻が長い」構文は、「有題文」として、「象」という〈枠〉のもとで「鼻が長い」という事態をまるごとを叙述する文である。「象は」という〈枠〉を言わなくても、「今・ここ了解された空間・状況」という前提の下に「鼻が長い」を叙述する。この場合は、インドネシア語も同様であると考えられる。本論文も、二重主語（二重「措定文」）という先行研究を取り上げ、この先行研究に基づいて、「象は鼻が長い」構文は、「象」についての“性質を説明する文”であることを指摘した。

第四章では、「象は鼻が長い」構文と意味構造が異なっている「カキは広島が美味しい」構文を取り上げ、インドネシア語の対応する“*Kalau tiram Hiroshima yang enak*”構文の説明を試みた。「広島が美味しい」部分は、インドネシア語の「分裂文」に対応すると考えられ、そのインドネシア語の「分裂文」と日本語の「A が B だ」構文との対応関係を考察し、焦点が A に当たると、日本語とインドネシア語の間には、主語と述語の逆転現象が見られることを指摘した。これは、インドネシア語の、主語はトピックでなければならない、文の焦点ではあり得ないという制約に基づくものと考えられる。

また、「カキは広島が美味しい」構文との比較によって、「象は鼻が長い」構文の「鼻が長い」部分が〈指定の読み〉になった場合、それに対応するインドネシア語の構文は、“*Kalau tiram Hiroshima yang enak*”構文であることにも言及した。

以上の対照研究から、本論文の結論として下記の事柄が挙げられる。

- I. インドネシア語では、主語が動詞の接頭辞の変化と関係が有ること、また、文の主語が動作対象の場合は、「0-動詞」及び接頭辞 *di-*が付加された動詞形が使用されることを示した。一方、日本語では、「は」による標示によって、主題とその述語との直接的な関係を示すことが不必要となる。
- II. インドネシア語は、I の制約により、主語卓越型に属するとされるが、日本語の二つのタイプの「～は～が」構文にそれぞれ対応する二タイプの「有題文」を持つことを明らかにした。一つは、主語の所有者が主題化された「有題文」

であり、もう一つは、対照的主題マーカーとして機能する *kalau* を使用する「有題文」であり、以下の表のようにまとめることができる。

表 5-1: 日本語「象は鼻が長い」構文及び「カキは広島が美味しい」構文とインドネシア語との対応関係

「X は Y が Z」構文	日本語の文	インドネシア語との対応関係	対応するインドネシア語の「有題文」
a) 「X—[YZ]」が主述関係 b) 「Y が Z」は《中立叙述》	象は <u>鼻</u> が長い。 そのバスは <u>窓</u> が大きい。 彼女は <u>目</u> が美しい。	主語の所有者による主 題化と対応	[Gajah [belalai-nya PANJANG]]. [Bis itu [jendela-nya BESAR]]. [Dia [mata-nya CANTIK]].
「Y が」は《解答提示》	カキは <u>広島</u> が美味しい。 魚は <u>あの店</u> が安い。 象は <u>鼻</u> が長い。 A 党は <u>山田さん</u> が来た。	Wh-疑問の変項(答え)、焦点化される成分と対応	Kalau tiram // HIROSHIMA(-LAH) / yang enak. Kalau ikan // TOKO ITU(-LAH) / yang enak. Kalau gajah // BELALAINYA(-LAH) / yang panjang. Kalau partai // A YAMADA(-LAH) / yang datang.

- III. インドネシア語では、《主語—述語》のみでなく、《述語—主語》という語順もよく使用され、その場合主語はトピックでなければならないことを示した。語順に関しては、受動文の場合は「主語」と「動詞句」の倒置には制約があるが、倒置は「措定文」及び「指定文」（「分裂文」）の場合によく見られる。

今後の課題として、これからも特に主題・主語に関する問題について日本語及びインドネシア語の更なる比較対照研究を継続するつもりである。

参考文献

- Abraham, Werner (2003) “The Syntactic Link Between Thema and Rhema: The Syntax-Discourse Interface”. In *Folia Linguistica* XXXVII/1-2. Berlin: Mouton de Gruyter, pp.13-34.
- Akatsuka, Noriko (1986) “Conditional are Discourse-Bound”. In Elizabeth Closs Traugott et al (ed.) *On Conditionals*. Cambridge: Cambridge University Press, pp.333-351.
- Akmajian, Adrian. (1979) *Aspects of the Grammar of Focus in English*. New York: Garland Publishing.
- 天野みどり(1995)「後項焦点の『A が B だ』文」新潟大学『人文科学研究』89, pp.1-24.
- 青木博史・高山善行・小柳智一（編）(2014)『日本語文法史研究 2』ひつじ書房.
- Badudu, J. S. (1993) *Pelik-Pelik Bahasa Indonesia*. Penerbit Pustaka Prima. Bandung.
- Chafe, Wallace L. (1970) *Meaning and the Structure of Language*. University of Chicago Press, Chicago.
- Chafe, Wallace L. (1972) “Discourse Structure and Human Knowledge”. In Roy O. Freedle and John B. Carroll. *Language comprehension and the Acquisition of Knowledge*. V. H. Winston, Washington.
- Chafe, Wallace L. (1974) “Language and Consciousness”. *Language* 50, pp.111-133.
- Chafe, Wallace L. (1976) “Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics, and Point of View”. In Charles N. Li (ed.) *Subject and Topic*, pp.25-55. Academic Press.
- Chafe, Wallace L. (1977) “Creativity in Verbalization and Its Implications for the Nature of Stored Knowledge”. In Roy O. Freedle (ed.). *Discourse Production and Comprehension*. Ablex Publishing Corporation.
- Chung, Sandra (1976) “On the Subject of Two Passives in Indonesian”. In Charles N. Li (ed.) *Subject and Topic*. Academic Press, Inc.
- Cole, P. (1974) “Indefiniteness and Anaphoricity”. *Language* 50, pp.665-674.
- Cole, Peter, Gabriella Hermon and Yassir Nasanius Tjung. (2005) “How irregular is WH in situ in Indonesian?” In Bernard Comrie and Michael Noonan (eds.) *Studies in Language*. Vol.29 Num.3, pp.553-581. John Benjamins Publishing Company.
- Daneš, František (1974) *Papers on Functional Sentence Perspective*. Prague: Academia.
- Dardjowidjojo, Soenjono (1978) *Sentence patterns of Indonesian*. Honolulu: University Press of Hawaii.

- Dardjowidjojo, Soenjono (1994) *Beberapa Aspek Linguistik Indonesia*. Penerbit Djambatan.
- デディ・ステディ(2006) 「インドネシア語の「di-動詞」構文と日本語の「(ら) れる」との対照研究」『日本言語文化研究会論集』第2号政策研究大学大学院.
- Donellan, K. (1966) "Reference and Definite Descriptions. *Philosophic Review* LXXV No. 3, pp.281-304.
- Fillmore, Charles J. (1982) "Towards a Descriptive Framework for Spatial Deixis". In Jarvella, Robert J. And Wolfgang Klein (ed.) *Speech, Place, and Action Studies in Deixis and Related Topics*. John Wiley & Sons Ltd, pp.31-59.
- Firbas, Jan (1966) "Non-Thematic Subjects in Contemporary English". *Travaux Linguistique de Prague* 2, pp.239-256.
- Firbas, Jan (1966) "On Defining the Theme in Functional Sentence Analysis". *Travaux Linguistique de Prague* 1, pp.267-280.
- Firbas, Jan (1974) "Some Aspects of the Czechoslovak Approach to Problem of Functional Sentence Perspective". In František Daneš (ed). *Papers on Functional Sentence Perspective*. Prague: Academia.
- Fokker, A. A. (1972) *Pengantar Sintaksis Indonesia*. Second impression, translated by Djonhar from the original *Inleiding tot de studie van de Indonesische syntaxis* (1951). Djakarta: J. B. Wolters. Djakarta: Pradnja Paramita.
- Foley, William A. (1976) *Comparative Syntax in Austronesian*. Ph.D. Dissertation, University of California. Ann Arbor: University Microfilms.
- 舟田京子 (2004) 『やさしい初歩のインドネシア語』 南雲堂.
- Greenberg, Joseph H. (ed.) (1966) *Universal of Language*. 2nd edition. The M.I.T. Press, Massachusetts Institute of Technology.
- Grice, H. P. (1975) "Logic and Conversation. In Peter Cole and Jerry L. Morgan (ed.) *Syntax and Semantics*, vol.3. Academic Press, New York.
- グループジャマシ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』 くろしお出版.
- Haiman, John (1978) "Conditionals are topics" *Language* vol. 54 number 3.
- Haiman, John (1985) "Symmetry". In John Haiman (ed) *Iconicity in Syntax*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company, pp.73-95.
- Haiman, John and Sandra A. Thompson (ed.) (1988) *Clause Combining in Grammar and Discourse*. John Benjamins Publishing Company.

- Hajičová, Eva (2010) “Information Structure from the Point of View of the Relation of Function and Form”. In Martin Procházka (ed). *The Prague School and Theories of Structure*. V&R unipress, Goettingen.
- Halliday, M.A.K (1974) “The Place of “Functional Sentence Perspective” in the System of Linguistic Description”. In František Daneš (ed). *Papers on Functional Sentence Perspective*. Prague: Academia.
- Halliday, M. A. K. (1985) *An Introduction to Functional Grammar*. Edward Arnold.
- 堀川智也 (2012) 『日本語の「主題」』 ひつじ書房.
- Hornby, Peter A. (1971) “Surface Structure and the Topic-Comment Distinction: a Developmental Study”. *Child Development* 42, pp.1975-1988.
- Hornby, Peter A. (1972) “The Psychological Subject and Predicate”. *Cognitive Psychology* 3, pp.632-42.
- Hornby, Peter A., Wilbur A. Hass, and Carol F. Feldman. (1970) A Developmental Analysis of the ‘Psychological’ Subject and Predicate of the Sentence. *Language and Speech* 13. 182-193.
- Ide, Sachiko (2002) “The Speaker’s Viewpoint and Indexicality in a High Context Culture” In 片岡邦好・井出祥子 (編) 『文化・インターアクション・言語』 pp.3-20 ひつじ書房.
- 今田滋子 (1965) 「「象は鼻が長い」をめぐる transformation」『日本語教育』6 外国人のための日本語教育学会 pp.38-45.
- Inagaki, Kazuya (2013) “Information Structure in Kadorih”. International workshop on ‘Cross-linguistic Perspective on the Information Structure of the Austronesian Languages’. 2013/11/13-15, pp.229-244.
- 庵功雄 (2003) 『『象は鼻が長い』 入門—日本語学の父 三上章—』 くろしお出版.
- Jarvella, Robert J. And Wolfgang Klein (ed.) (1982) *Speech, Place, and Action Studies in Deixis and Related Topics*. John Wiley & Sons Ltd.
- Jespersen, Otto (1911) *Language Its Nature, Development and Origin*. George Allen & Unwin Ltd, London.
- Jespersen, Otto (1924) *The Philosophy of Grammar*. George Allen & Unwin Ltd, London.
- Johnson-Laird, P. N. (1968) “The Interpretation of the Passive Voice”. *Quarterly Journal of Experimental Psychology* 20, pp.69-73.
- Johnson-Laird, P. N. (1968) “The Choice of the Passive Voice in a Communicative Task”. *British Journal of Psychology* 59, pp.7-15.

- Kähler, Hans (1937) “Untersuchungen über die Laut, Wort und Satzlehre des Nias”. *Zeitschrift für Eingeborenen-Sprachen*, Band XXVII.
- Kähler, Hans (1965) *Gramatik Der Bahasa Indonésia*. Otto Harrassowitz, Wiesbaden.
- 神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論』大修館書店.
- Kaswanti Purwo, Bambang. (1983) Kata yang sebagai Pengetat. In *Majalah Pembinaan Bahasa Indonesia*, pp.175-185. P. T. Bhatara Karya Aksara.
- 風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健(2004)『言語学 [第2版]』東京大学出版会.
- Keenan, Edward L. (1976) “Towards a Universal Definition of “Subject””. In Li, Charles N. (ed.) (1976) *Subject and Topic*. Academic Press, New York, pp.303-334.
- 菊池隼人 (1988) 「従属節中の語句の主題化と分析できる「XはYがZ」文について」『東京大学言語学論集‘88』 203-227. 東京大学文学部言語学研究室.
- 菊池康人 (1995) 「「は」構文の概観」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版 pp.37-69.
- 菊池康人 (1996) 「『が』の用法の概観」『渡辺実博士古稀記念論集 日本語文法一体系と方法』明治書院 pp.101-123.
- 菊池隼人 (1997) 「「が」の用法の概観」川端善明・仁田義雄編『日本語文法一体系と方法』 101-123. 東京：ひつじ書房.
- 菊池隼人 (2009) 「日本語を教えることで見えてくる日本語の文法—「XはYがZ」文と「YがZ」句—」『日本語文法』.
- 菊池康人 (2010a) 「日本語の2種類の『文構成原理』と、『が』の文構成上の機能」上野善道 (監修)『日本語研究の12章』明治書院, pp.117-133.
- 菊池康人 (2010b) 「日本語を教えることで見えてくる日本語の文法—「XはYがZ」文と「YがZ」句—」『日本語文法』10巻2号記念フォーラム特集, pp.22-38.
- 金智賢 (2016) 『日韓対照研究によるハとガと無助詞』ひつじ書房.
- 國廣哲彌 (1982) 『意味論の方法』大修館.
- Kuno, Susumu (1972) Functional Sentence Perspective. *Linguistic Inquiry* 3. 269-320.
- 久野暲(1973)『日本語文法研究』大修館書店.
- Kuno, Susumu (1976) “Subject, Theme, and the Speaker’s Empathy – A Reexamination of Relativization Phenomena”. In Li, Charles N. (ed.) (1976) *Subject and Topic*. Academic Press, New York, pp.417-446.
- Labrousse, Pierre (1978) *Methode d’Indonesien*. Paris: L’Asiathèque.
- Lambrecht, Knud. (2001) “Dislocation”. In: Martin Haspelmath, Ekkehard König, Wulf Oesterreicher,

- and Wolfgang Raible. (ed.) *Language Typology and Language Universals: An International Handbook Vol. II*. Berlin: Walter de Gruyter. 1050-1078.
- Li, Charles N. (ed.) (1976) *Subject and Topic*. Academic Press, New York.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson (1976) "Subject and topic: A new typology of language." In Li, Charles N. (ed.), *Subject and topic*. Academic Press, New York, pp.457-490.
- Lehmann, Winfred P. (1962) *Historical Linguistics: an Introduction*. Holt, Rinehart and Winston, Inc.
- Lehmann, Winfred P. (ed.) (1978) *Syntactic Typology Studies in the Phenomenology of Language*. University of Texas Press, Austin.
- Lehmann, Winfred P. (1985) "Development of Conditional Clauses in Early Sanskrit". In Hermann M. Ölborg, Gernot Schmidt, Heinz Bothien (ed.) *Sprachwissenschaftliche Forschungen: Festschrift für Johann Knobloch*, pp.231-236. Innsbrucker Beiträge zur Kulturwissenschaft Band 23.
- Lyons, John (1982) "Deixis and Subjectivity: *Loquor, ergo sum?*". In Jarvella, Robert J. And Wolfgang Klein (ed.) *Speech, Place, and Action Studies in Deixis and Related Topics*. John Wiley & Sons Ltd, pp.101-124.
- Macdonald, Roderick R. (1976) *Indonesian Reference Grammar*. Georgetown University.
- 益岡隆志 (1993) 『命題の文法—日本語文法序説』 くろしお出版.
- 松田剛史 (1984) 『「ト、テ、タラ」について』『大谷女子大國文』14 号.
- 三上章 (1955) 『現代語法新説』 刀江書院.
- 三上章 (1960) 『象は鼻が長い』 くろしお出版.
- 森口恒一 (1995) 「フィリピン・台湾高砂諸語における『主語』と『主題』」『言語研究』107 号 87-112.
- 森山幹弘・柏村彰夫 (2003) 『教科書インドネシア語』 めこん.
- 中西久美子 (2012) 『現代日本語のとりたて助詞と習得』 ひつじ書房.
- 西川賢哉 (2013a) 「非飽和名詞のパラメータに対する意味解釈—自由変項読みと束縛変項読み」 西山佑司編『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る』 ひつじ研究叢書〈言語編〉第 112 巻 pp.51-64. ひつじ書房.
- 西川賢哉 (2013b) 「「NP₁のNP₂」タイプ F—譲渡不可能名詞 NP₂とその基本表現 NP₁—」 西山佑司編『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る』 ひつじ研究叢書〈言語編〉第 112 巻 pp.65-82. ひつじ書房.
- 西川賢哉 (2013c) 「二重コピュラ文としての「A は B が C (だ)」構文「象は鼻が長い」構文を中心に」 西山佑司編『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る』 ひつじ研究叢書

- 〈言語編〉第 112 巻 pp.167-211. ひつじ書房.
- 西山佑司 (1985) 「措定文、指定文、同定文の区別をめぐって」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』17 号 pp.135-165.
- 西山佑司 (1989) 「「象は鼻が長い」構文について」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』21, 慶応義塾大学 pp.107-133.
- 西山佑司 (1990) 「「かき料理は広島が本場だ」構文について」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』22, 慶応義塾大学 pp.169-188.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房.
- 西山佑司 (2005) 「コピュラ文の分析に「役割—値」概念は有効であるか」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 37 号 pp.45-88.
- 仁田義雄 (1987) 「条件づけとその周辺」、『言語学』9 月号、明治書院.
- 丹羽哲也 (2000) 「主題の構造と諸形式」『日本語学』4 月 19 号、pp.100-109.
- 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』くろしお出版.
- 野田尚史 (2002) 「主語と主題」『言語』30 周年記念別冊 日本の言語学三〇年の歩みと今世紀の展望』大修館書店 pp.38-49.
- Nothofer, Bernd and Karl-Heinz Pampus (2001) *Bahasa Indonesia*. Julius Gross Verlag Tübingen.
- 生越直樹 (2002) 『シリーズ言語科学 4 対照言語学』東京大学出版会.
- 尾上圭介 (1995) 「『は』の意味分化の論理—題目提示と対比」『言語』24 巻 11 号.
- 尾上圭介・木村英樹・西村義樹 (1998) 「二重主語とその周辺—日中英対照」『言語』27 巻 11 号.
- 尾上圭介 (2004) 「主語と述語をめぐる文法」尾上圭介 (編) 『朝倉日本語講座 6 文法 II』p.1-57. 朝倉書店.
- van Ophuijsen, Ch. A. (1983) *Tata Bahasa Melayu*. Jakarta: Penerbit Djambatan. Translated by T. W. Kamil from the original *Maleische Spraakkunst*. (1910) Leiden: S. C. Van Doesburgh.
- Pané, Armijn (1950) *Mentjari Sendi Baru Tata Bahasa Indonesia*. Balai Pustaka, Djakarta.
- Parera, Jos Daniel (1988) *Sintaksis*. Gramedia Pustaka Utama, Jakarta.
- Prince, Ellen F. (1978) “A comparison of WH-clefts and IT-clefts in discourse”. *Language*, 54 (4), pp.883-906.
- Prince, Ellen F. (1998) “On the Limits of Syntax, with Reference to Left-Dislocation and Topicalization”. *Syntax and Semantics, Volume 29. The Limits of Syntax*. Academic Press, pp.281-

- Rafferty, Ellen. (1987) Word order in intransitive clauses in high and low Malay of the late nineteenth century. In Russell S. Tomlin (ed.) *Coherence and Grounding in Discourse*. John Benjamins Publishing Company, pp.361-381.
- 齋藤治之 (2011) 「ドイツ語条件文体系の歴史的変化 — 条件文における接続法現在形の用法を中心に —」『京都大学ドイツ文学研究第56号』, pp.25-60.
- 崎山理 (1991) 「インドネシア語と日本語」近藤達夫 (編)『講座日本語と日本語教育 12 言語学要説 (下)』266-284. 東京：明治書院.
- Sapir, Edward (1921) *Language: an Introduction to the Study of Speech*. Harcourt, Brace, New York.
- 佐々木重次 (2014) 『インドネシア語の中庭・文法篇 改版』Grup sanggar.
- 澤田治美 (編) (2012) 『ひつじ意味論講座第2巻構文と意味』ひつじ書房.
- de Saussure, Ferdinand (1959) *Course in General Linguistics*. Charles Bally and Albert Sechehaye (ed.). In collaboration with Albert Reidlinger. Translated from the French by Wade Baskin. Philosophical Library, New York.
- Schachter, Paul (1973) “Focus and Relativization”. *Language* 49, pp.19-46.
- Schachter, Paul (1976) “The Subject in Philippine Languages: Topic, Actor, Actor-Topic, or Non of the Above?” In Charles N. Li (ed.) *Subject and Topic*. Academic Press, Inc. 493-518.
- Schachter, Paul and Fe Otanes. (1972) *A Tagalog Reference Grammar*. Berkeley University of California Press, Los Angeles.
- Sgall, Petr (1974) Zur Stellung der Thema-Rhema-Gliederung in der Sprachbeschreibung. In František Daneš (ed). *Papers on Functional Sentence Perspective*. Prague: Academia.
- 柴谷方良 (1991) 「主題と主語」近藤達夫 (編)『講座日本語と日本語教育 12 言語学要説 (下)』97-126. 東京：明治書院.
- 白川博之 (監修) (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- Simin, Azhar M. (1983) *Discourse Syntax of yang in Malay*. Ph.D. Dissertation, University of Michigan. Ann Arbor: University Microfilms.
- Sneddon, James Neil (1996) *Indonesian Reference Grammar*. Allen & Unwin, St. Leonards.
- Soebardi, S. (1973) *Learn Bahasa Indonesia Pattern Approach*. Kanisius-Bhratara.
- Soemarmo (1971) *Subject-Predicate, Focus-Presupposition, and Topic-Comment in Bahasa Indonesia and Javanese*. University Microfilms, Ann Arbor, Mich.

- Steinhauer, Hein. (1992) On The meaning of *yang* in Indonesian. In Tom Dutton, Malcolm Ross and Darrell Tryon (eds.) *The Language Game: Papers in Memory of Donald C. Laycock*, pp.427-439. Pasific Linguistics Series C-110.
- Steube, Anita (1980) *Temporale Bedeutung im Deutschen*. Akademie-Verlag, Berlin.
- 砂川有里子 (1995) 「日本語における分裂文の機能と語順の原理」『複文の研究 (下)』くろしお出版, pp.353-388.
- 砂川有里子 (1996a) 「日本語コピュラ文の類型と機能—記述文と同定文—」『小泉保教授古稀記念論文集』大学書林 pp.261-273.
- 砂川有里子 (1996b) 「日本語コピュラ文の談話機能と語順の原理—「A が B だ」と「A のが B だ」構文をめぐって」『文藝言語研究 (言語篇)』30 号, pp. 53-71.
- 砂川有里子 (2002) 「日本語コピュラ文の構造と談話機能」上田博人 (編)『シリーズ言語科学 5 日本語学と言語教育』39-70. 東京：東京大学出版会.
- 砂川有里子(2004)「分裂文の構造と機能」代表者杉本武『日本語における話しことばの文法研究』, pp.71-111.
- 砂川有里子(2005)『文法と談話の接点—日本語における主題展開機能の研究—』くろしお出版.
- 砂川有里子(2007)「分裂文の文法と機能」『日本語文法』7 卷 2 号, pp.20-36.
- 田中真理 (1991) 「インドネシア語を母語とする学習者の作文に現れる「受身」についての考察」『日本語教育』74 号.
- 寺村秀夫 (1981) 『日本語の文法 (下)』国立国語研究所.
- 坪本篤朗 (1992) 「条件と時の連続性—時系列と背景化の諸相—」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版.
- Tri Iryani Hastuti, Utjen Dusen Ranabrata & Muh Abdul Khak. (1995) *Kalimat Terbelah (Cleft Sentence) dalam Bahasa Indonesia*. Pusat Pembinaan dan Pengembangan Bahasa Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Jakarta.
- Tiwuk Ikhtiari (2015) 「日本語のヲ格項の主題化文とインドネシア語の di+動詞及び+動詞の構文との対応関係」『二ダバ』44, pp.99-108. 西日本言語学会.
- Tiwuk Ikhtiari (2016a) 「日本語「象は鼻が長い」構文とインドネシア語 “Gajah Belalainya Panjang” 構文について」『二ダバ』45, pp.79-88. 西日本言語学会.
- Tiwuk Ikhtiari (2016b) 「インドネシア語におけるリンカー “yang” について」『インドネシア言語と文化』第 22 号, pp.63-76. 日本インドネシア学会.

- Tiwuk Ikhtiari (2016c) 『日本語の条件節マーカー及び主題マーカーとそれに対応するインドネシア語の *kalau* について』西日本言語学会第 46 回講演・研究発表会発表要旨.
- Tizón-Couto, David (2016) Left-dislocated strings in Modern English epistolary prose – A comparison with contemporary spoken Left Dislocation. In Gunther Kaltenböck, Evelin Keizer, Arne Lohmann. *Outside the Clause – Form and function of extra-clausal constituents*, pp.203-239. John Benjamins Publishing Company. Amsterdam/Philadelphia.
- van der Tuuk, H. N. (1971) *A Grammar of Toba Batak*. Translated by Jeune Scott-Kemball from the original *Tobasche Spraakkunst* (1864) The Hague Martinus Nijhoff.
- Uhlenbeck, E. M. (2003) Old Javanese word structure. In Josef Hladký (ed.) *Language and Function: to the memory of Jan Firbas*, pp.307-314. Studies in Functional and Structural Linguistics 49. John Benjamins.
- Verhaar, John W. M. (1983) On the Syntax of *yang* in Indonesian. In Amran Halim, Lois Carrington and S. A. Wurm. (eds.) *The Third International Conference on Austronesian Linguistics*, vol. 4: *Thematic Variation*, pp.43-70. *Pasific Linguistics*, C-77.
- Verhaar, J. W. M. (2006) *Asas-Asas Linguistik Umum*. Gadjah Mada University Press, Yogyakarta.
- Yamaizumi, Minoru (2011) “Left-Dislocation in Japanese and Information Structure Theory” 国立国語研究所論集, pp.77-92.
- 山泉実 (2013) 「左方転位構文と名詞句の文中での意味的・情報構造的機能」西山佑司編『名詞句の世界—その意味と解釈の神秘に迫る』ひつじ研究叢書（言語編）第 112 巻 p.431-457. ひつじ書房.
- Yap, Foong Ha (2013) Referential and non-referential uses of nominalization constructions in Malay. In *Nominalization in Asian Languages: Diachronic and Typological Perspectives*. Amsterdam: John Benjamins.
- 安田和彦 (2016) 『インドネシア語の-nya に見られる曖昧性』日本インドネシア学会特別大会発表要旨.

辞書

Echols, John M. and Hassan Shadily (1989) *Kamus Indonesia Inggris*. Penerbit PT Gramedia Pustaka Utama, Jakarta.

Labrousse, Pierre (1984) *Dictionnaire Général Indonésien-Français*. Association Archipel, Paris.

Pusat Bahasa Departemen Pendidikan Nasional (2002) *Kamus Besar Bahasa Indonesia*. 3rd edition. Balai Pustaka.

van der Toorn, J. L. (1891) *Minangkabau – Maleisch – Nederlandsch Woordenboek*. ‘S Gravenhage Martinus Nijhoff.

Warneck, Johannes (2001) *Kamus Batak Toba – Indonesia*. Translated by Leonardus E. Joosten from the original *Toba Bataks – Nederlands Woordenboek*. Penerbit Bina Media, Medan.

引用作品

村上春樹 (2004) 『ノルウェイの森（上）（下）』 講談社.

Murakami, Haruki. (2005) *Norwegian Wood*. Translated by Jonjon Johana from the original *Norwegian Wood* (1987) Kepustakaan Populer Gramedia.

謝辞

指導教官である齋藤治之先生に心から深く感謝を申し上げます。研究生として在籍していた頃から修士課程、そして博士課程までの長い間、様々な面においてご指導を賜りました。

ゼミ発表の際に常に意義深いご指摘をくださった齋藤研及び河崎研の院生方々、それから人間・環境学研究科の先生方、大学の関係者の方々にも感謝の意を申し上げます。また、日本政府（文部科学省）奨学金を受給することができ、大学院に進学する夢を実現することができました。文部科学省奨学金制度に対しても謝意を表します。

最後に、これまで自分の信じる道を進んできたことに対して、欠かさず応援してくれた家族・友人に対して感謝します。

以上のような恵まれた環境での修学は、今後の人生における最大の糧となると信じています。

November 2016

Tiwuk Ikhtiari